

発掘調査報告第10集

県営ほ場整備事業大田切(3)地区(昭和54年度分)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 日向坂・赤須城・七免川A 七免川B遺跡

1980

南信土地改良事務所  
駒ヶ根市教育委員会

# 日向坂・赤須城・七免川A

1980

南信土地改良事務所  
駒ヶ根市教育委員会

# 序 文

今回ここに刊行の運びとなった報告書は、県営ほ場整備事業に伴い、昭和54年に実施された発掘調査の報告であります。

北は大田切川、南は中田切川を境界とする赤穂地区は、広い扇状台地状に展開し、その間には、古田切川・上穂沢川・辻沢川・鼠川などの小河川が東流し、田切地形を形成しており、遺跡は中央アルプス山麓や小河川の沿岸に沿って集中して見られ、その濃密な分布を示す遺跡群は古くから学界の注目するところでした。

駒ヶ根市では、これらの遺跡群を対象に、昭和45年以来県営ほ場整備事業に先行して、20数遺跡に及ぶ多くの発掘調査を行って来まして、本年において終了するという経過があります。

今回発掘調査を行った日向坂遺跡は縄文時代中期、赤須城址は室町時代以降、七免川A遺跡は奈良時代から平安時代、七免川B遺跡は縄文時代中期、奈良時代から平安時代と、それぞれ各時代の特徴をよく表わしている遺跡であります。県営ほ場整備事業に先行しての緊急発掘調査ではありましたが、日向坂遺跡では住居址4軒、土址8基、それに貴重な資料であります土偶2個体が、また城の築造や歴史的な背景が問題とされておりました赤須城址の堀、住居址、柱穴址群が発掘されました。さらに、七免川A遺跡では住居址5軒、溝状遺構2基、七免川B遺跡では縄文時代中期の住居址10軒、奈良時代から平安時代にかけての住居址5軒、平安時代以降の住居址1軒が発掘され、これらの遺構に伴って多くの遺物が発見され、今後の研究上に果す役割は大きなものと確信しております。

長い期間にわたって発掘調査をご指導下さいました友野良一団長をはじめ、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に対し深いご理解をいただいた大田切土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚志によって無事初期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝を申し上げますとともに、この報告書が地域の方々や研究者、学界にお役に立つことを念願する次第であります。

昭和55年3月1日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

## 凡 例

1. 今回の調査は、昭和54年度に実施された県営ほ場整備事業大田切(3)地区に伴うものであり、一部七免川B遺跡は文化庁補助事業として実施した。
2. 七免川B遺跡以外の事業は、南信土地改良事業所の委託により、県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって明らかとなった遺構及び遺物を多く図示することに重点をおき、文章記述はできうる限り簡略し、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 遺構関係の図面は気賀沢進、小原晃一が整図した。縮尺はその都度示してある。
5. 土器の実測・整図、拓本は気賀沢、小原が担当した。
6. 石器、石製品の実測・整図は宮下喜代子・宮下妙子が主となり、一部を小原が担当した。
7. 土器の復元は小松義人氏の手をわずらわした。一部小原が担当した。
8. 写真撮影は友野良一、気賀沢、小原が担当した。
9. 本報告書の執筆は気賀沢、小原が分担した。文責は文末に記してある。
10. 遺物及び実測図類は市立博物館に保管してある。

# 目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿 図 目 次	
図 版 目 次	

## 第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査会の組織	1
第 3 節 発掘作業経過	2

## 第 II 章 発掘調査遺跡

第 1 節 日向坂遺跡	3
1. 位置及び地形	3
2. 調査概要	3
3. 遺構と遺物	9
4. まとめ	49
第 2 節 赤須城址	50
1. 位置及び地形	50
2. 歴史的環境	50
3. 調査概要	53
4. 遺構と遺物	55
5. まとめ	92
第 3 節 七免川 A 遺跡	94
1. 位置及び地形	94
2. 調査概要	94
3. 遺構と遺物	99
4. まとめ	119

## 挿 図 目 次

第 1 図 日向坂遺跡位置図	4
第 2 図 地形図	5
第 3 図 遺跡の地形及びグリッド図	6
第 4 図 遺構全測図	7・8
第 5 図 第 1 号住居址実測図	10
第 6 図 第 1 号住居址遺物分布図	11
第 7 図 第 1 号住居址床上、覆土出土土器	13
第 8 図 第 1 号住居址床上、覆土出土土器	15
第 9 図 第 1 号住居址床上、覆土出土石器	16

第10図	第1号住居址床面出土石器	17
第11図	第1号住居址床面出土石器	18
第12図	第1号住居址床面, 覆土出土石器	19
第13図	第1号住居址覆土出土土偶	22
第14図	第2号住居址実測図	23
第15図	第2号住居址遺物分布図	24
第16図	第2号住居址床面, 床上, 覆土出土石器	25
第17図	第2号住居址床面, 覆土出土石器	26
第18図	第2号住居址床面, 覆土出土石器	28
第19図	第2号住居址床面, 覆土出土石器	29
第20図	第2号住居址出土石器	30
第21図	第3号住居址実測図及び遺物分布図	31
第22図	第3号住居址床面一括, 覆土出土石器	32
第23図	第3号住居址床面出土石器	33
第24図	第3号住居址床面, 覆土出土石器	34
第25図	第4号住居址実測図	35
第26図	第4号住居址床上, 床面出土石器	36
第27図	第4号住居址埋土, 覆土出土石器	37
第28図	第4号住居址埋土, 覆土出土石器	39
第29図	第4号住居址覆土出土石器	40
第30図	第4号住居址覆土出土石器	41
第31図	単独埋葬及び単独土坑実測図	42
第32図	単独埋葬出土石器実測図	43
第33図	単独土坑出土土皿及び石器	44
第34図	土坑群実測図	45
第35図	1号土坑覆土出土石器	45
第36図	赤須城址と周辺の主な城址	51
第37図	赤須城址と市内の城址	52
第38図	赤須城グリッド図	54
第39図	赤須城遺構全体図	56・57
第40図	第1号住居址及び小竪穴1～5号	58
第41図	第1号住居址出土遺物	59
第42図	柱穴址1・2号実測図	61
第43図	柱穴址3～5号及び集石址1号, 小竪穴8～11号	62・63
第44図	縦堀実測図	64・65
第45図	縦堀実測図	66・67

第46図	縦堀断面図	70
第47図	縦堀出土遺物実測図	71
第48図	縦堀出土遺物実測図	72
第49図	横堀No.6実測図	78・79
第50図	横堀No.6出土遺物	81
第51図	横堀No.6東城遺構全体図	82
第52図	第2号住居址実測図	83
第53図	第2号住居址出土遺物実測図	83
第54図	焼石址1号と集石址2号,柱穴址6号実測図	85
第55図	集石址3・4号と小竪穴12・15号,柱穴址7号実測図	86
第56図	小竪穴13・14号,柱穴址8号実測図	87
第57図	小竪穴16・20号実測図	87
第58図	小竪穴17~19号,柱穴址9・10号,焼石址2号実測図	88
第59図	柱穴址11号実測図	90
第60図	溝状遺構1号実測図	91
第61図	室状遺構2号実測図	92
第62図	七免川A遺跡位置図	95
第63図	七免川A遺跡地形図	96
第64図	七免川A遺跡グリッド図	97
第65図	七免川A遺跡遺構全測図	98
第66図	第1号住居址及び同カマド,小竪穴1~3号,溝状遺構1号実測図	100・101
第67図	第1号住居址出土遺物	102
第68図	第1号住居址出土遺物	103
第69図	溝状遺構1号(上段)・2号(下段)出土遺物	104
第70図	第2号住居址	105
第71図	第2号住居址出土遺物	105
第72図	第3号住居址及び溝状遺構2号実測図	108・109
第73図	第3号住居址カマド実測図	106
第74図	第3号住居址出土遺物	110
第75図	第4号住居址	112・113
第76図	第4号住居址カマド実測図	114
第77図	第4号住居址出土遺物	115
第78図	第4号住居址出土遺物	116
第79図	第5号住居址カマド実測図	117
第80図	第5号住居址	118
第81図	第5号住居址出土遺物	120

## 図 版 目 次

図版 1	日向坂遺跡遠景	124
図版 2	調査風景と第 1 号住居址	125
図版 3	第 1 号住居址出土遺物	126
図版 4	第 2 号住居址	127
図版 5	第 2 号住居址出土遺物	128
図版 6	第 2 号住居址出土埋襲	129
図版 7	第 3 号住居址と単独土坑、単独埋襲	130
図版 8	第 4 号住居址と出土遺物	131
図版 9	第 4 号住居址埋襲	132
図版 10	1 号～ 6 号土坑及び 1 号土坑出土土器	133
図版 11	赤須城遺跡遠景及び縦堀全景	134
図版 12	第 1 号住居址及び小竪穴 1～ 5 号	135
図版 13	縦堀断面	136
図版 14	縦堀断面	137
図版 15	横堀No.6 断面及び遺物出土状態	138
図版 16	横堀No.6 東城遺構全景、第 2 号住居址	139
図版 17	横堀No.6 東城遺構全景、1・2 号焼石址、2・3 号集石址	140
図版 18	4 号集石址及び小竪穴 14～ 18	141
図版 19	小竪穴 19・20、室状遺構 2、溝状遺構 1、発掘参加者	142
図版 20	七免川 A 遺跡第 1 号住居址、溝状遺構 B(上段)、第 2 号住(中段)、第 3 号住(下段)	143
図版 21	七免川 A 遺跡第 3～ 5 号住、溝状遺構 2 号	144

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

昭和54年度県営ほ場整備事業地区内、日向坂・赤須城・七免川遺跡について南信土地改良事務所より調査の依頼があり、市としては教育委員会を主体とした県営ほ場整備事業大田切(3)地区埋蔵文化財調査会(以下調査会)に委託して事業を進めることとした。

4月16日南信土地改良事務所長と市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を取り交わし、市長と調査会会長との間で再委託契約を結び事業を4月17日から実施した。

## 第2節 調査会の組織

### ●県営ほ場整備事業大田切(3)地区埋蔵文化財調査会

- 会 長 木 下 衛(市教育長)
- 理 事 有 賀 勳(市教育次長)〈会長代理〉
- ◇ 下 村 忠比吉(市文化財審議委員会副委員長)
  - ◇ 宮 下 一 郎(市文化財審議委員)
  - ◇ 松 村 義 也( )
  - ◇ 伊 藤 和 正(市博物館長)
- 監 事 池 上 庫 司(市文化財保存会会長)
- ◇ 佐 藤 雪 洞(駒ヶ根郷土研究会会長)
- 幹 事 松 崎 勝 治(市教委社会教育係長)
- ◇ 北 沢 吉 三( ) 後任(S54・8・6～)
  - ◇ 原 寛 恒(市教委社会教育係)
  - ◇ 気賀沢 進(市博物館)
  - ◇ 福 沢 房 美( )
  - ◇ 小 原 晃 一( )

### ●調査団

- 団 長 友 野 良 一(日本考古学協会会員)〈発掘担当者〉
- 調査団 気賀沢 進( )・市博物館)〈発掘担当者〉
- ◇ 小 原 晃 一(長野県考古学会会員・市博物館)
  - ◇ 小松原 義 人( )
  - ◇ 北 沢 雄 喜( )

調査員	吉 沢 文 夫 (長野県考古学会会員)
◇	田 中 清 文 ( ◇ )
調査補助員	小町谷 元
◇	宮 下 喜代子
指 導	丸 山 敏一郎 (県指導主事)
◇	関 孝 一 ( ◇ )
◇	樋 口 昇 一 (県専門主事)
◇	伴 信 夫 ( ◇ )
◇	笹 沢 浩 ( ◇ )
◇	青 沼 博 之 ( ◇ )
◇	小 林 秀 夫 ( ◇ )
◇	林 茂 樹 (日本考古学協会会員)
◇	桐 原 健 (県史編纂室)
◇	神 村 透 (日本考古学協会会員)
◇	会 田 進 ( ◇ )

### 第3節 発掘作業経過

本年度の調査は3遺跡であるが、七免川遺跡の一部を七免川B遺跡として国県補助事業として行うこととなり、地区では4つとなっている。地点が離れているため、工事の進行に併せて順次行うようにし、4月17日から5月3日まで日向坂遺跡の調査を行った。

7月3日から赤須城址の発掘作業を開始し、測量作業は8月8日まで続くが、8月2日より七免川B遺跡、9月1日より七免川A遺跡と順次、調査を行い、赤須城址の追加調査を9月25日から始めて本年度の調査がすべて終了したのは10月5日であった。

調査団長・調査団員・県教育委員・土地改良区関係者・南信土地改良事務所・地主の方々を始め多くの関係者のご理解、ご指導をいただき、また長期間の発掘に常に献身的に作業に従事していただいた皆さま方のご協力、ご配慮によって、ここに初期の目的を果たし、調査を終了することができましたことについて心から感謝の意を申し上げる次第であります。

(気賀沢 進)

## 第二章 発掘調査遺跡

### 第1節 日向坂遺跡

#### 1. 位置及び地形

日向坂遺跡は、駒ヶ根市下平地籍4、436番地(行政区画は町四区)に所在し、国鉄飯田線駒ヶ根駅より北北東1kmの地点にある。

標高は、650m前後を測り、遺跡の南側を流れる古田切川との比高は、21~22mを数える。

西にそびえる木曾山脈(通称中央アルプス)駒ヶ岳に端を発する大田切川と空木岳より流れ下る中田切川の浸蝕作用によって生まれた扇状地の先端よりに立地する。さらには、大田切川と古田切川の間の台地上であり、古田切川に向かって、その地形は、割りと急勾配である。このような扇状地を開析した幾条かの河川が造り出した地形は、「田切地形」と呼ばれている。

遺跡の地質基盤は伊那礫層からなり、その上に新期ロームが堆積している。

第3図を参照していただくとうまく分かるように、2mをこえる段差が台地にはあり、その高低両地に遺構が存在することは、理解しがたい点もある。

表土は、黒色腐植土で20~30cmを測る。遺構は、ローム層を30cm前後掘り下げて構築されているものの、遺構が各々近い地点に存在し、その様相が異なる点は注意をひくものである。

#### 2. 調査概要

本遺跡は、昭和25年頃水田を一時果樹園に地目転換した経過があり、その当時、この地域をフィールドワークとされていた友野良一氏が、住居址と思われる遺構を確認された。

そして、今回の昭和54年度県営ほ場整備事業大田切地区の整備事業に伴い当遺跡が破壊される現状をまねいた為、事業に先立ち記録保存を目的として発掘調査を行ったものである。

調査方法は、遺構が存在すると思われる箇所周辺の表面採集を行い、遺跡の南西部分の畑の一角を基点として、台地の主軸にそうように10m×10mの主グイを打ち、その中に2m×2mのグリッドを設定した(第3図参照)。東西方向2m毎に1、2、3、南北方向にあい、うとし、適宜にグリッドを掘り、遺構の確認によりその周辺を拡げる方法をとった。

しかし、6~16-た〜とグリッドと、1~41-な〜らグリッドは、工期折衝の関係で、表土を削ぐ作業をブルドーザーに委ね、第4号住居址の調査方法を粗雑にしてしまった経過は、調査の責任を問うものである。

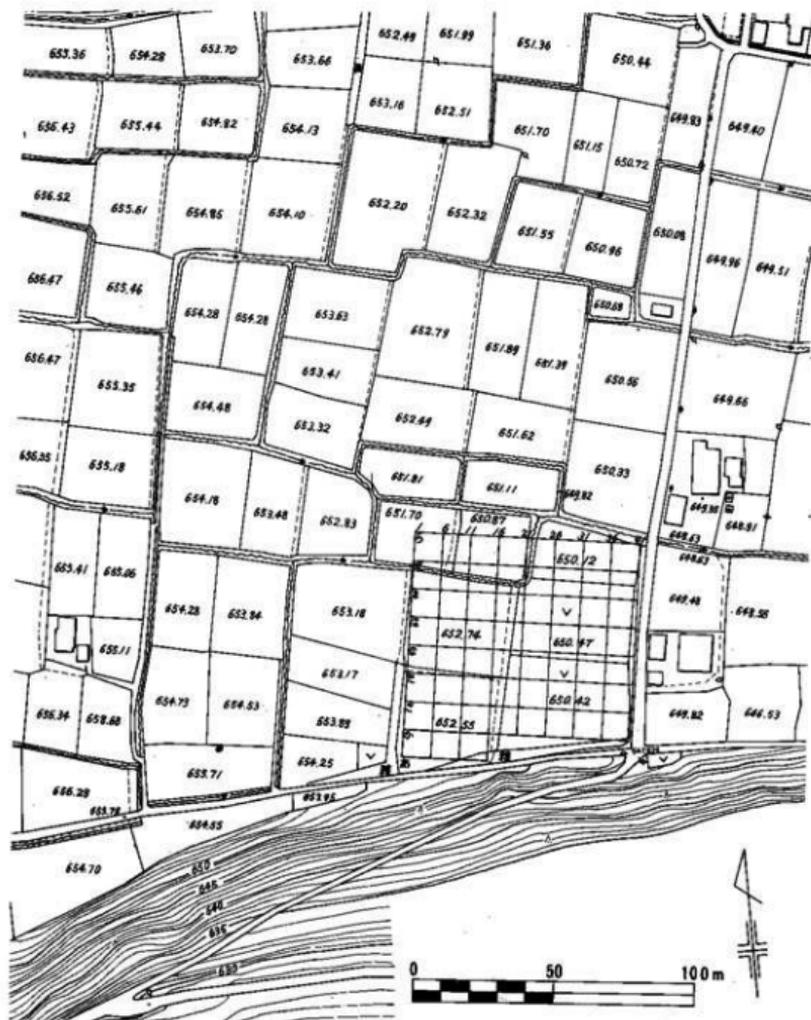
第1号住居址から第3号住居址までの遺物の取り上げは、覆土・床面の主なものをドットし第4号住居址については、その一部にとどまった状態である。確認された遺構は、縄文時代中期後葉~末葉の住居址4軒、土坑6基、単独埋甕1基、単独土坑1基である。



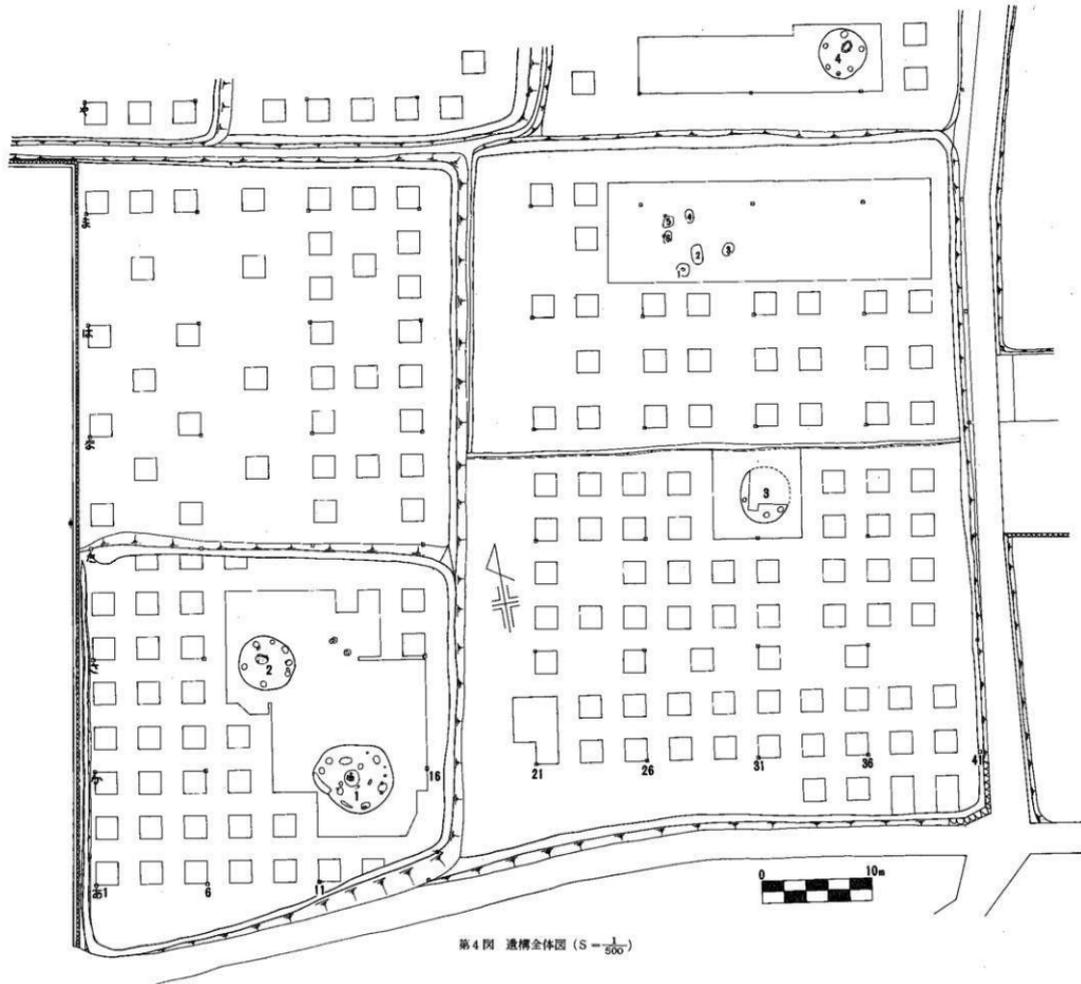
第1圖 日向坂遺跡位置圖 (S -  $\frac{1}{200,000}$ )



第2图 日向坂遺跡地形图 (S =  $\frac{1}{20,000}$ )



第3図 遺跡の地形及びグリッド図 (S— $\frac{1}{2000}$ )



第4回 遺構全体図 (S- $\frac{1}{500}$ )

なお、本遺跡の層序は、次のようである。

- I 層——表土（黒色腐植土）
- II 層——地場（黄褐色土）
- II' 層——◇（暗黄褐色土）
- III 層——埋土
- IV 層——暗褐色土（炭化物，ローム粒含む）
- IV' 層——◇（IV層より黒味を帯び，炭化物，ローム粒，焼土を含む）
- V 層——黒褐色土（炭化物，ローム粒，焼土を含む）
- VI 層——ローム層
- VI' 層——ロームふらん土
- VII 層——木炭化物
- VII' 層——木炭化物（暗褐色土多く含む）
- VIII 層——灰，焼土

基本的には、I、II、III、IV、V、VI層の層位関係を示すが、水田→果樹園→水田というように地目転換の際にVI層が削り取られた部分があったり、III層の埋土の有無、攪乱等により、定まった層を呈していない。

### 3. 遺構と遺物

#### 1) 第1号住居址（第5～13図，図版2，3）

##### 遺構（第5，6図，図版2）

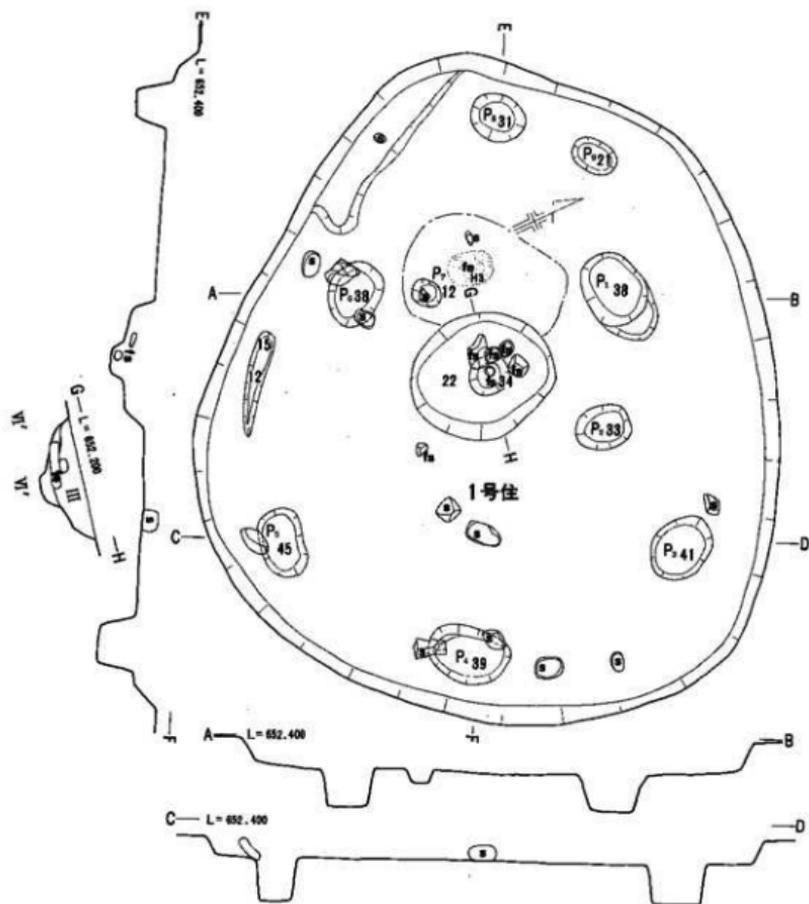
本住居址は遺跡の南西部に位置し、北北西7mに第2号住居址が北側8mに単独埋甕と単独土壇1基が存在している。

壁の掘り込みは東・西壁で30cm，南・北壁で20cm前後である。

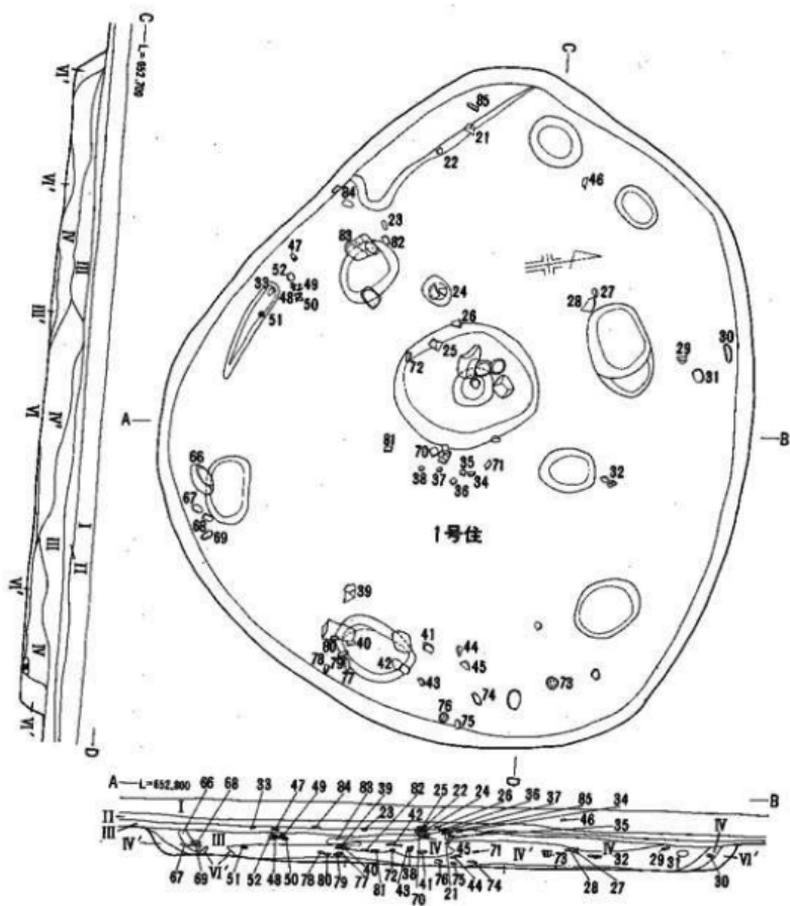
プランは丸味を帯びた楕円形で、一見卵形を呈し、南東側は、ふくらみをもっている。大きさは、長軸6m72cm，短軸3m50cm，中軸で6m20cmを測る。

壁高は、東西で高く、南北で低くなっており、壁は反対に南北で急で、東西でゆるやかな立ちあがりをみせている。

床面は、全体的に軟らかいが、焼土集中の周辺（第5図中、一点破線部分）がたたき床状を呈していた。周溝はなく南西壁よりに長さ1m10cm，幅20cmの溝（生産用の溝か）があり、さらに西壁には、まるで祭壇を思わせるかのような長さ2m10cm，幅50cmに及ぶ段状の遺構が設けられていたが、特別の使用痕跡はなかった。



第5图 日向板遺跡第1号住址实測图(S-ab)



第6圖 日向坂遺跡第1号住居址遺物分布圖(S-6)

炉址は、長軸(SN)1m52cm、短軸(EW)1m34cmを測り、深さは42cmで中心部が直径42cmの円形を呈してくぼんでいる。平面プランは、楕円形である。炉底は、堅く焼きしめられぼろぼろしていたが、すでに焼土はなく、無雑作に投げ込まれた花崗岩の炉石5個と暗褐色土(Ⅳ、Ⅳ'層)とロームふらん土の堆積がみられた。炉址の西側に幅40~50cm、厚さ3cmの焼土が踏みかためられたごとく堆積していたが、炉内よりかき出したものであろうか。

主柱穴は、P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>であり、深さは40cm前後で、柱穴底には、特別の構造はなかった。しかし、P<sub>8</sub>が、やや柱穴列をとび出た状態で存在することや焼土周辺がかたいことから本住居址は拡張された可能性が強く、P<sub>7</sub>、P<sub>9</sub>は、その上屋をささえる柱穴か棚状施設の支柱穴とも考えられる。

さらに、東壁よりの床面は、やや軟弱ではあったが、磨り石、敲打器、剥片、盤状石等の多量の出土は、住居址における生産域を占めるのかもしれない。

住居址内覆土の堆積状態は、第6図セクションC-Dのように、床面と壁にロームふらん土(Ⅳ'層)が、2~8cm、壁よりでは26cm堆積し、住居址中央部に暗褐色土(Ⅵ'層→Ⅳ層)が割りと波をうって20~30cmほど堆積している。その上層に、埋土→地場→表土の順で堆積している。

#### 遺物(第6~13図、図版3)

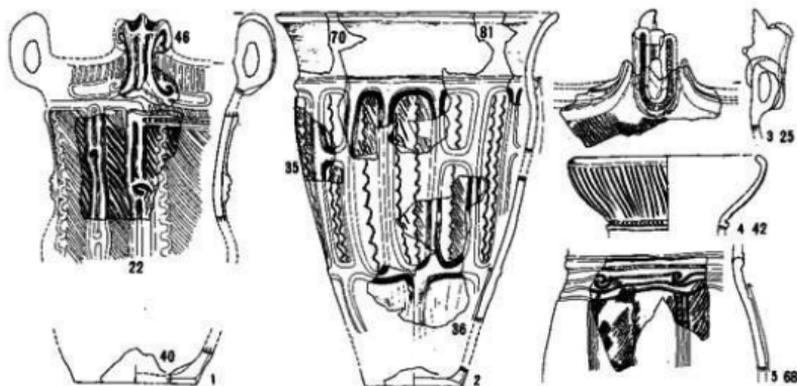
遺物の出土状態は、第6図遺物分布図に示した様相である。遺物の集中は、平面的には住居址の東西中心軸より南で炉、柱穴の周囲に見られる。また、層位的にはⅢ層からⅣ、Ⅳ'、Ⅳ''層に位置し、床面に接するものは、東壁、南東壁寄りのもので、その外は、床上、覆土中に多く位置する。

ここで、調査結果より見た本住居址の遺物の遺存状態を分析すると、東壁寄りの土器、石器剥片の集中区は、住居及び遺物の廃棄時より先行して遺存したものであり、廃棄直後のものは炉中の炉石として考えられ、その外のは、住居の埋没過程のものとして把握できうる。やはり、出土遺物の大半は、ローム床面より7~45cm内に集中している。

#### 土器(第7、8図)

1は4単位の把手を持つ深鉢形土器であり、推定器高39cm、同口径23cm、底径13cmを測る。取り上げ番号22・40・46の接合土器で、住居址覆土中の位置関係は、第6図のようにバラバラとも言える層位に存している。把手は、耳状を呈するもので上部に横位のあばら骨状の沈線を施している。口縁部は、縦の沈線をひきその下にコの字形の沈線をつけているようである。頸部下半は、隆帯による連結する渦文を中心に斜めのヘラ先による沈線をつけ、さらに蛇行隆帯をはりつけている。色調は、赤褐色を呈し、胎土は長石・雲母を多く含む。

2は深鉢形土器で、推定器高40cm、口径30cm、胴径25.6cm、底径10.2cmを測る。色調は、茶褐色



第7図 日向坂遺跡 第1号住居址床上、覆土出土土器 (S一ホ、1~4は床上、5は覆土)  
(断面図で外面の↑はすすの、内面の↑はおこげの付着状態を示す。)

色を呈し、胎土には長石・石英粒を多く含む。文様は口唇部から口縁部にかけては横位のヘラ削りのみで無文であり、頸部には胴部と連結する隆帯を貼り付け大小の楕円文で区画している。その中に、単節のR原体で作った結節回転縄文を1条ないしは2条縦に施している。胴下半部は、その隆帯が自然に消えて行くものと考えられる。

3は、大型の深鉢形土器を呈すと考えられるもので、突起をもった口縁部片である。色調は淡褐色で胎土はこまかい長石粒が多い。文様は、突起部にヘラ先で逆V字状に連続爪形文をつけ、頸部にかけてはRの単節の斜縄文と3条の沈線文が見られる。

4は、深鉢形土器口縁部片で、口径19.5cm、頸部径13cmを測り、口縁は内傾している。色調は黄褐色を呈し、胎土にはこまかい長石粒を含む。文様は、ヘラ削りをした口唇部より、斜めの条線をひき、頸部には横走隆帯を貼り付け、連続爪形文をヘラ先で施している。

5は、胴部片であり推定胴径は20.8cmを測る。色調は茶褐色で、胎土にはやや大粒の長石を多く含んでいる。文様は、地文にRの単節斜縄文をつけ、その上にヘラ先で連結する渦巻の沈線文をひき、3条の懸垂文と1条の蛇行沈線を施している。

第8図の6は、無頸甕の口縁部片で、やや大型のものである。色調は、淡黄褐色で胎土は、こまかい長石・石英粒を含む。文様は、口唇部を誇張して肥厚させ、3条の横走隆帯を貼り付け、その間に蛇行隆帯をさらに貼り付けている。胴部にはこの単節斜縄文をつけ、楕円文と蛇行文を沈線で施している。

7は、耳状の突起をもつ口縁が内傾した深鉢形土器の口縁部片である。色調は、暗褐色を呈し、胎土は雲母と長石を多く含む。文様は、耳状の突起の両側に渦巻文をつけ、口縁にそってヘラ先による連続爪形文へと移行し4条施されている。耳状突起の間には、内面から外面に向

かって太い沈線の渦巻文がつけられ、頸部にかけて太い沈線と細い沈線が粗雑にひかれ、頸部には連結する渦巻文であろう沈線が施されている。類型は、あまり見られないものである。

8は、口縁がやや外屈するもので、文様は口縁部で横位のヘラ削りのみであり、頸部下半にはLの単筋斜縄文を施している。

9は、内彎する口縁をもつ深鉢形土器の破片で、沈線による渦巻文と条線がひかれている。第2号住居址出土の第16図4・5の土器と類似するものである。

10は、山形状の口縁を有し、口縁はやや外傾するだけで直立口縁に近い。口唇部には、爪先で押捺した痕跡があり、文様は地に粗い斜縄文をつけ沈線で粗雑なジグザグ文を施している。器形、施文においてあまり類例をみない。

11は、こまかい斜縄文を施している胴部片である。

12は、本住居址出土の土器の中で古い時期に属するものであり、J字を呈すると思われる隆線に連続爪形文をつけ、周りを斜条線でうめている。

13は、粗い斜縄文を地文とし、沈線で楕円文、懸垂文、半楕円文を施している。

14・15は、同一個体の胴部片で、細い縦の条線を地とし、沈線で連結する渦巻文、蛇行文をつけている。

16は、燃糸文の上にジグザグ文を施すものである。

17・18・19は、底部上端の部位の土器片で、17と19は、隆帯による懸垂文を中心に条線を施すものであり、18は3条の縦の隆帯懸垂文を貼り付け、ヘラ先で逆8の字の沈線をつけるものである。

20・21・22は、ともに底部片で底径はそれぞれ13.5cm、15.8cm、16.6cmを測り、20は、底に木葉圧痕がある。22は、3条と2条の隆帯による懸垂文の貼り付けと沈線がみられる。

23は、4塊の土錘であり、無文胴部を使用している。側面全体を磨っていて、土器外面部にはすすかタール状炭化物の付着がみられる。長さ5cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ14gを測る。

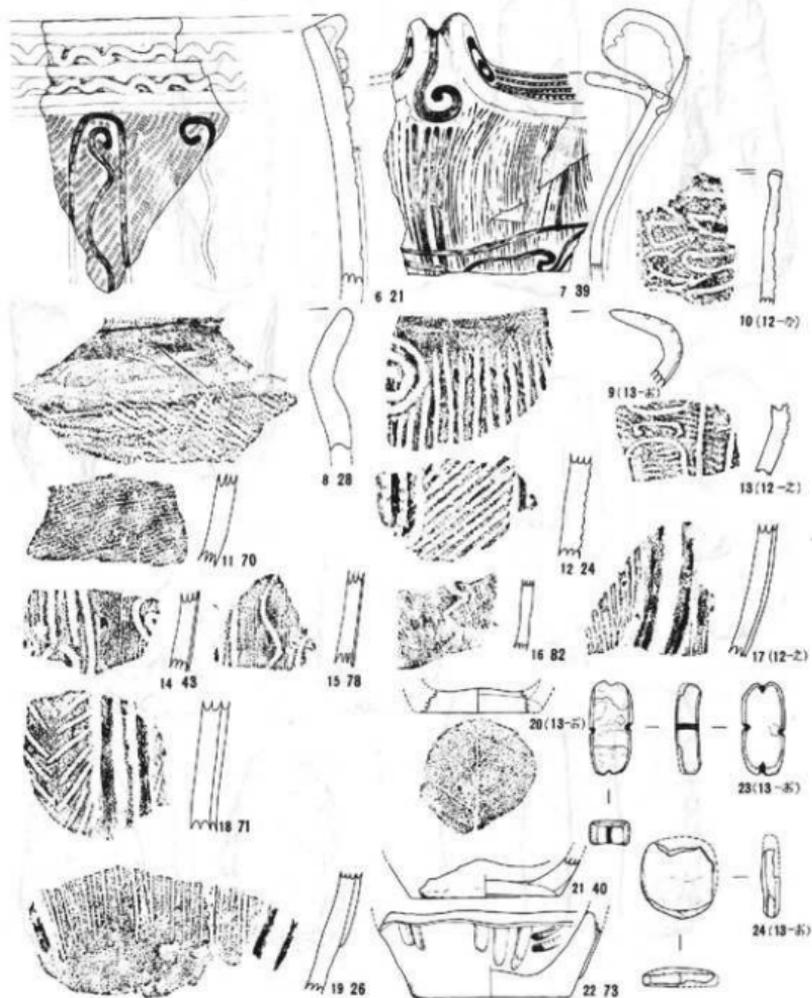
24は、土製円版で、無文の底部片を使用していて、一部欠損するが長さ4.2cm、厚さ1cm、重さ14gを測る。側面全体を磨っている。

第7・8図中、覆土出土の土器は、5・9・10・13・17・20・23・24で、床面直接のものは22のみで、外は、床直上暗褐色土層出土のものである（ここで言う床直上と覆土の相違は、覆土下層のものを床直上とし、上層のものを覆土として言葉を使用する。以下同じ。）

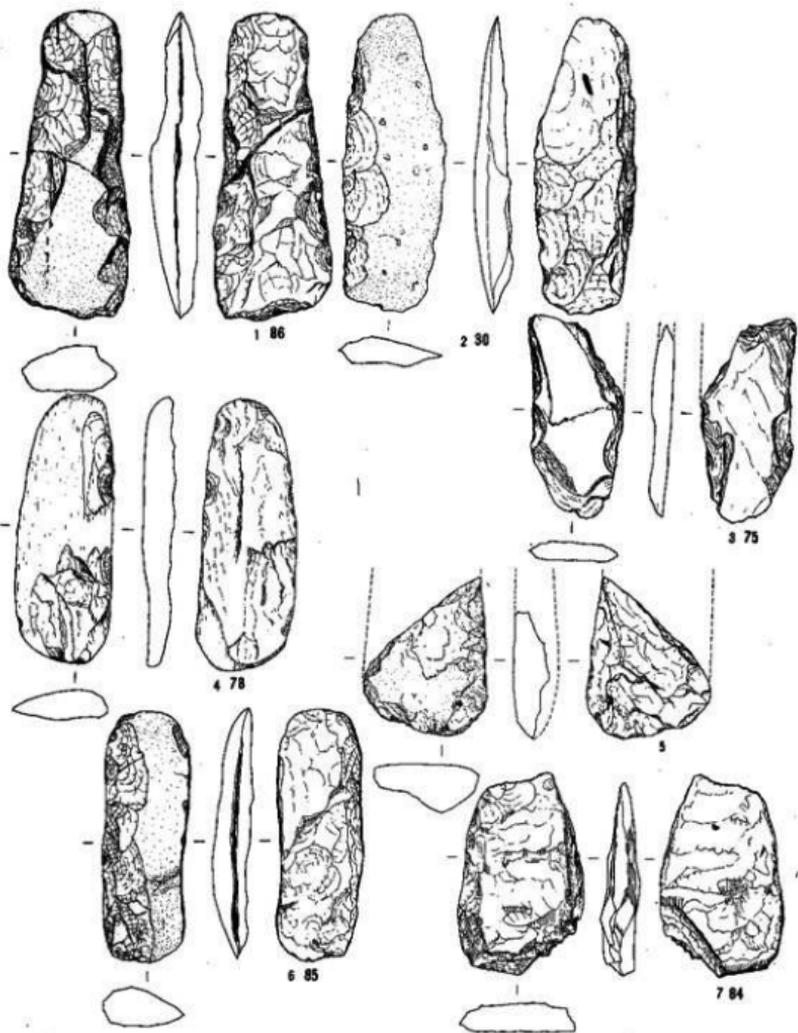
第1号住居址出土の土器は、総じて、曾利式Ⅰ式の末からⅡ式全般に比定されるであろう。

なお、本住居址では、加曾利E式の影響を受けたと考えられる土器片は2のみであり曾利式の影響を受けたものがほとんどである。加曾利E式の影響を受けた土器は、第2号住居址、3号住居址、4号住居址には確認され、その出土率は注意するものがある。

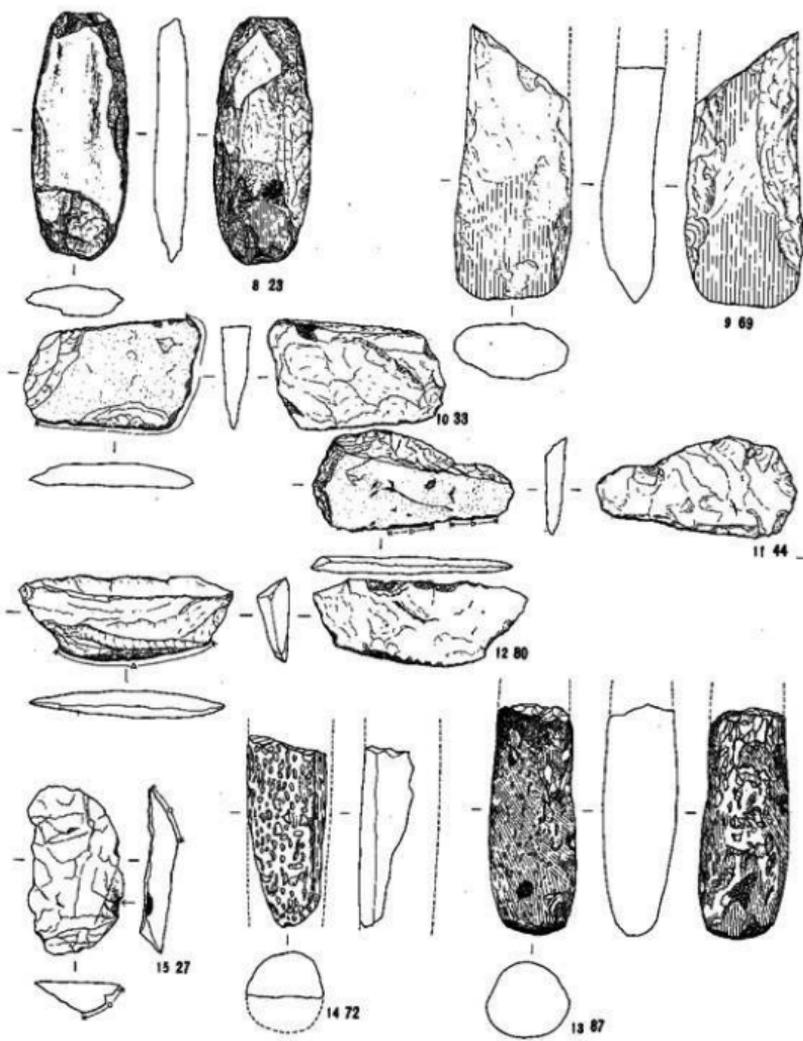
また、3・6・7・10は、曾利式の影響を受けながらも、地域性を創出した土器として位置付けられるし、土器形態や文様の「旧→新→旧・新」の変遷を想起させる様相を示していると考えられる。



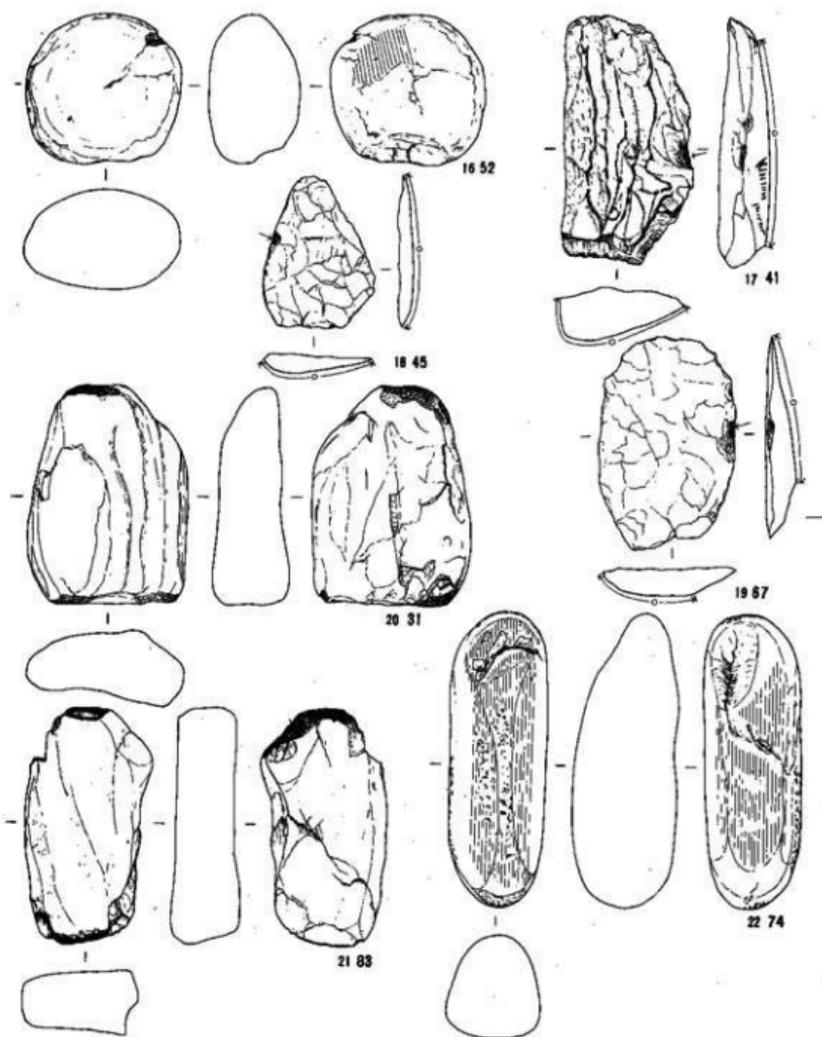
第8図 日向坂遺跡第1号住居址床面、床直上、覆土出土土器(S一十)  
 (9・10・13・17・20・23・24は覆土、22は床面、他は床上)  
 (小文字は整理番号、大文字は取り上げ番号を示す)



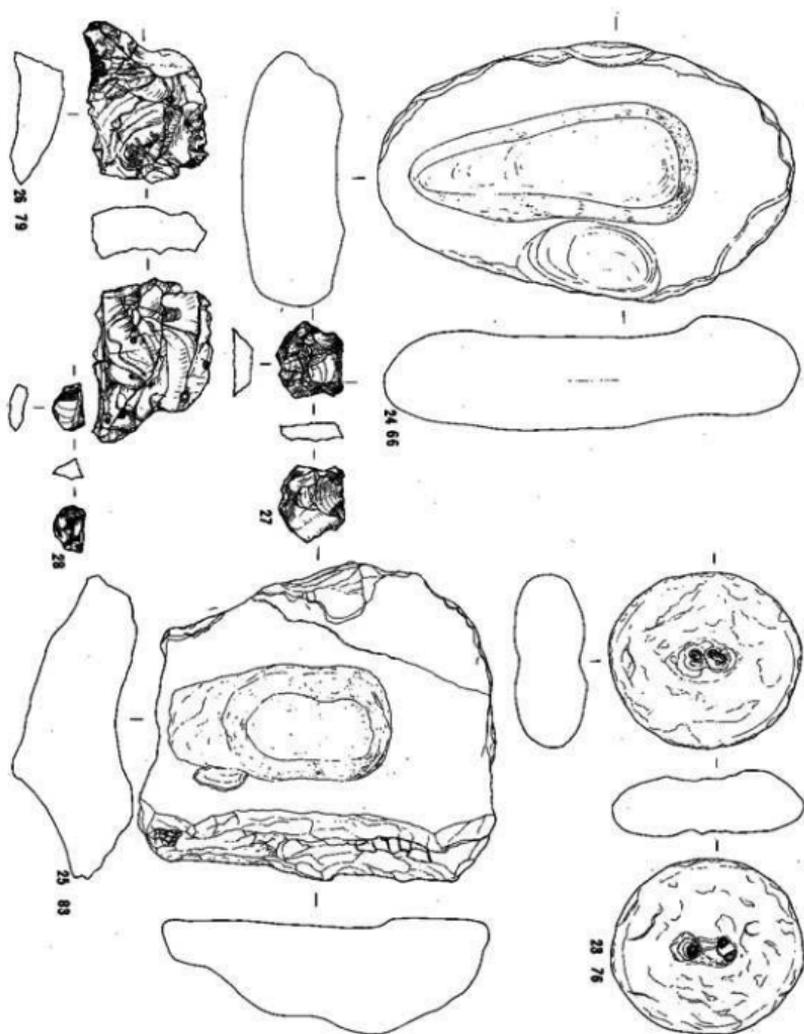
第9圖 日向取遺跡第1号住居址床面，覆土出土石器(S-1)



第10图 日向坂遺跡第1号住居址床面出土石器(S-4)  
 (実測图中, ←○→は自然面, ←△→は使用痕を示す)



第11图 日向坂遺跡第1号住居社床面出土石器(S-1)



第12図 日向坂遺跡第1号住居址床面，覆土出土石器（24・25はS-4，他はS-4）

### 石器 (第9～12図, 図版 3)

本住居址の石器類は、比較的打製石斧と敲打器が多く、またさらに石皿の完形品が2点出土している点も注意される。

短冊形の打製石斧は1～4・6 (第9図) 8・9 (第10図) が見られ、4・8・9は緑泥片岩製でその外は硬砂岩製である。片面に自然面を残すものが多く、1・6は側面刃部に擦痕としての使用痕が顕著に観察できる。

8・9は刃部の調整は磨っており、特に9は打製石斧と磨製石斧の中間的な様相を示していることから、分類にまようものであるが、ここでは半磨製石斧としてとらえておく。

鋸形の打製石斧は5・7があり、5は覆土出土のものである。7は刃部上端と側面を少し磨っている。

10～12は横刃形石器として扱えられるもので、実測図中←△→は使用痕を表わす。剥片を使用したもので、12は自然面はみられず刃部もしっかりしている。3点とも硬砂岩である。

敲打器は第10図13, 14第11図17・20～22があり、13・14・15が棒状を呈し20・21が石核状を呈し、17は剥片である。13・14は砂岩ホーンフェルス製で13は特に両端を敲打、側面を磨っている。20・21はともに頁岩製で両端をよく敲打している。22は硬砂岩製のものである。

16は円形の磨り石で花崗岩製である。

凹石は第12図23の1点であり、表・裏面ともに2箇所凹んでいる。花崗岩製である。

24・25は石皿であり、24はP<sub>6</sub>柱穴に、25はP<sub>6</sub>柱穴に落ち込むかのように遺存して検出された。24は長さ44.0cm, 幅27.4cm, 厚さ10cmを測り、25は長さ37.3cm, 幅33.0cm, 厚さ11.3cmを測り、割りと大型のものである。皿底部もよく磨り減っている。25の右側面に、まるでノミのような道具で割り入れたような5箇所程度の痕跡があるが調整痕か自然の作用なのかは判別しにくい。

26は黒曜石の石核で、27・28は剥片である。本遺跡においては黒曜石の出土量が非常に少なく、1号住床面から石核が出土したことは貴重でもある。

15・18・19は床面に散在していた硬砂岩の剥片を載せたものであり、打撃痕の状態が観察できる。

### 土製品 (第13図, 図版 3)

本住居址の南西壁寄りの覆土一暗褐色土層より2個体の土偶が発見された。第6図中の47と51が接合して第13図1となり同様に48・49・50が接合して2となったものである。

出土状態は床面より7・8cm上位の覆土より出土し、50・51の顔面部は地に伏す形で、47の胴部も伏し、48の胴部、49の脚部はともに横向きの状態であった。特に埋葬したり、特別な施設を設けているものでもなく、無雑作に置かれていたと判断した。しかし、2個体が一定のまとまりをもって遺存していた事実は、廃棄時点で意識が働いた結果であると考えられる。

1は現在の高さ12.4cm, 胴幅4.7cm, 顔の長さ2.7cm, 幅2.7cm, 頭の奥行3.4cm, 幅3cmを測

る。顔は、額の部分が平らで、えらまで角ばっていてあごはややくぼんでいる。極めて人間の顔に似ており、大きな眼と縦長の口は何かを大声で叫ぶかのような表現をしている。このことをさらに意味付けるのは、おごが前に突き出ていることであり、叫ぶなり大声を出す時の顔とは眼が大きくなり口がいっぱいに開きおごが前に出る状態をとるものである。乳房はやや上向きで肩とだいたいぶ間をもって付けられているが、やや大型の土偶に属すると考えられるもの故にそのことは当然でもある。施文はヘラ状施工具による沈線であられ、頭には髪毛を表現するような頭頂より首にかけての縦の線を、耳のあたりから首をまく横の線と渦巻をつけている。乳房の下には、その間からへそに向かい縦の隆線を貼り付け、渦巻文として発達すると思われる沈線を胴部につけている。胸と背は、ヘラ削りがなされている。

両腕と臀部（でんぶーおしりの部分）と脚部を欠く本土偶は、その作りにおいて、もし何かの目的で壊されたのであるなら、壊れ易い状態に製作されたとも考えられる。なぜなら、首のつけ根、両腕のつけ根、胴のつけ根は、それぞれ各部分の接合部でありその痕跡が明確に観察できるからである。

原形を復元するならば、同形態の2の土偶の比率をもってあてると、臀部→頭頂、臀部→足裏の比が6.3対3.7の割合であり、1の土偶の臀部から頭頂までが12.2cmであるから、臀部から足裏までの長さが7.1cmであり推定の高さが9.3cmとなる。両腕はこの土偶の腕の比率（高さに対する腕の幅をもってすると）で12cmとなる。足の大きさはこの土偶の高さ対足の大きさの比1.5:5.8で、7.5cmとなる。

2は高さ15.0cm、胴幅最大4.5cm最小3.0cm、顔の長さ2.3cm、幅3.3cm、頭の奥行2.9cm、幅3.2cm、両腕の長さ9.3cm、臀部の幅2.5cm、股下2.3cm、足の長さ5.8cm、幅2.7cmを測る。顔はひし形を呈し、両眼はややたれており口も丸い。あごは1同様前に突き出ている、1とは対照的にまるで口笛でも吹いているかのような顔つきである。乳房はやや上向きで体つきの割りには小さいと言える。施文はヘラ状施工具による沈線であられ、頭には片側3本の連続爪形文がつけられている。1同様、乳房の間からへそにかけて隆線が貼り付けられ、渦巻文を胴部臀部にかけて沈線であられ、さらに背中には両腕を結ぶかのように横の線、脇腹から臀部にそって2本ないし3本の沈線がつけられている。脚部には、渦巻文の沈線が連続爪形文に変化して2本ないし3本施されている。足の大きさは、体つきの割りに5.8cmと大きく、3本の指が表現される。両腕の先端部に切り込みがあり手の指を表現するものであろう。

全体的な形は、左足くびより下の足を欠くのみであり、顔はやや前上方を仰ぎ、やや右前方を向き、両手をいっぱいに広げ、どっしりと両足でふんばっている様である。

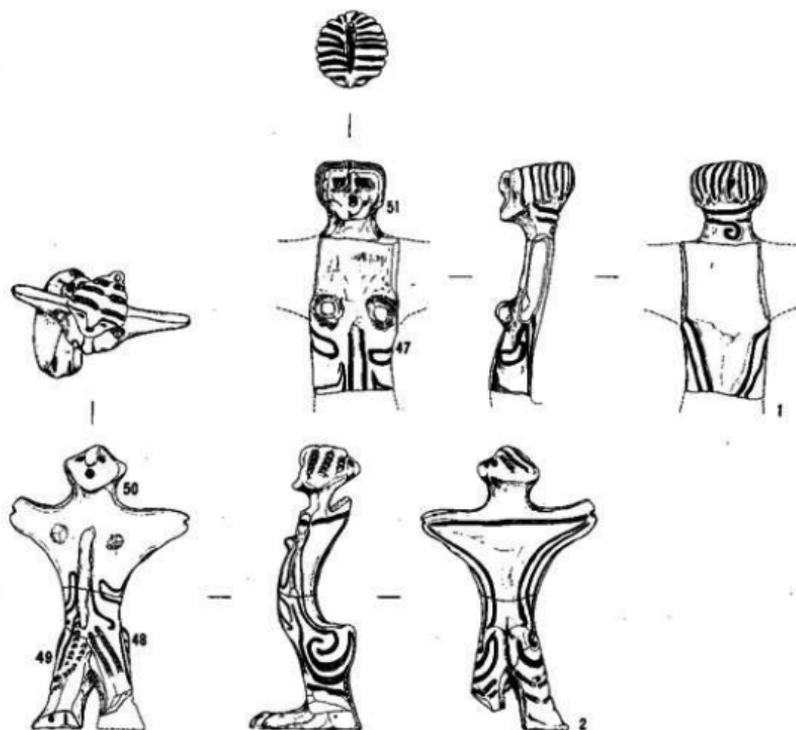
1・2ともに、後頭部にはやや斜めに孔が1個づつあけられていて、2の場合、細い紐でつるしてみると、バランスよくつり下がる。

1・2は、顔の形が異なる点を除けば、施文・形態とも極めて近似するものである。さらに製作過程を観察してみると、1では各部位をあらかじめ作っておいて接合したものであるが、2は基礎の芯をつくり粘土を徐々に貼り付けて行き形づくったものである。調整は1・2ともにていねいで、最後にヘラ削りで仕上げている。色調はともに淡黄褐色で胎土には長石を多く

み、焼成は良好である。

上伊那地域（北は辰野町から南は中川村）における土偶の出土例は、170点余でありその内縄文時代中期に属するものは約80例を占めると辰野町立郷土美術館の赤羽義洋氏より未発表の論考と御教示を受けたことに厚く感謝したい。

日向坂遺跡第1号住居址出土の土偶2例は、中川村片桐刈谷原遺跡表採資料、飯島町尾越遺跡出土土偶（長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡飯島地区内その1 昭和46年度）に近似する。本土偶の時代的位置は八ヶ岳山麓地域の曾利Ⅰ式末から曾利Ⅱ式にかけて（関東地域の加曾利EⅠからEⅡ式）のものに比定できうるが、両手をいっばいに広げ臀部の出っばった（通称でっちり）形態は、上伊那地域の地域性を表出しているものである。



第13図 日向遺跡 第1号住居址覆土出土土偶 (S-1)

2) 第2号住居址 (第14~20図, 図版4~6)

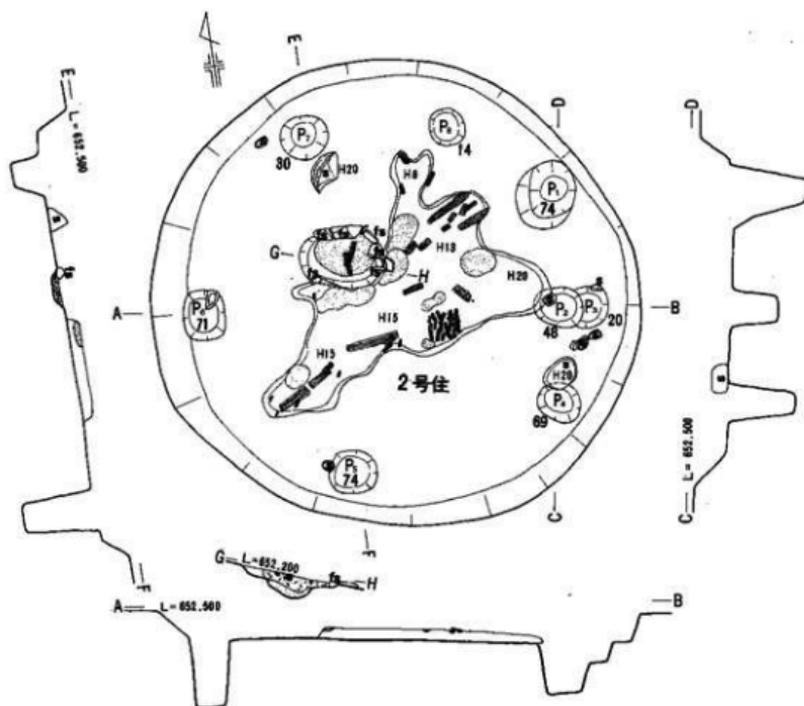
遺構 (第14図, 図版4)

本住居址は1号住居址と同一台地上にあり, 1号住居址より北北西に位置する。

掘り込みはハードローム層を掘り込んだもので, 層序は, I層-18~23cm, II層及びII'層-6cm前後, III層-8cm前後, IV層-12~34cm, IV'層-10~28cm, V層-20cm前後である。

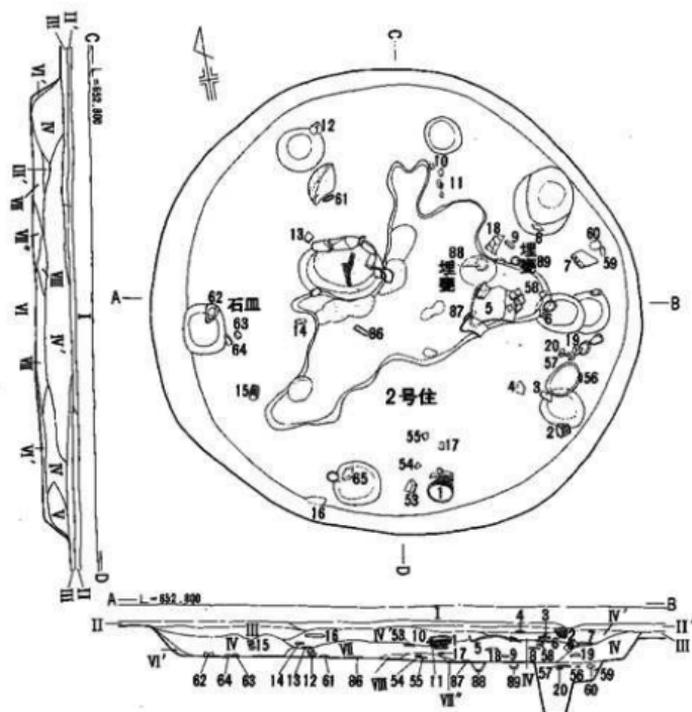
プランは南北軸4m92cm, 東西軸5m20cmでほぼ円形を呈する。壁は西壁で30cm, 東壁で23cm, 南・北壁で28cm前後の立ち上りをみせ, やや東壁が低い。

床面は堅緻で平坦である。周溝及び住居址内外の付属的遺構は存在しなかった。



第14図 日向坂遺跡 第2号住居址実測図 (S-十)

柱穴はP1・P2・P4～P7の6本であり、P1・P4～P6は70cm前後の深いものであった。  
 炉址は床面中央よりやや北面にあり長軸92cm、短軸66cm、深さ25cmを測り、有段の炉址である。  
 炉石は石棒と思われるような長細い石を北側に置き東壁に5個が確認され、西壁には炉石の抜き取りのような痕跡がみられた。炉底部には6～9cmの焼土が堆積し、その上に8～16cmに及ぶ焼土・灰・木炭化物の混土層が堆積していた。炉石は総て花崗岩である。  
 本住居址は火災にあつたらしく床面中央部には上屋の木材と思われる炭化材と焼土、細かい木炭化物が8cm～20cmにわたって堆積していた。  
 床面P4・P7の周辺には石器等の加工具と考えられる大きな花崗岩石が2個置かれていた。



第15図 日向坂遺跡 第2号住居址遺物分布図 (S-a6)

遺物 (第15~20図, 図版 5)

遺物の出土状態は第15図遺物分布図に示したものであり、層位的には東壁寄りIV, IV'層覆土中に多く、床面より出土の遺物は土器より石器の方が多かった。

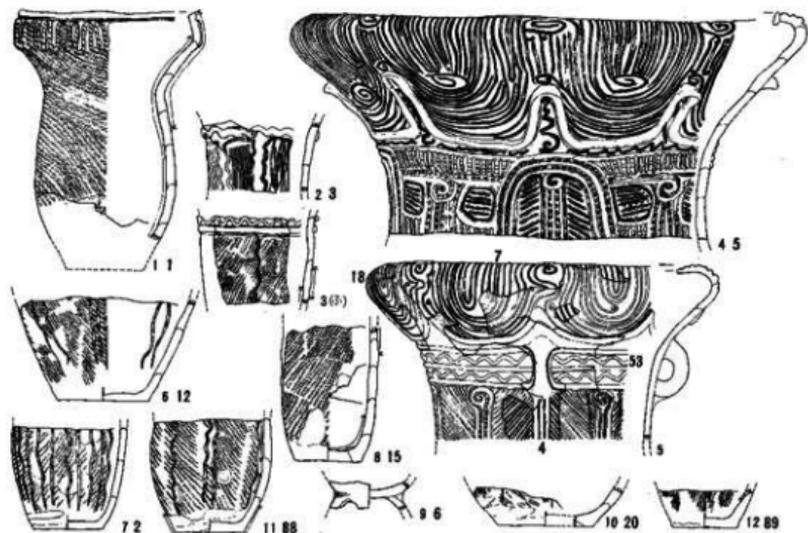
埋室が炉址より東へ一直線上に深鉢形土器の胴下半部と底部の2点が床同レベルと床ルーム面下に検出された。

土器 (第16・17図, 図版5, 6)

1は底部を欠く深鉢形土器で、現器高24.0cm、口径18.2cm、胴径14.8cmを測る。色調は茶褐色を呈し胎土はやや粗い長石・石英を多く含み、焼成は良好である。内面におこげの付着が著しい。施文は口縁にそって1条の横走沈線を引き、隆線で蛇行隆帯を表わし、隆帯の上から胴下半部にかけて無節の斜縄文を転がしている。胴下半部にはヘラ削りを斜めに行っている。

類似例はあまり見かけない形態の土器であるが、駒ヶ根市赤穂南割横前新田遺跡(大城林・北方I・II・湯原・射殿場・南原・横前新田ほか 一緊急発掘調査報告-1974)より同様の口縁部片が1点出土している。

2は深鉢形土器の頸・胴部片で横走る蛇行隆帯を頸部に貼り付け、その下位にはヘラ先で横の沈線と縦の蛇行懸垂文で区画し、その中に糸線を施している。



第16図 日向坂遺跡 第2号住居址床面、床直上、覆土出土土器(S-1)  
(3は覆土, 1・2・4~10は床土, 11・12は床面)

3は頸部に蛇行隆帯と横走隆帯を貼り付け、胴部に単節の斜縄文を施したものである。

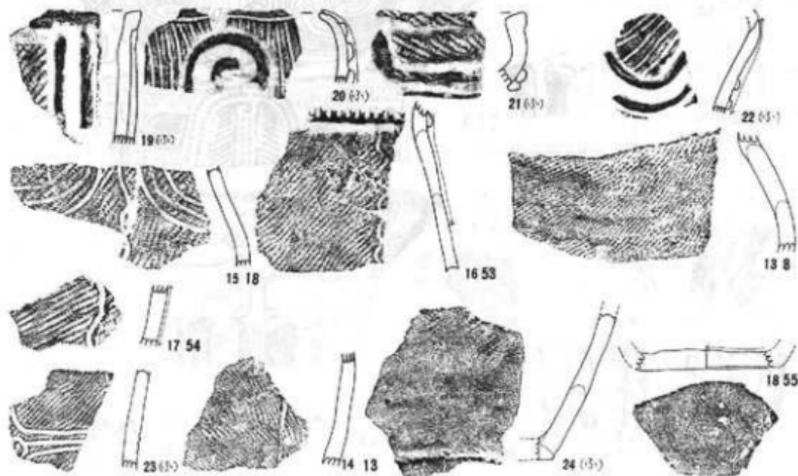
4・5は住居址床上20cm前後より出土したもので、半分を重ねるような出土状態であった。4は現器高24.0cm、口径47.5cm、胴径33.8cmで、胴部接合部より意識的に切ったもので、口縁は内彎している。施文は口唇部より頸部にかけてヘラ状施文具で同心円状の渦巻文を施す。その間に8単位の連続する山形の隆帯貼り付けを行い、その中に縦と横の蛇行沈線をつけている。頸部には隆線による格子状の貼り付けと縦、横の楕円文の貼り付けを行い、それぞれの中に連続爪形文を施す。5は4同様口縁部は内彎しており、耳状の把手がついていて、何単位か解からないが3個出土している。施文は4に類似するが、頸部には横走する蛇行隆帯が2条貼り付けられ、さらに胴部には渦巻隆帯と斜条線がつけられている。4は口径28.2cm、胴径21.6cm、現器高18.5cmを測る。4は淡褐色、5は灰褐色を呈し、ともに多くの長石・石英粒を含み焼成は4が良、5が良好で5は特に内面を割りとしていねいなヘラなでをしている。

類例は、飯島町尾越遺跡土坑7、諏訪市荒神山遺跡第85号住居址、岡谷市海戸遺跡出土の土器に求められ、時期的には曾利Ⅰ式末から曾利Ⅱ式に比定されよう。

6・7、10-12は単節の斜縄文にヘラ先で懸垂文・蛇行沈線を施したもので、6は底径9.8cm、7は7.2cm、10は10cm、11は7.2cm、12は6.6cmを測る。色調は赤褐色と茶褐色を呈し、12のみ淡黄褐色を呈す。胎土は長石・石英のこまかい粒子を含む。曾利Ⅰ式からの影響を強く受ける。

11・12は床面に埋甕として利用されていたが、土器中の土からは自然遺物等は発見されなかった。7・11・12は接合部で切っている。

8は胴長の深鉢形土器で胴上半部を欠く。底径6.8cmを測り、内面の底にはおこげの付着が著しい。施文は単節縄文をつけている。



第17図 日向坂遺跡 第2号住居址床面、覆土出土土器(S=+)ふは覆土

9は台付土器の破片であるが器形の全体像はつかめないし、文様構成もはっきりしない。

13は胴部の張る深鉢形土器の頸部片と思われ、細く撚った長い単節の縄文原体を縦に転がしている。

14・15・17は単節の斜縄文を地としその上にヘラ状施文具で蛇行沈線、渦文、懸垂文をつけたものである。

16は頸部に隆帯を貼り付けヘラ先で刻み目をつけ胴部には斜縄文を施して縦に2条の蛇行懸垂文をつけたものである。

18は無文の底部で、底がやや上がっている。

19は直立口縁をなし、口縁を肥厚させ無節縄文を地文とし縦の隆帯懸垂文を2条貼り付けている。

20は内嚢する口縁部片で隆線の渦巻文を貼り付け斜条線をひいている。

21はやや内傾する口縁をもち、口唇部から斜縄文をつけ隆帯の上までその縄文が及んでいる。

22は口縁部片で口唇部を欠き、櫛目文の変形のような施文がなされている。

23は、先の15と同様な土器片である。

24は深鉢形土器の底部片で、底に木葉圧痕の痕跡がいくらかみえる。

総じて曾利Ⅰ式半ばから曾利Ⅱ式初めに位置付けされよう。

## 石器（第18～20図）

第2号住居址出土の石器は打製石斧と磨り石が割り合い多く出土している。

1～5・6・11・19・21は短冊形の打製石斧であり、5・11以外は硬砂岩である。4・5の側面には使用痕が顕著にみられる。5は花崗岩、11は粘板岩製であり11を果たして打製石斧短冊形として扱って良いかは疑問が残るがここでは入れておく。

撥形の打製石斧は7のみで頁岩製であり、側面に使用痕がみられる。

8～10は、磨製石斧で短冊形であり、8は半磨製石斧で緑泥片岩製である。9・10は、定角と言うよりは短冊形としておく。9は硬砂岩、10は砂岩ホーンフェルス製で、特に10は製作痕と使用痕が観察できる。

12・13は横刃石器で、剥片使用であるが、13には特に使用痕が顕著にみられる。ともに硬砂岩製である。

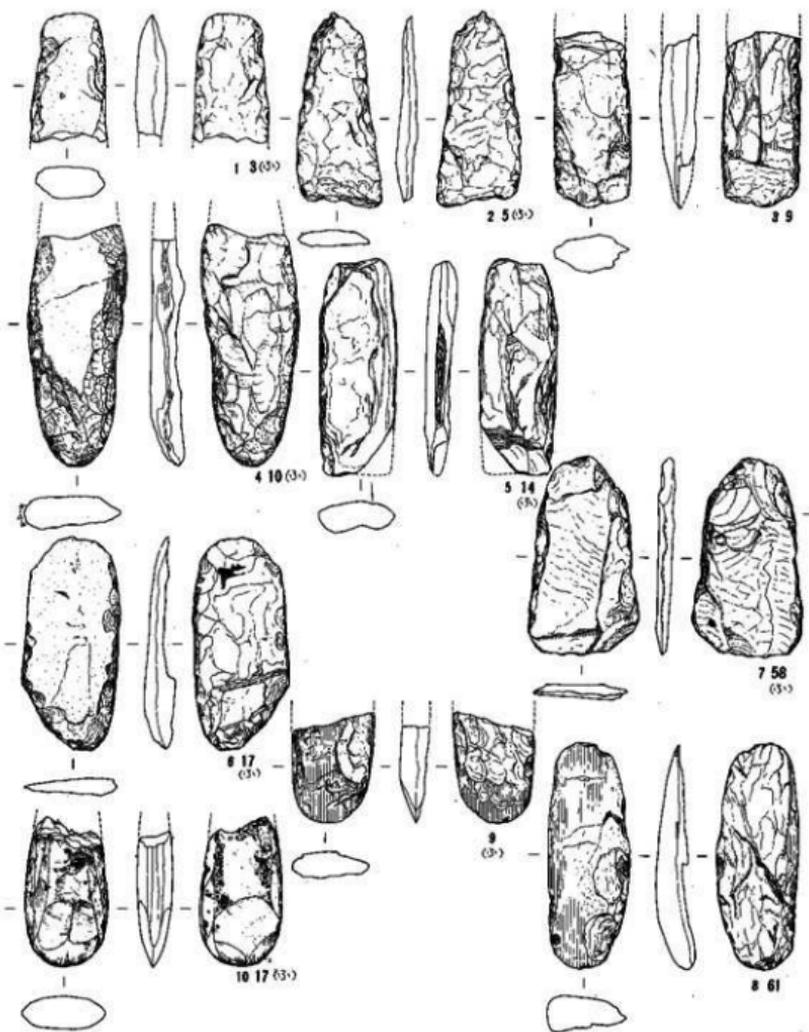
14は磨り石で長石質の花崗岩で白色を呈する。15・22・23も同様に磨り石で、15は頁岩、22は花崗岩、23は砂岩であり15は両端を敲打している。

24は花崗岩製の石皿である。

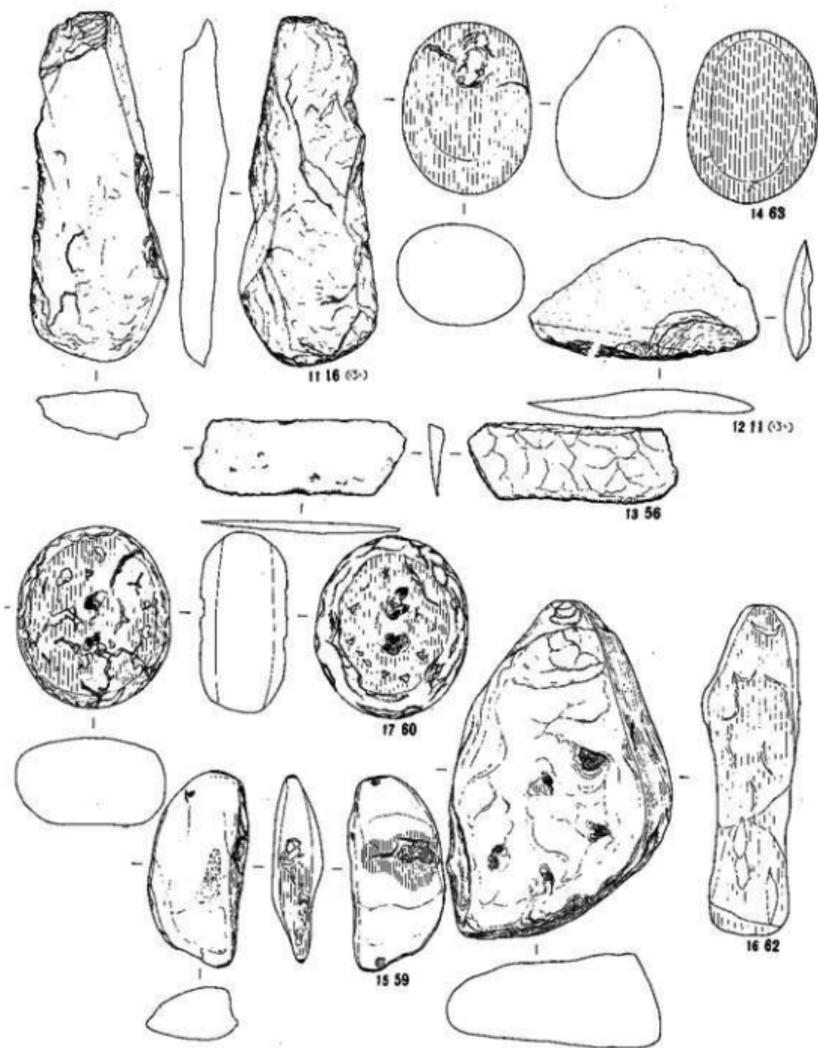
20は硬砂岩製の横型の石匙であり刃部が欠損している。

25・26は黒曜石の剥片でリタッチのあるものであり、擲器であるかは判別しにくい。

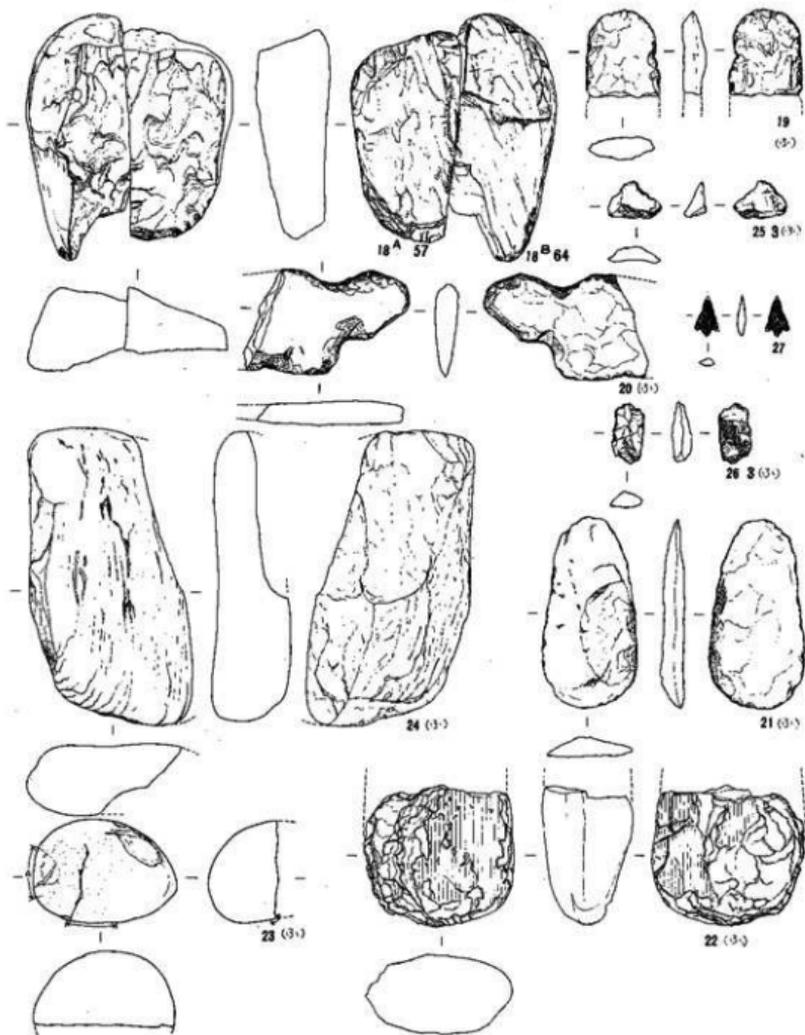
27は、黒曜石製の有茎石鏃であるが、調査前の表採資料である。



第18図 日向坂遺跡 第2号住居址床面，覆土出土石器 (S-1)  
 (ふは，覆土)



第19図 第2号住居址床面，覆土出土石器（S-1）  
（ふは，覆土）



第20图 第2号住居址出土石器 (S-1)  
 (ふは、覆土)

### 3) 第3号住居址 (第21~24図, 図版 7)

#### 遺構 (第21図, 図版 7)

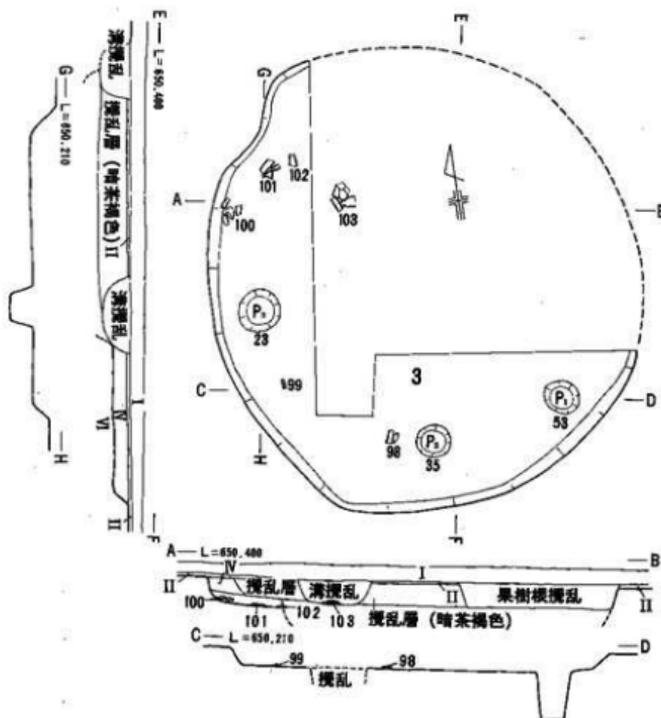
本住居址は1・2号住居址の存在する台地より2m下の水田の地場下より発見された。

掘り込みは現在のレベルより高い位置(15~20cm)からであったと思われ、開田時・地目転換時の攪乱を受けている。

プランは北・東壁が攪乱を受けはつきりしないが、およそ南北軸4m90cm前後、東西軸4m60cm前後の円形を呈するものと推測できうる。

床は堅緻で平らであったが、全体の5分の3ほどが攪乱を受けている。

柱穴は3本確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>がそれである。壁の高さは20cm前後残存している。



第21図 日向坂遺跡 第3号住居址実測図及び遺物分布図 (S-6b)

遺物（第21～24図）

出土遺物は攪乱を受けた住居跡の為、遺存状態が不明確であったが、第21図遺物分布図に見られるように石器がまとまって床面より発見された。土器については攪乱と床面との境にあった為、一応床面として取り上げた。

土器（第22図）

1は内側する口縁部片で隆線の貼り付けにより楕円文や渦巻文を形づくっている。表面にすずが付着する。

2は外反する口縁をもち口唇部をやや折り返す形となっていて斜条線がみえる。

3・5・6は結節回転縄文を隆帯の間に施すもので、5・6は同一個体である。

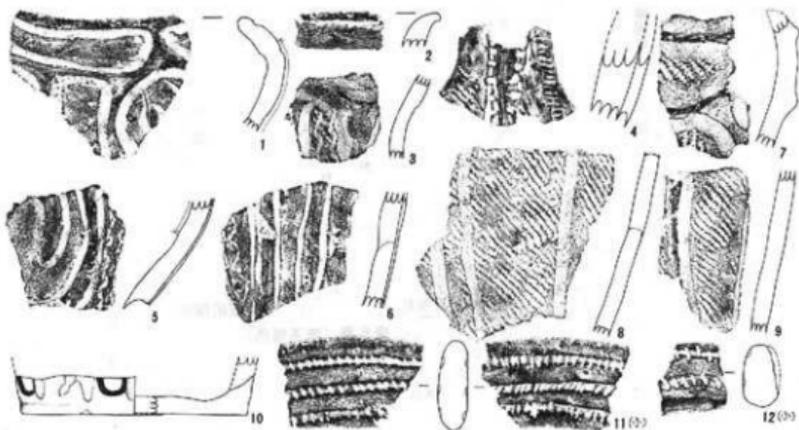
4はおそらく突起上端で鼻状に渦文を形づくると思われ、隆帯にそって縦の沈線の上に横の刻み目を入れ、その周りには斜縄文を施している。

7～9は同一個体の土器片で口縁部では隆線を貼りつけ、その間に斜縄文を施し太い沈線で磨り消し、胴部では斜縄文の上に同様な沈線で楕円文・懸垂文を施し磨り消す形となっている。

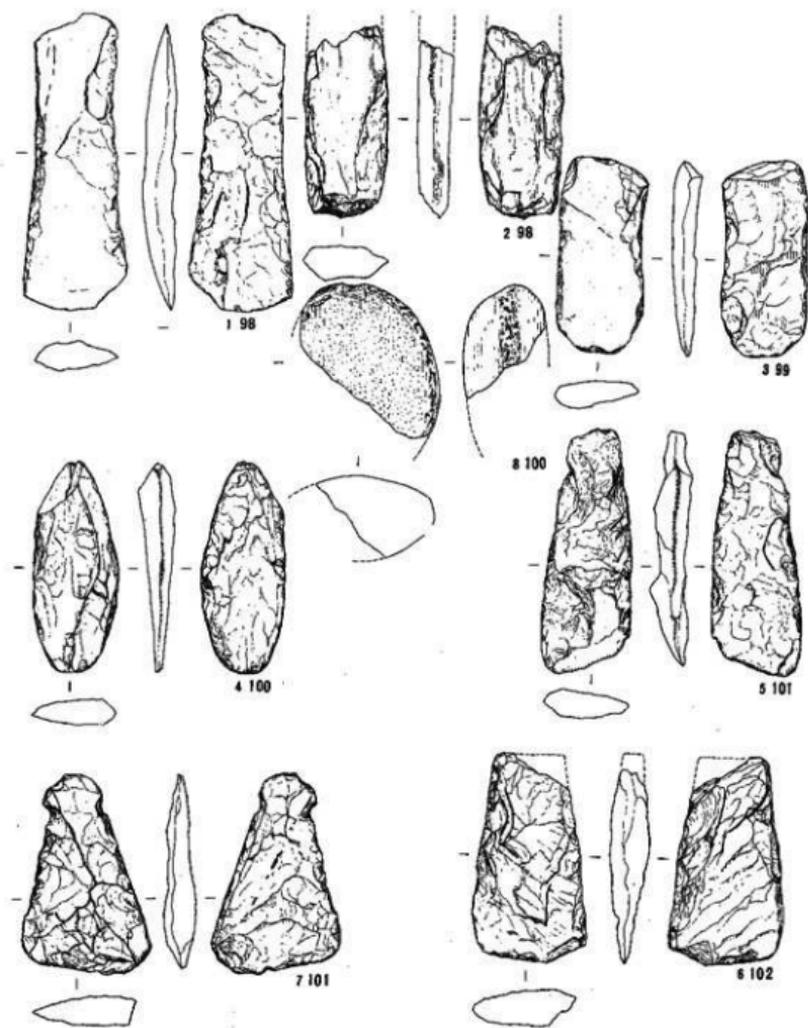
10は底部片で底径12cmを測り、隆帯の末端と楕円文の一部がみられる。

11・12はともに釣手土器の釣手部の破片であり、11では3条の、12では2条の沈線文の上にヘラ先で刻み目をつけている。

総じて、加曾利EⅡ式に比定できる。



第22図 日向坂遺跡 第3号住居址床面一括 (No.103), 覆土出土土器 (S-4)



第23图 日向坂遺跡 第3号住居址床面出土石器(S-3)

石器 (第23・24図)

1～5・12は短冊形の打製石斧であり、2・4が緑泥片岩で他は硬砂岩製である。2・4の側面には使用痕が顕著に観察できる。3は、裏面をやや磨っている。

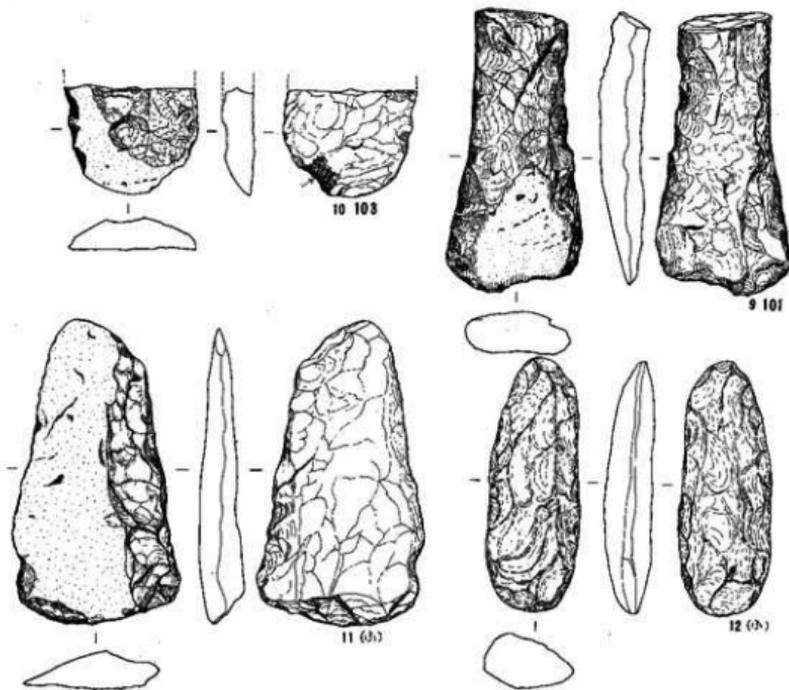
6・9・11は楕形の打製石斧で、6は緑泥片岩で他は硬砂岩製である。

7は硬砂岩製の縦型の石匙で、器面調整はしていねいである。

8は平面は磨っており側面は敲打してある。凝灰岩製である。

10は硬砂岩の剥片であるが、側面はやや調整してある。

No.100・101・102の6点の石器は、住居址の大部分が攪乱を受けているとはいえ、集中して発見されたことは意味がありそうであるし、さらに、種類・形状が総て異なるということは意識的に置かれたことを想起させる。



第24図 日向坂遺跡 第3号住居址床面、覆土出土石器 (S-1)

#### 4) 第4号住居址 (第25~30図, 図版 8, 9)

##### 遺構 (第25図, 図版 8)

本住居址は調査区域の北東端に位置する。覆土より上層に黒褐色土が40~50cm前後堆積しており深い所に床面が存在していた。

掘り込みは、ローム面になされ、覆土は黒褐色土一層に占められ、上層にやや暗褐色土の混土層がみられた。

プランはほぼ直径3m50cmの円形を呈し、床面は堅緻で平坦であった。壁は床面との差が、25~30cmで、北壁にかけてやや低くなっていた。

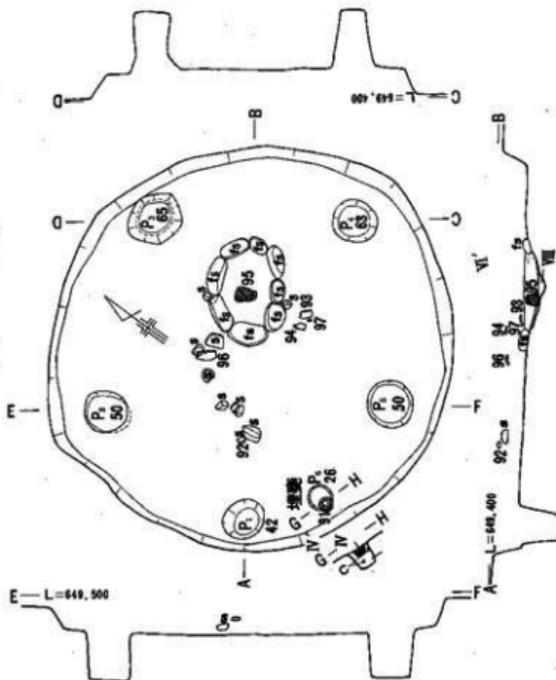
柱穴は計5本確認され、柱穴の底は堅くしまっていた。

炉址は床面やや北東寄りに位置し、8個の花崗岩をしっかりとかみ合せ構築していた。炉底は堅く焼土ブロック状をなし、その上に2~8cmの焼土さらに10~14cmの暗褐色土が堆積していた。その中に深鉢形土器の胴下半部分が伏した形で置かれていた。

さらに、南壁ぎわには埋甕として深鉢形土器底部が2個体埋められていた。

周溝もなく、外部に付属的な遺構もなく整ったプランを保持した住居址と言える。

本住居址の舟形を呈する炉址は、一般的に曾利Ⅱ式から盛行するものであり、典型的な住居址とも言える。また炉址の南西部(覆土中)に自然石が7・8点散在していたが住居址との関係は明らかにならなかった。



第25図 日向坂遺跡 第4号住居址実測図 (S-1a)

遺物（第26～30図，図版 8，9）

土器と石器の出土量はだいたい同じ位の量であり，住居址覆土—黒褐色土層中よりその多くが出土し，特に炉址南西部周辺に集中していた。

土器（第26～28図，図版 8，9）

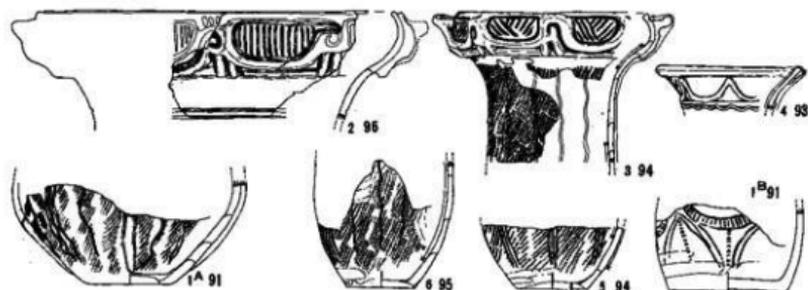
1A・1Bは，住居址の南壁ぎわに埋甕として使用されていた2点で，1Aの中に1Bが重ねられた状態であった。埋甕の中からは特に遺存物は検出されなかった。1Aは底径8.8cmを測り，胴部がやや張るもので，4単位の隆帯懸垂文が貼り付けられ，単節の斜縄文が施された上に蛇行懸垂文をヘラ先で引いている。茶褐色を呈し，長石粒を多く含む。焼成は良好。1Bは底径12cmを測り，器面全体をヘラ削りしたあとでヘラ状施工具で楕円状や山形状の沈線を2条ずつ施し，ヘラ先で刻み目を入れたり，縦に連続爪形文を施している。

2は推定口径36.8cmを測り，内彎する口縁をもつ深鉢形土器の口縁部片である。隆帯の貼り付けにより口唇部は二重口縁化をなし，口縁部は隆帯渦巻文を主体に縦の条線がひかれている。頸部にかけて少しの間無文帯がつづき，横走する沈線がその下にみられる。

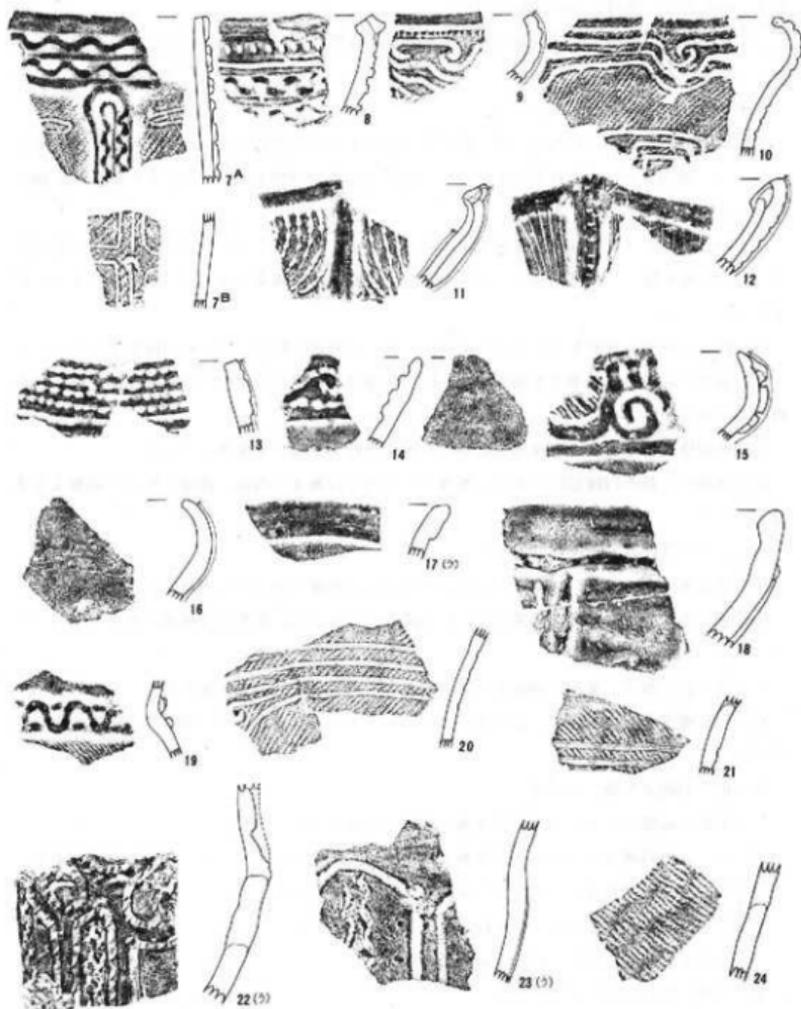
3は深鉢形土器で底部を欠くもので胴部も半分しか残存しない。口径は25.4cm，胴径13.6cmを測る。2と似た形の口縁部文様をもち，縦の条線が斜条線となり，胴部には単節の斜縄文が施される。表面には一面にすすが付着し，内面にもおこげが付着している。暗褐色を呈する。

4は外傾する口縁部片で，口径14.4cmを測る。文様は単調で，連続する山形の隆帯を貼り付け，頸部には横走隆帯と蛇行隆帯を貼り付けている。内外面ともにおこげ，すすの付着が著しい。

5は3と同じ地点より出土したが同一個体とはならない。単節の斜縄文の上に3条単位の懸垂文がヘラ先で引かれている。



第26図 日向坂遺跡 第4号住居址床上，床面出土土器（S—土）



第27図 日向坂遺跡 第4号住居址埋土，覆土出土土器（S一十）うは埋土

6は伊址内中心に伏してあった深鉢形土器の底部で、1A、3・5同様に、単節の斜縄文の上に蛇行懸垂文をヘラ先でつけている。内面はおこげの付着が著しく、外面は二次的燃焼で、剥落がみられる。底径7.2cmを測る。

7A・Bは同一個体でやや内傾する口縁をもち、隆帯と蛇行文の貼り付けにより口縁部を飾り、さらに下方に向かって新らたにのびて行くようである。その両側には単節の斜縄文を地として十字状に沈線がひかれている。

8は無頸甕とも考えられたが、良い傾きが得られず広口の變形を呈すると思われる。口唇部にそって、列点文がつけられその下にはヘラ先による交互の押圧によってできた蛇行文が施されている。

9・10は似たような口縁部文様を成すと考えられる。9は列点文の刻みをもち、ヘラ削りの上に波状沈線を施し、10は内彎する口縁をもつもので地に斜縄文を施してから、渦巻文や凸形文をつけている。

11・12は同形態の器形を示すものであり、ともに口唇部を肥厚させ山形隆帯を作り出し、そこより頸部に向かって懸垂文を貼り付け、11では連続する押引文を12では縦の沈線を粗くひき懸垂文に刻み目をつけている。

13は無頸甕と考えられ、口縁部を肥厚させ連続爪形文を横に4条施している。

14は浅鉢形土器の口縁部片であり、外面はヘラ削りの無文で内面に連続爪形文で渦巻文を表現している。

15は3の土器と同じ形態のものである。

16~18は無文化された口縁部片で、16は内彎、17は外傾、18はやや内傾のものである。

19は頸部破片で2条の横走隆帯の上に蛇行隆帯をはりつけ、胴部には単節の縄文を施している。

20・21・25・26は、単節の斜縄文の上にヘラ先で渦巻文や波状文を施すものである。

結節回転縄文を施すものに、22・23・29・30があり、沈線による区画文やヘラ先による刻み目がつけられている。

24は粗い斜縄文を施している。

27は条線を縦横に引き、28は平行沈線を斜めにつけている。

31・33・34は斜縄文につけられた渦巻文・懸垂文・刺突文が消えて行く部分のものである。

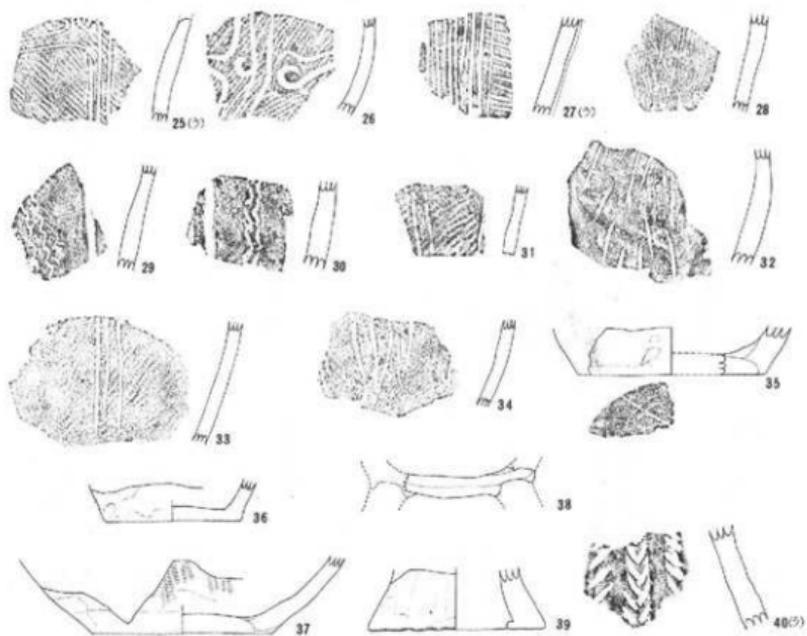
32は薄い隆帯と粗雑なヘラ先による条線がつけられている。

35は木葉庄痕をもつ底部片で底径10cmを測る。

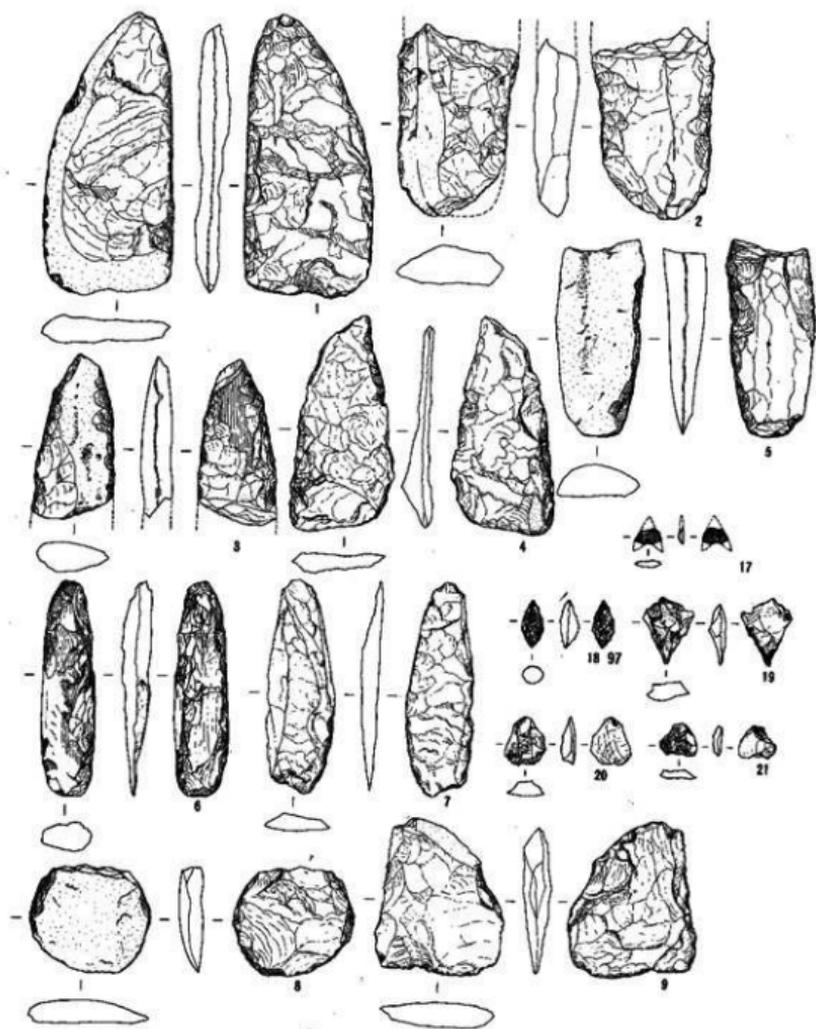
37は底径9.5cmの底部片で単節の斜縄文がみえる。

38は台付土器の台接合部片である。

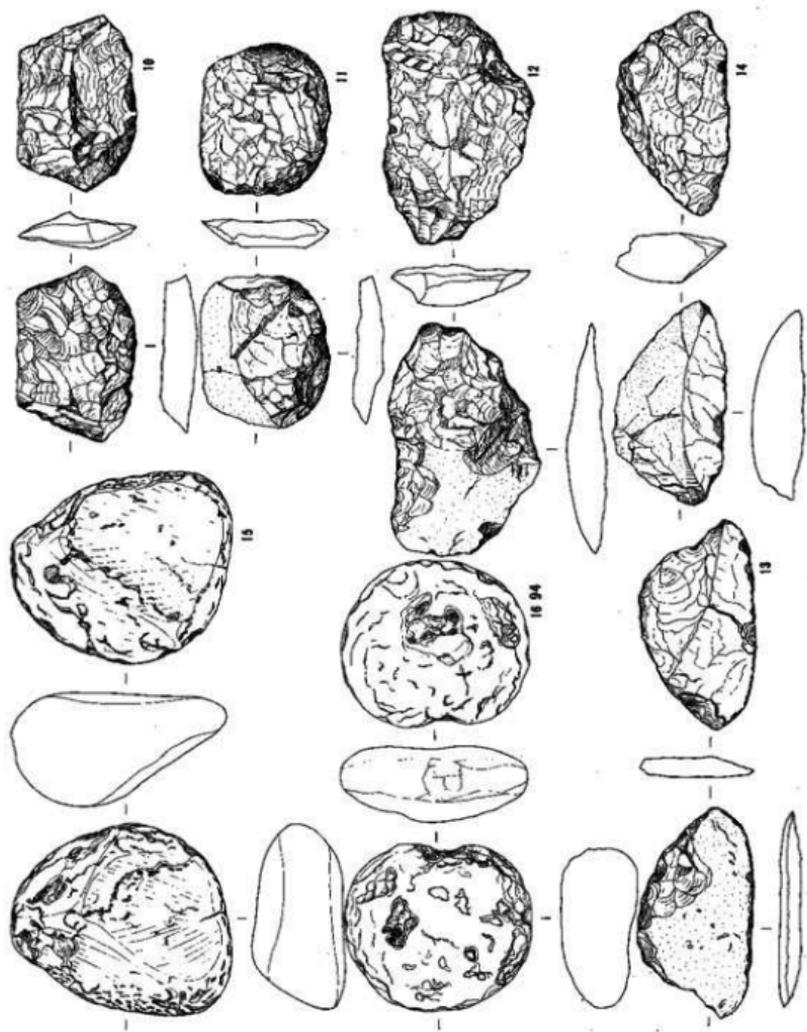
39・40は台付土器の脚部片で、39はすそを折り返しヘラ削りを行い、40は孔が開けられており、隆帯の貼り付けにより厚みをつけ、ヘラ先で刻み目をつけている。



第28图 日向坂遺跡 第4号住居址埋土、覆土出土土器 (S-1)



第29图 第4号住居址覆土出土石器(S-10)



第30圖 日向坂遺跡第4号住居址覆土出土石器(S-1)

石器 (第29・30図)

打製石斧の短冊形と横刃石器が主体を占め、黒曜石の出土数は5点である。

短冊形の石斧は2～7の6点で、6が貫岩その外は硬砂岩である。3と5の側面に使用痕が観察できる。

8は分銅形石斧か円形礫器か判断にまようが、ここでは分銅形石斧として扱っておく。硬砂岩製である。

横刃石器は1・9～14の7点で、総て剥片使用のものであるが、この中で10・11はやや調整がていねいである。総て硬砂岩製である。

磨り石は15があり表面は風化が著しいが磨った痕跡は残っている。花崗岩製である。

16は凹石で表裏ともに1箇所ずつの凹みがある花崗岩製である。

17は黒曜石製の石鏃で脚部と先端部が欠けている。

18は搔器であり全面に剝離調整が行われている。

19は石鏃の未製品と考えられ、片面のみ調整が加えられている。

20・21は剥片であり、18～21は総て黒曜石である。

5) 単独埋壘及び単独土坑 (第31～33図, 図版7)

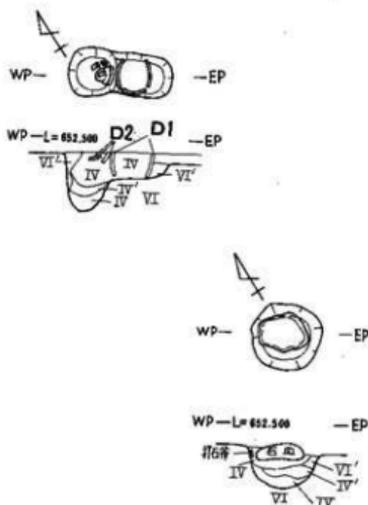
単独埋壘と単独土坑はともに近接しており第2号住居址の東4m～4m50cmの位置にある。プラン及び断面図は第31図のようで、埋壘は胴部と底部の別個体が東西に並ぶ形をとっていた。

埋壘の堆積状態は暗褐色土が主を占め、両側にVI'層(ロームふらん土)→IV'層(IV層よりやや黒味があった暗褐色土)→IV層(暗褐色土)の順であった。暗褐色土層は木炭化物とローム粒を含んでいたが、その他の遺存物は検出されなかった。

出土した埋壘はD1・D2である(第32図)。

D1は深鉢形土器の胴部片のみであり、ほぼ胴部の3分の2が残存していた。

色調は赤褐色を呈し胎土には雲母・長石粒の粗いものが含まれており、調整及び焼成はあまり良くない。文様は胴部中央に縦・横の隆帯・懸垂文を十字形に接合させて貼り付

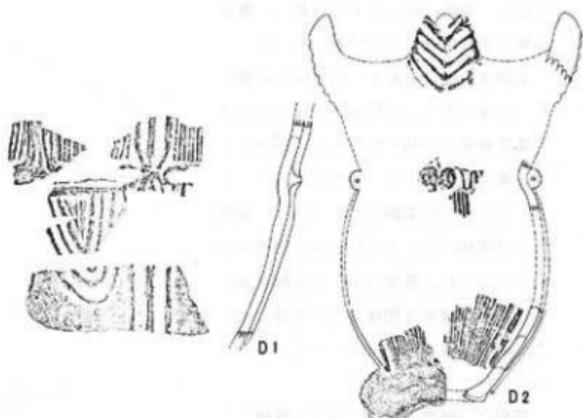


第31図 日向坂遺跡  
単独埋壘及び単独土坑実測図(S=北)

け下位には節目文を、上位には条線文を施している。

D<sub>2</sub>は調査時点では、もっと復原可能と考えられたが整理の結果、良い接合資料とならず、実測図のようになった。

色調は淡褐色から褐色を呈し胎土には長石・石英を多く含み、焼成は良である。突起と頸部の玉状の小把手をそれぞれ4単位施すと考えられ、胴部には、隆帯懸垂文と条線がつけられている。



第32図 日向坂遺跡 単独埋葬出土土器実測図 (S-1)

D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>ともに時間的位置は曾利Ⅰ式末から同Ⅱ式初めにかけて比定されよう。

単独土壇は埋葬の南1m地点で発見され、土壇の開口部には第33図1の石皿が伏されていたさらにⅣ層(暗褐色土)中より同図2の打製石斧が発見された。

土壇の大きさは、直径47cm前後の円形で、すり鉢状を呈し、丸底であった。深さは27cmを測る。

層位はⅣ層→Ⅵ'→Ⅳ'→Ⅳ層の順で堆積していた。

出土した石皿は花崗岩製で長さ38.0cm、幅31.5cm、厚さ9.5cmを測り、皿部の減りはそんなに極端でもない。打製石斧は短冊形と言い切ってしまうことには疑問があるが、ここでは短冊形として扱っておく。長さ9.0cm(現存部分)、幅5.1cm、厚さ1.5cmを測る。

## 6) 土壇群 (第34・35図、図版10)

土壇群は、第3号住居址より北17m、第4号住居址より南西15mの地点に存在し、6基確認された。

1号土壇は、長軸1m20cm、短軸1mの五角形状を呈し、深さ22cmを測る。覆土上層より、第35図の土器が出土している。

層位は、Ⅳ'層→Ⅳ層→Ⅵ'層→Ⅵ層となり、堆積はその反対の順に行われたものと考えられる。

出土土器は器高36.0cm、口径20.8cm、底径12.0cm、胴径28.0cmを測る。色調は暗褐色を呈し

胎土には、ややあらい長石・石英粒を多く含む。表面一面にすすが付着し、裏面は胴下半部におこげが付着している。

文様は山形の突起を一对単位で4単位もつ口縁をなし、口唇部から底部にかけて隆帯懸垂文が貼り付けられ、頸部の2条の隆帯と結合する。頸部は2段にくびれ、その間を斜条線でうめている。頸部下には隆線によるJ字状と縦の懸垂文が貼りつけられ、隆帯の間に斜条線を施している。口縁部は肥厚させた隆帯にそって、縦や斜めの爪形文をヘラ先でつけている。

器形は口縁部が肥厚しながら外傾して胴下半部で張りをもつ深鉢形土器である。残存伏態は2分の1個体である。

時期的位置は曾利Ⅰ式末からⅡ式初めに比定されよう。

2号土壇は南側に段をもち、長軸1m 28cm、短軸86cmを測り、断面はⅣ'→Ⅳ→ⅥがU字状に層をなし、平面形は楕円形断面はすり鉢を呈する。深さは35cm。

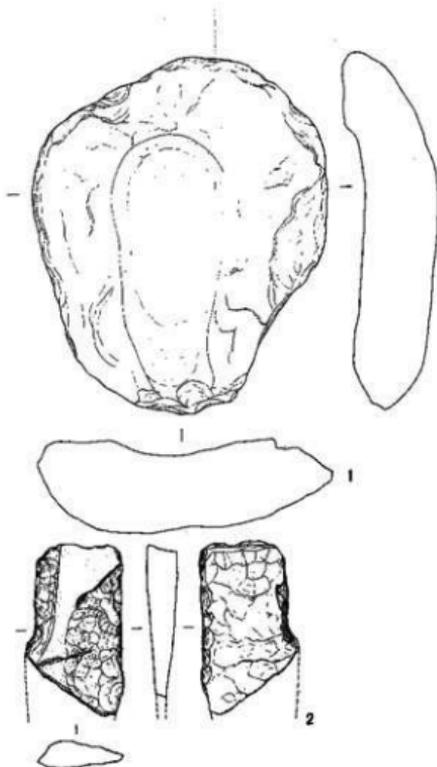
3号土壇は1m 20cm×1m 5cmを測りほぼ円形を呈す。層位はⅣ層→Ⅴ層(黒褐色土)→Ⅳ'層→Ⅵ層となる。断面は、すり鉢状を呈し、平面形はほぼ円形を呈する。深さは36cmを測る。

4号土壇は南壁寄りに小穴をもつ。大きさは1m 2cm×76cmで楕円形を呈し、深さは29cmを測る。Ⅳ'層とⅣ層がU字状に堆積し、Ⅳ'層には黒褐色土がまじり、底部にⅥ'層が若干堆積している。底は斜めにやや傾き、断面はすり鉢状を呈す。

5号土壇は北壁開口部に自然石が置かれている。大きさは1m 8cm×94cmで台形を呈し、深さは46cmを測る。堆積状態はⅣ層を包み込む状態でⅣ'層があり、その下にはⅤ層が堆積している。壁の両側には、途中でⅥ'層が堆積している。

Ⅴ層黒褐色土層は厚く16cm位あったが、木炭化物を多く含むものの、その外の遺存物は検出されなかった。

6号土壇は西壁開口部に自然石2個が置かれている。大きさは1m 4cm×92cmで深さは40cm



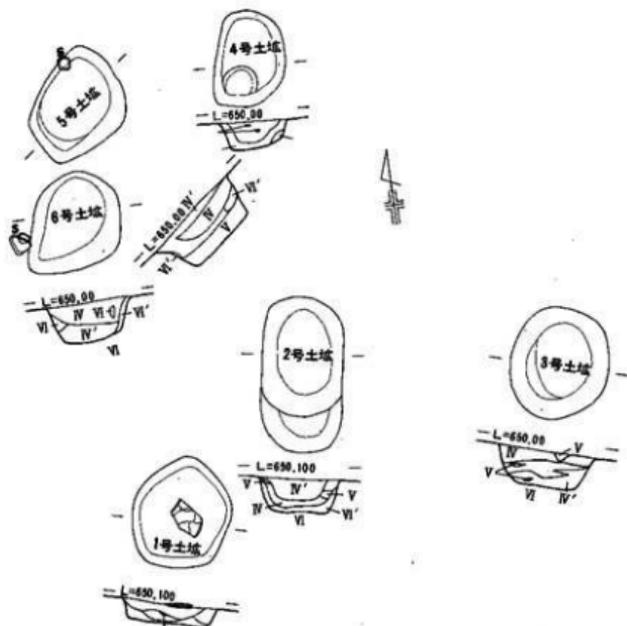
第33図 日向坂遺跡  
単独土壇出土土皿及びび器(1はす, 2はす)

を測る。

平面形は不  
整円形を呈す  
る。堆積状態  
は、IV層→IV'  
が占め、VI'が  
両壁よりわず  
かに入り込んで  
いる。

1～6号土  
坑は、大きさは長軸1m10  
cm前後、短軸  
1m前後の楕  
円形や楕円形  
の変形のような  
形態であり  
断面はすり鉢  
状を呈する。  
出土遺物が極  
めて少なく1  
号土坑のみ土  
器が出土した。

また覆土中に自然遺存物や炭化物のかけらすらも検出されな  
かったため、時期的位置付けや土坑の性格をさぐることは困難  
であるが、おおよそ、1～4号住居址の時期的位置付け一曾利I  
式末からII式にかけて一と併行するものであろう。



第34図 日向坂遺跡 土坑群実測図 (S-6)



第35図 日向坂遺跡  
1号土坑覆土出土  
土器 (S-7)

# 日向坂遺跡出土石器一覽表

(単位はcm, g. ( ) は破損品の現存値)

出土地	探検番号	出土層位	種類	形態	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量
I号住	9-1	床面	打製石斧	短骨形	完形	硬砂岩	16.1	6.1	2.4	273
	2	*	*	*	*	*	15.7	5.5	2.0	180
	3	*	*	*	頭部欠	*	(11.7)	4.8	1.1	(88)
	4	*	*	*	完形	緑泥片岩	14.4	5.0	1.6	168
	5	覆土	*	撥形	頭部欠	硬砂岩	(8.0)	6.5	2.5	(121)
	6	床面	*	短骨形	完形	*	13.1	4.3	2.0	167
	7	*	*	撥形	刃部欠	*	10.2	6.1	1.8	172
	10-8	*	半磨製	短骨形	完形	緑泥片岩	13.0	5.1	1.6	242
	9	*	*	*	頭部欠	*	(14.0)	6.1	2.8	(414)
	10	*	横刃石器	剥片		硬砂岩	5.8	9.0	1.2	85
	11	*	*	*		*	5.2	10.7	0.9	59
	12	*	*	*		*	4.3	11.2	1.7	78
	13	*	敲打器・磨り石	棒状	頭部欠	砂岩ホーンフェルス	(12.2)	4.6	4.0	(374)
	14	*	敲打器	*	頭・刃部欠	*	(9.7)	4.2	(4.2)	(138)
	15	*	————	剥片	————	硬砂岩	8.6	4.6	1.6	77
	11-16	*	磨り石	円形	完形	花崗岩	8.0	8.1	4.8	550
	17	*	敲打器	剥片		硬砂岩	13.3	6.8	2.7	362
	18	*	————	*	————	*	8.0	5.7	1.0	60
	19	*	————	*	————	*	10.9	7.0	1.5	
	20	*	敲打器	石核状	完形	黄岩	11.5	8.3	4.7	780
	21	*	*	*	*	*	12.5	6.2	3.6	560
	22	*	敲打器・磨り石	棒状	*	硬砂岩	15.5	5.1	5.4	764
	12-23	*	凹石	*	*	花崗岩	10.1	9.2	3.2	491
	24	*	石皿	*	*	*	44.0	27.4	10.0	
	25	*	*	*	*	*	37.3	33.0	11.3	
	26	*	石核	*	*	黒燧石	6.3	8.0	2.3	162
	27	覆土	剥片			*	4.0	3.5	1.0	18
	28	*	*	*	*	*	1.1	2.4	1.0	7
18-1	*	打製石斧	短骨形	刃部欠	硬砂岩	(6.6)	3.7	1.6	(60)	
2	*	*	*	完形	*	10.0	3.7	1.0	50	
3	床面	*	*	頭部欠	*	(9.2)	4.0	1.9	(100)	
4	覆土	*	*	*	*	(12.1)	5.0	1.6	(172)	
5	*	*	*	刃部欠	花崗岩	11.7	4.0	1.5	(110)	

出土地	採掘番号	出土層位	種類	形態	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量	
2号住	18-6	覆土	打製石斧	短冊形	完形	硬砂岩	11.1	4.8	1.6	85	
	7	＊	＊	短冊形	＊	黄岩	10.5	5.9	0.9	70	
	8	床面	半磨製	短冊形	頭部欠	緑泥片岩	11.8	4.2	1.7	140	
	9	覆土	磨製石斧	＊	＊	硬砂岩	(5.2)	4.1	1.4	(50)	
	10	＊	＊	＊	完形	砂岩ホーンフェルス	(7.3)	4.4	1.7	(94)	
	19-11	＊	打製石斧	＊	＊	粘板岩	18.6	7.2	2.6	404	
	12	＊	横刃石器	＊	＊	硬砂岩	6.5	12.0	1.4	105	
	13	床面	＊	＊	＊	＊	4.0	10.5	0.8	37	
	14	＊	磨り石	＊	＊	花崗岩	9.1	6.8	5.5	480	
	15	＊	磨り石・敲打器	＊	＊	黄岩	10.2	4.9	2.6	220	
	16	＊	石皿・凹石	＊	＊	花崗岩	17.3	11.6	5.0	1,427	
	17	＊	磨り石・凹石	＊	＊	＊	9.6	8.0	4.6	574	
	20-18	＊	石 鏃	＊	＊	黄岩	13.0	11.0	4.5	710	
	19	覆土	打製石斧	短冊形	刃・胴部欠	硬砂岩	(4.5)	3.9	1.7	(28)	
	20	＊	石 匙	横型	刃部欠	＊	5.5	(7.8)	1.2	(68)	
	21	＊	打製石斧	短冊形	完形	＊	10.0	5.0	1.2	69	
	22	＊	磨り石	＊	半欠	花崗岩	(7.4)	7.9	4.7	385	
	23	＊	＊	＊	＊	砂岩	4.8	7.4	(3.5)	234	
	24	＊	石 皿	＊	＊	花崗石	14.7	7.9	4.0	704	
	25	＊	剥片	＊	＊	黒燧石	1.9	2.8	1.1	4	
	26	＊	＊	＊	＊	＊	3.1	1.6	1.0	5	
	27	表採	石 鏃	有蓋	先端・胴部欠	＊	1.9	1.2	0.4	2	
	3号住	23-1	床面	打製石斧	短冊形	完形	硬砂岩	15.6	5.4	1.6	162
		2	＊	＊	＊	頭部欠	緑泥片岩	(9.8)	4.4	1.7	128
		3	＊	＊	＊	完形	硬砂岩	9.3	4.6	1.4	90
		4	＊	＊	＊	＊	緑泥片岩	11.1	4.4	1.8	103
		5	＊	＊	＊	＊	硬砂岩	12.4	4.7	1.8	125
6		＊	＊	盤形	頭部欠	緑泥片岩	(10.7)	6.0	2.0	174	
7		＊	石 匙	縦型	完形	硬砂岩	10.3	6.8	1.6	126	
8		＊	磨り石・敲打器	＊	半欠	凝灰岩	8.0	6.3	4.3	236	
24-9		＊	打製石斧	盤形	完形	硬砂岩	16.0	7.0	2.3	308	
10		＊	剥片	＊	＊	＊	5.7	6.9	1.6	92	
11		覆土	打製石斧	盤形	完形	＊	16.0	8.5	2.2	330	
12		＊	＊	短冊形	＊	＊	13.5	4.7	2.8	242	
4号住	29-1	＊	横刃石器	＊	＊	14.8	6.9	1.6	220		

出土地	採掘番号	出土層位	種類	形態	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量
4号住	29-2	覆土	打製石斧	短冊形	頭部欠	硬砂岩	(10.0)	6.3	2.0	(180)
	3	*	*	*	*	硬砂岩	(8.5)	4.1	1.6	(70)
	4	*	*	*	完形	*	11.1	5.4	1.6	84
	5	*	*	*	*	*	10.0	4.4	2.1	130
	6	*	*	*	*	黄岩	11.4	2.8	1.5	65
	7	*	*	*	*	硬砂岩	11.0	3.5	8.1	45
	8	*	*	分層形	半欠形	*	(5.6)	6.3	1.2	75
	9	*	横刃石器	剝片	完形	*	7.8	6.8	1.4	88
	30-10	*	*	*	*	*	6.1	9.0	1.7	130
	11	*	*	*	*	*	8.0	6.6	1.5	135
	12	*	*	*	*	*	12.3	7.0	2.1	222
	13	*	*	*	*	*	6.0	10.6	1.2	103
	14	*	*	*	*	*	5.7	10.8	2.7	192
	15	*	磨り石			花崗岩	10.0	11.5	6.5	1,060
	16	*	凹石			*	10.0	8.6	4.0	538
	29-17	*	石鎌	有脚	先端・脚欠	黒曜石	(0.9)	1.4	0.3	1
	18	*	掻器		完形	*	2.5	1.1	1.9	2
	19	*	石鎌		未製品	*	3.1	2.5	0.9	8
	20	*	剝片			*	2.5	2.1	0.8	3
	21	*	*			*	1.6	1.9	0.4	2
	草土坑	33-1	開口部	石皿		完形	花崗岩	38.0	31.5	9.5
2		覆土	打製石斧	短冊形	刃部欠	硬砂岩	(9.0)	5.1	1.5	(89)

#### 4. まとめ

本遺跡の発掘調査によって明確になったことは、縄文時代中期後葉から末葉にかけての竪穴住居址が4軒と単独埋嚢1基、単独土壇1基、土壇群（6基で構成）とそれに伴う遺物が確認されたことである。

しかし、遺構・遺物が少ない（今回の調査区域だけが遺構・遺物の存在する空間ではもちろんないが）結果ではあったが、そこにはらむ問題は数多く含まれる。

第1に住居址覆土内における遺物の集中層の問題である。「何々パターン」として居住・生産構造を追求し古代社会の様相を究明しようとしてブームを呼び定着化してきた方法論が、常に発掘調査—資料分析—調査研究の中で再検証され掲げられて行かなければならないことを痛感した。第1号住・第2号住・第4号住において、床面や床直上の遺物の出土は明らかに少なく、暗褐色土や黒褐色土—掘り込んだローム面を住居址の床面とするならば—即ち、ローム床面より5cmないしは20cmに堆積している覆土下層中に多いことが確認された。さらに重要なことはただ単に覆土下層に遺物が多い少ないの問題ではなく、覆土中に包含される遺物と床面及び床直上に存在する遺物が本遺跡では区別できたということである。それは、第1・2号住で顕著に見られたことであるが、床面及び床直上には石器類と剝片が多く、覆土中には土器類が多く存在したことである。また、石器類や剝片が住居址の中で一定のまとまりをもっていた。第1号住・2号住ともに東壁よりの柱穴の周辺に存在していたことである。覆土中で注意されるのは、第1号住に出土した石皿であるが柱穴の開口部に落ち込まんばかりの状態で検出された。このことは、住居の廃絶—住居の埋没—再利用等の一連の問題にも関連することである。

第2に第1号住居址の南西壁寄りの覆土中（床面より7～8cm上層）より2個体の土偶が発見されたことである。埋葬施設や明らかに意識を働かせたと思われる出土例が多い中で、今回の土偶の出土状態は再検討を要する。調査する側の意識と土偶を製作し使用した古代人の意識の絶対的なずれがある。それをいかに科学的に分析するかであるが、本土偶は、2個体ともに顔・胴部は、地面に伏せられていたが無雑作とも考えられる状態で出土し、「信仰」「呪術」「生産への祈り」等精神構造の究明への一史料となりうるのかは疑問である。「生産的遺物が精神的遺物か」という土偶のもつ表裏一体的な性格の中で、精神・意識の表出が果たして「信仰」の対象の範ちゅうに入りうるのかいなかも問題である。このことは、覆土中であるから、埋葬施設内であるからという論点に立つのではなく、考古学をする者の意識の変革に本質があるとさえ言えないだろうか。

第3に土器型式編年の地域における主体と容体の関係、言い換えれば、加曾利EⅠ式→Ⅱ式系土器と曾利Ⅰ式→曾利Ⅱ式系土器が上伊那地域でどのような浸透と独自の地域性を表現しているのかを再検討しなければならない。

問題提起に終始してしまっただが、まとめとして記して今後の調査研究の新たな視点の抽出への足がかりとして行きたい。今回の発掘調査の成果が少しでも皆様の為に役立てば幸いです。

（小原晃一）

## 第2節 赤須城遺跡

### 1. 位置及び地形

赤須城は、駒ヶ根市赤穂下平550番地に所在する。城は赤穂地区の中央東端に位置し、天竜川の河岸段丘の先端にある。城に至るには国鉄飯田線駒ヶ根駅で下車し、駅から東に向って2kmほど歩き、更に南東に1.2kmほど行けば松林の中に城がある。

伊那谷は木曾山脈と赤石山脈に囲まれ、その中央を諏訪湖より南下する天竜川が流れている。天竜川への支流となる大田切川・中田切川・与田切川などの河川は木曾駒ヶ岳を主峰とする木曾山脈より源を発し、それらにの河川によって押し出された土砂により扇状地が形成され、周知の田切地形が造られている。

赤須城は南を宮沢川が、北を田沢川がさえぎり深い谷をもち、さらに東は峻立する60～70mの急斜面と段丘下の湿地帯という自然の好地形を巧みに利用した要害の地で、四方の見通しもきくところである。(第36～38図参照)

遺跡の地質基盤は伊那礫層からなりその上に新期ロームが堆積している。

調査地区の土層はローム層・ロームふらん土・黒色土・暗褐色土・明褐色土・表土(暗褐色土)の順に堆積していた。  
(小原晃一)

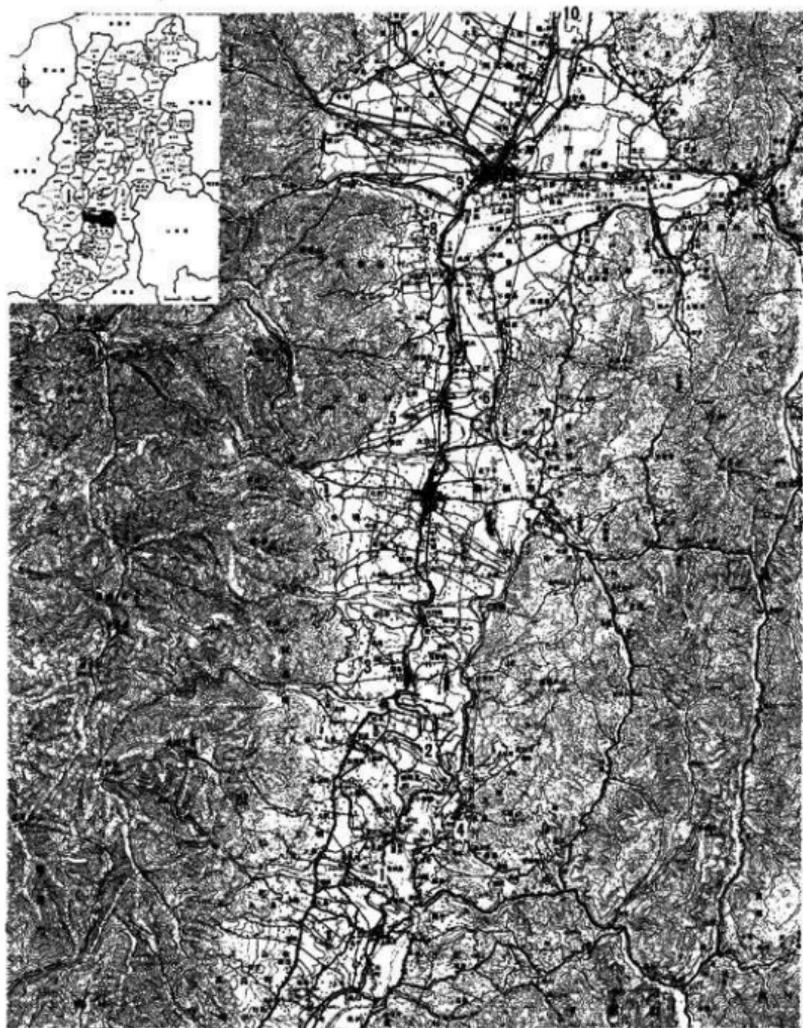
### 2. 歴史的環境

上伊那地域には、中世において大小の豪族が時代的にも地域的にも割拠し、さらに地形的に複雑な特色も加わり、古城・城と呼ばれる地区やその所在する字名で呼ばれたりする各種多様の城塞遺跡が多い。これらの遺跡は平時の武士の居館であったり、あるいは戦時の砦であったり、またさらには狼煙台、物見台であったりしたであろうが、その系統については不明確な部分が多い。

上伊那地域における中世の城は地形的に山城・平山城・平城の三つに分類され、山城は山の頂きを中心に築かれ軍事的な目的が主であり平常の生活には適さず、山麓に集落が見られる。平山城は平地にある小丘陵を利用したものであるが伊那谷では河岸段丘の崖上に構築され、段丘崖を自然の要害とし、段丘上の平地には人工の空堀を築くのが普通であり、本赤須城もこの平山城に属する。平城は平地に構築されたもので、山城や平山城に比して防備の点では劣るが城自体が単に軍事的な性格だけでなく、政治・経済的な側面をもちはじめたものである。

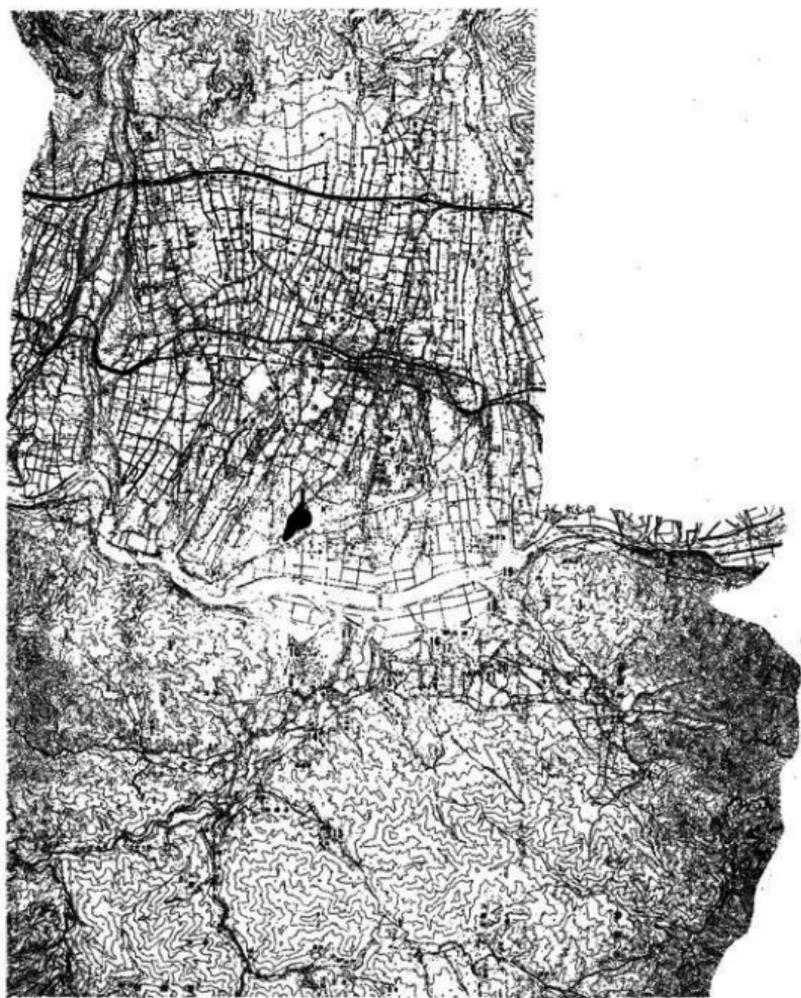
(「長野県 上伊那誌 第二巻 歴史編」1965 上伊那誌編纂会 参照)

赤須城の歴史については、大塔物語・大塔軍記・諏訪御符札之古書に記載されており、南北朝時代に舟山城(松川町上片桐)を拠点としていた片桐氏の分流である片桐孫三郎為幸がこの赤須の地に分居し、在名赤須氏を称したと記されている。それ以前に赤須氏が存在したことは例えば永仁2年(1294)赤須氏の兄弟が領地を争って鎌倉幕府へ訴訟した記録等に見られる。



第36図 赤須城址と周辺の主な城址 (S— $\frac{1}{200,000}$ )

(1は船山城, 2は本郷城, 3は岩間城, 4は大草城, 5は小田切城, 6は中越城, 7は中村城, 8は本城, 9は春日城, 10は福与城)



第37図 赤須城と市内の城址 (S -  $\frac{1}{75,000}$ )

- ( 1は古城, 2は荒城, 3は大田切城, 4は上穂城, 5は塩木城, 6は大北城,  
 7は大城, 8は射殿城, 9は城山, 10は菅沼城, 11は古城, 12は高見城, 13は  
 中村城, 14は表木城, 15は原城, 16は稲村古城, 17は稲村城, 18は高田城, 19  
 は大久保城, 20は城村城, 21は小城, 22は塩田城, 23は青木城, 24は高山社 )

### 3. 調査概要

本遺跡は昭和49年に友野良一氏・気賀沢進氏が中心となって城址の地形測量を全面的に行い本丸より内外計8本の空堀が確認されている。

そして今回の昭和54年度県営ほ場整備事業に伴ない当遺跡の一部が破壊される現状をまねいた為、事業に先立ち記録保存を目的として発掘調査を行ったものである。

調査方法は、遺構が存在すると思われる箇所周辺の表面採集を行い、調査地区の北東の田の一角を基点として、堀に平行してそうように10m×10mの主グイを打ち、その中に2m×2mのグリッドを設定した。東西方向に2m毎に1・2・3、南北方向にあ・い・うとし、適宜にグリッドを掘り、遺構の確認によりその周辺を拡げる方法をとった。なお、ほ場整備事業の設計変更に伴い、さらに東域を調査し、同様にグイを打ち、南北方向にA・B・C、東西方向に1・2・3とグリッドを設定した。

調査費用や調査期日の関係上、市松状のグリッドは完掘したが調査地区の表土を削ぐ作業をブルドーザーに委ねた。

その結果、今まで未確認であった本丸へ向って東西に走る縦堀が「な」のポイント下に検出され、第6番目の堀と直交することが確認された。第6番目の堀の外側、西地区には、縦堀をはさんで南側より第1号住居址と柱穴址、小竪穴1～6、北側より柱穴址1～5、小竪穴7～11、集石址1基が検出された。第6番目の横堀の西に室状遺構が1基検出された。

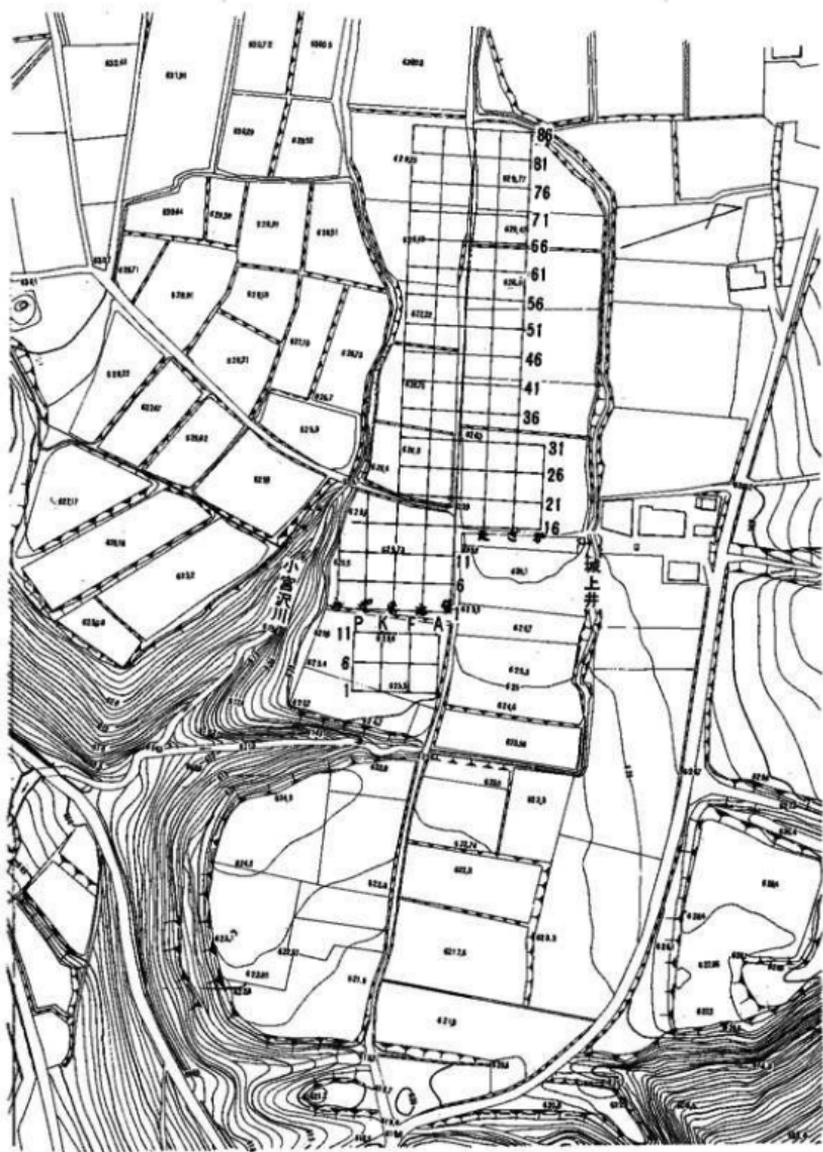
さらに、横堀の内側東地区には第2号住居址、溝状遺構、集石址2～6、小竪穴12～20、室状遺構2号が検出された。

出土遺物は、内耳土器、灰釉陶器、土師質土器、鉄釉陶器等の日常雑器をはじめ、石臼・鉄製品・古銭などが検出された。

本赤須城の層序は、次のようである。

- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| I 層—暗褐色土（表土）               | V' 層—黒褐色土（ローム粒多い）        |
| I' 層—暗茶褐色土（耕作土）            | VI 層—黒色土（ローム粒多い）         |
| II 層—暗黄褐色土（地場）             | VII 層—明茶褐色土（炭・ローム粒含む）    |
| III 層—黄褐色土（ローム土）           | VII' 層—        （暗褐色土粒多い） |
| III' 層—暗黄褐色土               | VII'' 層—      （砂・炭多い）    |
| III'' 層—灰黄褐色土（黒色土粒含む）      | VIII 層—ロームふらん土           |
| IV 層—暗褐色土（ローム粒・炭多い）        | IX 層—暗黄褐色土               |
| IV' 層—暗褐色土（ローム粒多い）         | IX 層—茶褐色土と砂の混土           |
| IV'' 層—      （ローム粒・炭多い）    | X 層—砂層                   |
| IV''' 層—      （ローム粒・砂・炭多い） |                          |
| IV'''' 層—      （砂多い）       |                          |
| V 層—黒褐色土（ローム粒・炭多い）         |                          |

（小原晃一）



第38図 赤須城グリッド図 (S =  $\frac{1}{2,000}$ )

#### 4. 遺構と遺物

##### 1) 第1号住居址 (第40・41図, 図版 12)

##### 遺構 (第40図, 図版 12)

調査地区のうち縦堀の南側より検出され、東側には小竪穴1～3がほぼ等間隔に位置し、南側に小竪穴4、やや南東に小竪穴5が位置する。

東西3m20cm×南北2m30cmを計る長方形の住居址である。壁は西壁で12cm、南・北壁で10cm前後、東壁ではなだらかであり、全体的に浅い。床面は、やや堅ちで、東壁寄りにやや盛り上がる状態で焼土が堆積していた。主柱穴らしきものは見当らず、西・北壁に深さ26cmと17cmのピットがあっただけである。がしかし、南・北壁寄り床面中央より東壁にかけて、5～10cmによる小ピットが検出されたことは注意をひくものである。

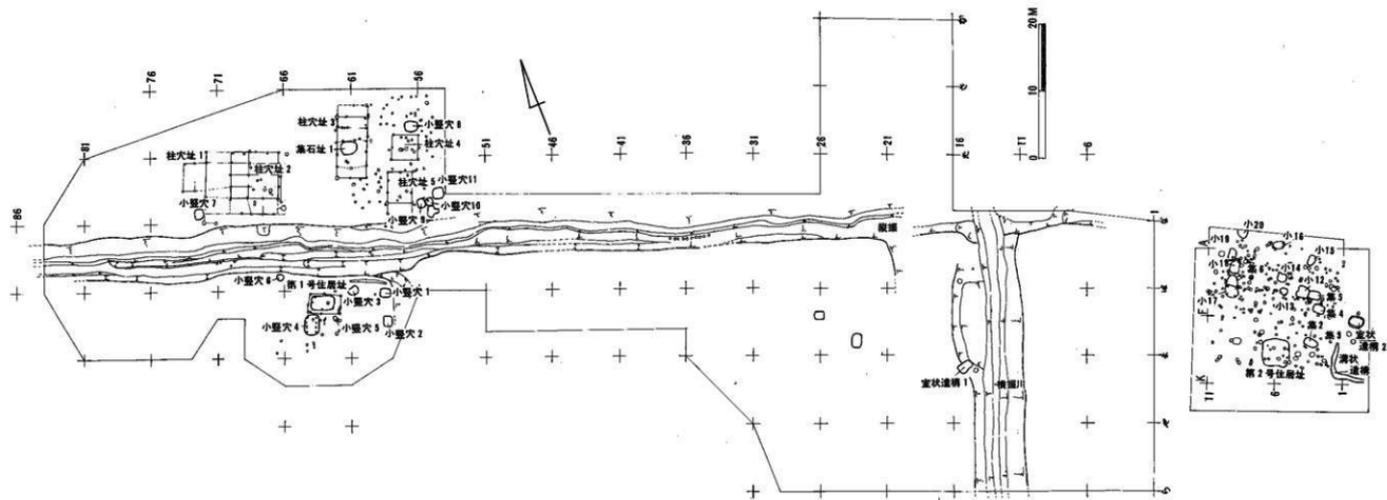
さらに住居址の外側に深さは一定しないが、ほぼ等間隔に深さ11～25cmの柱穴らしきピットが検出されたことは、住居址と密接な関係があり上屋構造や平面的な構造を考える資料となる。

##### 遺物 (第41図, 図版 12)

出土遺物は少なく、床面より8点が検出された。第41図No.86・88・89・91は内耳土器の口縁部及び胴・底部片であり、No.87・90・92は天目茶碗の胴・底部片、No.93は脚付の施釉陶器であるが器形は推察しがたい。

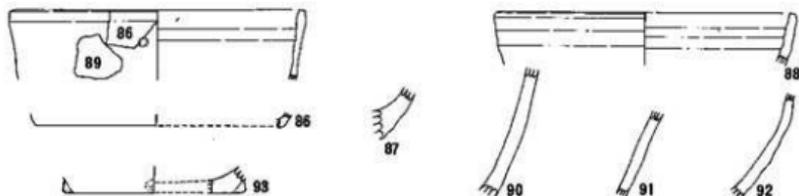
##### 第1号住居址出土遺物一覧表

No.	名称器形	部分	特徴	製作年代	備考
86-A	内耳土器	口縁部	口径29.6cm, 淡黄褐色		補修孔あり
86-B	◇	底部	底径26.4cm, 暗褐色		
87	天目茶碗	◇	黒茶褐色釉, 地は灰青色	室町	瀬戸
88	内耳土器	口縁部	口径30.8cm, 淡褐色		
89	◇	胴部	淡黄褐色		86-Aと同一
90	◇	◇	淡褐色		
91	◇	◇	◇		
92	天目茶碗	◇	黒色釉, 地は灰白色	室町	瀬戸
93	不明	底部	底径8.4cm, 淡黄色	◇	◇



第39図 赤須城遺構全体図 (S =  $\frac{1}{200}$ )





第41図 赤須城址第1号住居址出土遺物 (No.86・88・89はS一才, 他かは十)

## 2) 小竪穴1～6号 (第40図, 図版 12)

1号住居址の東及び南側より計5ヶ所の小竪穴が検出された。小竪穴1～3は3m～3.5mのほぼ等間隔にある。

1号小竪穴は東西1.6m, 南北1.5mを測り, 深さは西壁で25cm, 東壁で20cmを測り隅丸方形を呈する。出土遺物はなく, 床の一部にロームふらん土が堆積し黒褐色土→黒色土の順に凹レンズ状に堆積している。床はやや軟弱である。

2号小竪穴は東西1.35m, 南北1.2mを測り, 深さは西壁で30cm, 東壁で25cmを測り長方形が交った形を呈しJ字状をなす。出土遺物はないが, 西壁寄りの覆土→黒色土の上に焼土が10cm前後堆積し, さらに東壁寄りの床面には頭大の自然石が5個遺存していた。二段の壁を西・北壁にもつ。

3号小竪穴は東西1.3m, 南北1.25mを測り, 深さは西壁で45cm, 東壁で35cmを測り方形を呈する。出土遺物はなく, 覆土上層中に自然石が5個遺存し, 内4個が北西壁に集中していた。黒色土で満されていた。床は堅ちで, 西壁以外は深さ3cm前後の溝が掘られていた。

4号小竪穴は室状遺構か貯蔵穴とした方が適切かと考えられる。東西2.1m, 南北3mを測り長方形を呈する。深さは南・北壁で35cm前後, 東・北壁で30cm前後とほぼ一定し, 壁・床ともに堅ちであった。柱穴は8本検出され, 15cm～30cm前後を測る。出土遺物は北壁寄りの覆土中に焼土と混って内耳土器の胴部片が2点出土した (No. 94・95)。

さらに, 覆土中には花崗岩の自然石が南壁寄りに集中していた。東壁及び周辺には焼土が単独で2ヶ所検出され, 厚さは5cm前後であった。

5号小竪穴はピットと言った方が良いかもしれない。東西50cm, 南北60cmを測り長方形を呈する。深さは15cm前後で花崗岩の自然石が覆土中に4個遺存していた。出土遺物はなく炭化物を多く含んだ黒色土で満されていた。

なお, 1号小竪穴の東西に2個のピット, 4・5号小竪穴の周辺にも10cm前後から30cm前後のピットが検出されたが, 柱穴址や小竪穴に伴う柱穴としては把握できなかった。

6号小竪穴は1号住居址北城10mの地点から検出され, 東西72cm, 南北70cm, 深さ35cmを測り, 円形を呈する。出土遺物はない。

### 3) 柱穴址1・2号(第42図)

第42図の様に縦堀の北段上に柱穴址1・2号が検出された。

第1号柱穴址は7号小竪穴の北域に位置し、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>がそれにあたり南域のピットが不明確である。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間隔が4mでP<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>の間隔が1.8mであり、南北2間半弱、東西2間の建物遺構を推察させる。柱穴の深さは15～25cm前後で、穴の直径は25cm前後である。

第2号柱穴址は1号柱穴址のすぐ東側に位置し、1・2号柱穴址は連結した建物遺構の可能性も強い。P<sub>7</sub>～P<sub>28</sub>の22本で構成され、南北6本の柱、東西4本の柱が原則的に観察できP<sub>17</sub>とP<sub>18</sub>の間に3本の柱の存在が推察できうるが、焼土等の遺存の状態から、上屋構造的に柱は設けなかったと考えられる。南北は1間間隔の6本柱で5間、東西は1間半間隔の4本柱で4間半の長方形の建物遺構と考えられる。柱穴の深さは20cm～30cm前後であり、焼土をとりまく、5cm～15cmの7つのピットは上屋構造の変化を感じさせる。出土遺物はともにない。

### 4) 小竪穴7号(第42図)

第1号柱穴址の南域に位置する。南北1.5m、東西1.25mの長方形を呈し、深さ10cmを測る。床はやや軟弱で、壁はしっかりしている。出土遺物はない。

### 5) 柱穴址3～5号・集石址1号・小竪穴8号(第43図)

第43図の内西城に柱穴址3号が位置し、さらに西の柱穴址2号とはほぼ8mへだてている。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>12</sub> P<sub>14</sub>～P<sub>19</sub>の18本からなり、P<sub>13</sub>・P<sub>20</sub>は関係ははっきりとはつかめない。南から北にかけて、3-3-2-4-3-3の順に並びややつまって1-2本増す例もある。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の間が3間、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の間が5間である。柱穴の深さは浅いもので15cm前後、深いもので50cm前後を計り、直径は30cm前後であり隅丸形状を呈している。

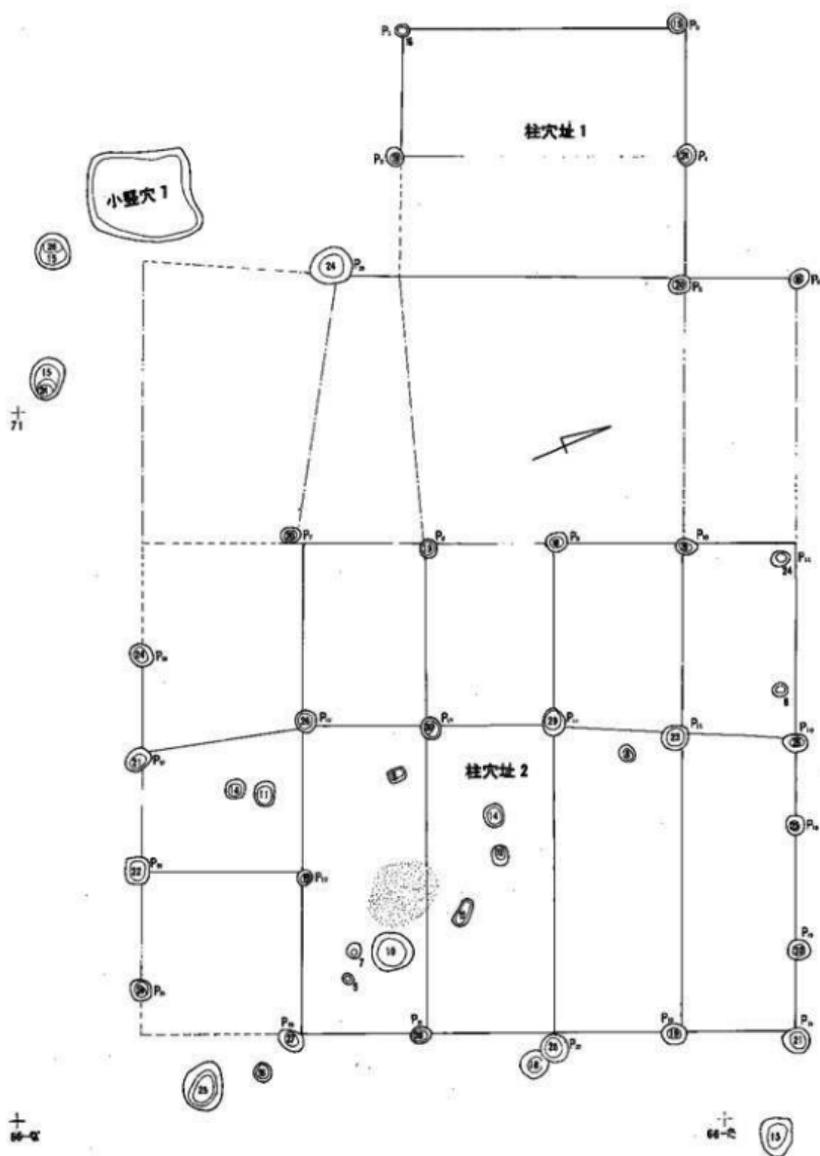
集石址1号が、柱穴址3号内に包括されていると考えられる。

東西2.6m、南北1.6mを測り、深さは6cm前後を測る。石質は自然石の花崗岩・砂岩が主体を占める。出土遺物はない。

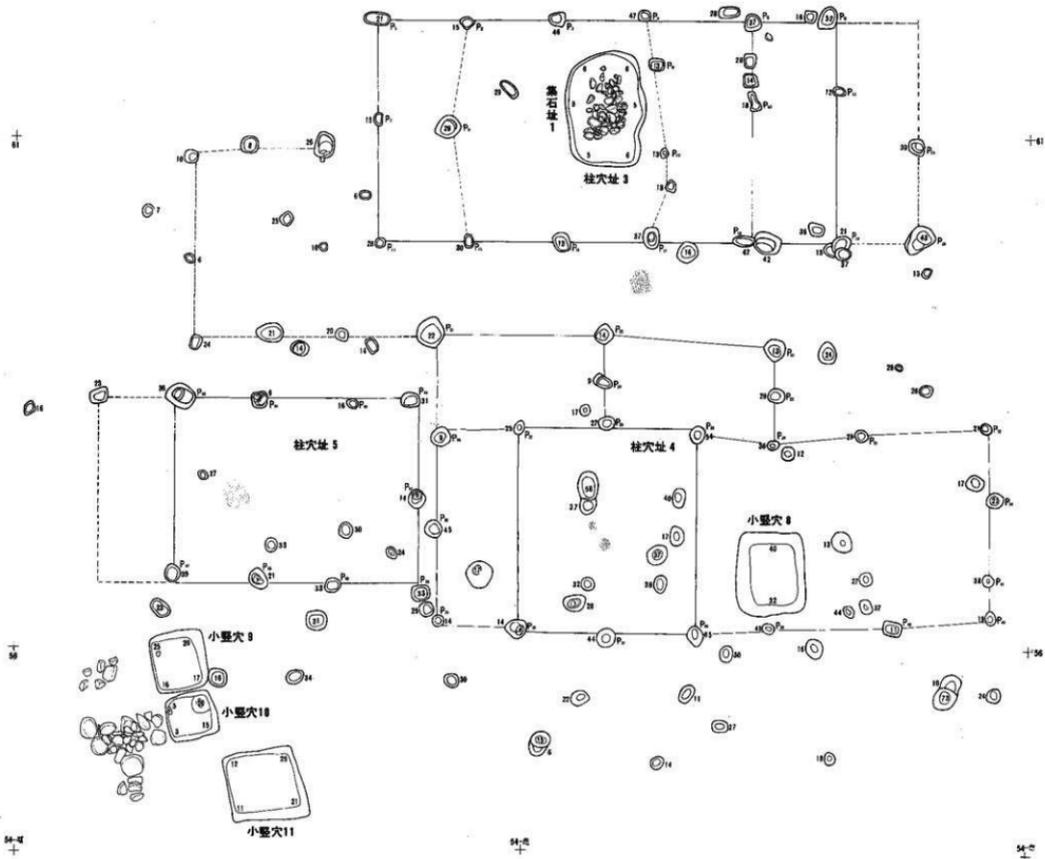
柱穴址4号は3号柱穴址の東1.8mに位置し、P<sub>21</sub>～P<sub>42</sub>の22本からなり、さらに東側の南北軸の列も関係がありそうであるがはっきりとはしない。

P<sub>21</sub>～P<sub>22</sub>～P<sub>23</sub>の間隔は3.35mの等間隔を保ち2間弱である。この3本はP<sub>26</sub>～P<sub>31</sub>の6本柱に対応して中間に位置する(P<sub>21</sub>とP<sub>26</sub>は並ぶが)。P<sub>26</sub>～P<sub>32</sub>の7本の柱はほぼ1.8m＝1間の間隔で並び6間を測る。P<sub>35</sub>～P<sub>42</sub>も同様である。P<sub>26</sub>～P<sub>31</sub>の間隔が1間間隔の2間であり、南北6間、東西2間の建物遺構を推察させる。深さは総じて25～50cm前後で、円形のプランを呈する。

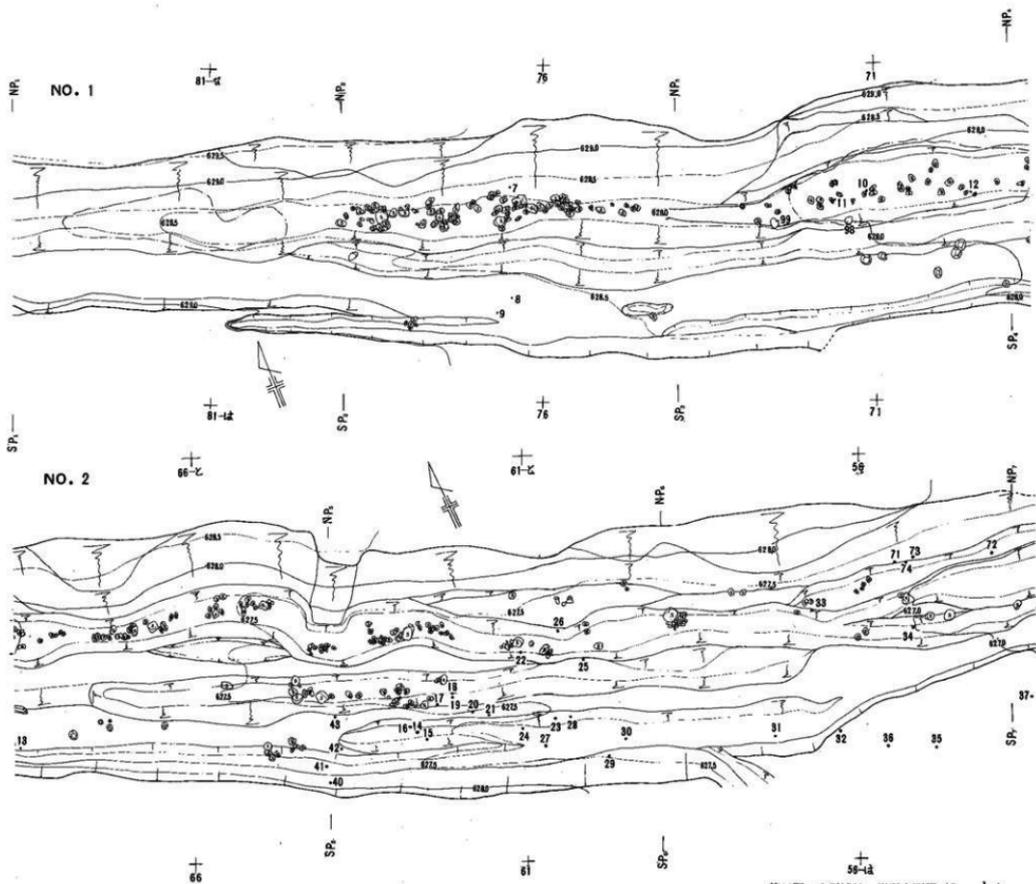
なお、小竪穴8号が、4号柱穴址の中に包括される。東西1.6m、南北1.35mを測り、深さは西壁で40cm、東壁で32cmを測る。平面プランは長方形を呈する。出土遺物はない。

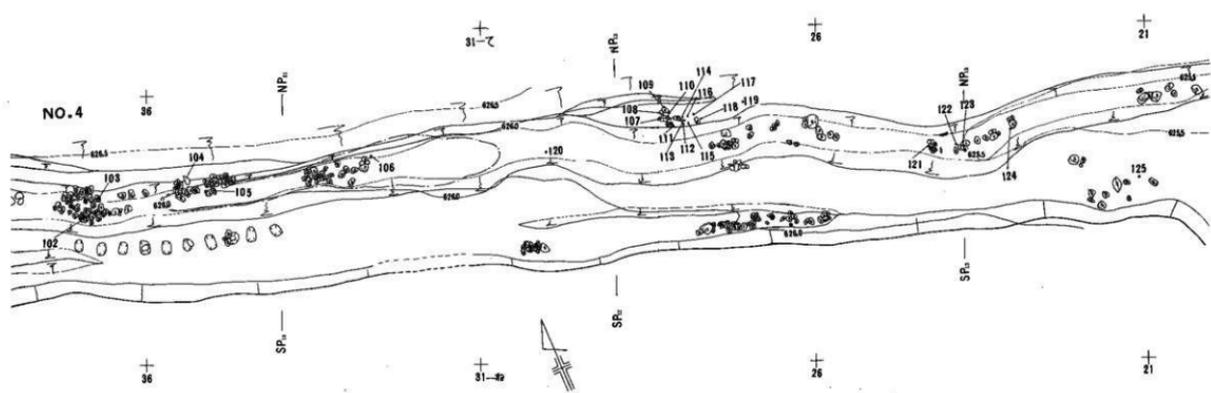
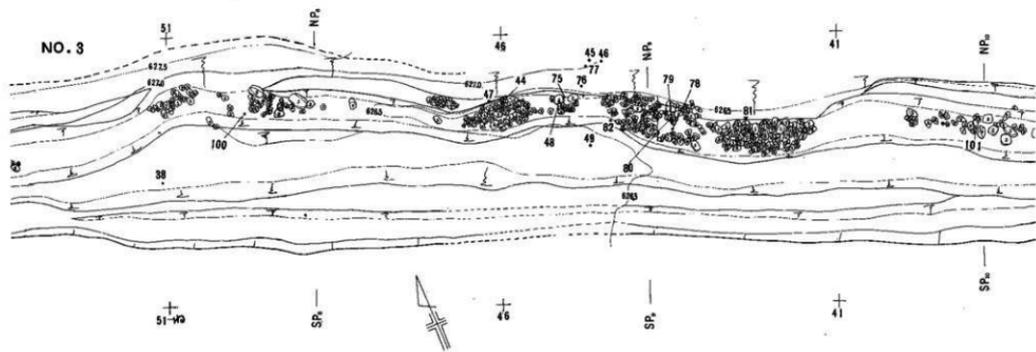


第42图 赤須城址柱穴址1・2号，小墓穴7号实测图（S—北）



第43图 赤須城址柱穴址3~5号及び墓石址1号, 小墓穴8~11号 (S—北)





第45图 赤須城址 概観平面図 (S=1/100)

柱穴址5号は4号柱穴址のすぐ南側に接するような位置にある。P<sub>43</sub>~P<sub>51</sub>の9本からなり、南より2-2-2-3本の順に並び内側にもピットが見られるが関係ははっきりしない。

P<sub>43</sub>~P<sub>46</sub>の4本の柱は1.5~1.8mの間隔で2間半あり、P<sub>46</sub>~P<sub>50</sub>の3本の柱の間隔は1間づつで2間であり、東西2間、南北2間半の建物遺構を推察される。南寄りに焼土が5cm前後堆積していた。柱穴の深さは30cm前後が主であり、隅丸方形を呈する。出土遺物はない。

## 6) 小竪穴9~11号(第43図)

柱穴址5号の東域に位置し、9・10は並ぶ形をとっている。

9号小竪穴は東西1.2m、南北1.05mの長方形を呈し、深さは20cm前後である。壁・床ともに堅ちである。出土遺物はない。

10号小竪穴は東西95cm、南北1mの方形を呈し、北壁で15cm、南壁で3~5cmを測り床は傾斜している。床・壁ともにやや軟弱である。北西壁に深さ20cmのピットがある。出土遺物はない。

11号小竪穴は東西1.35m、南北1.45mを測り、深さは北壁で20cm~25cm、南壁で10cm位を測る。ほぼ方形を呈し、床は傾斜し、床・壁ともに堅ちである。出土遺物はない。

なお、これらの小竪穴の南側の地点に花崗岩の自然石が堆積していたが関係は、はっきりとしなかった。

## 7) 縦堀(第44~48図、図版13・14)

城上げ井の南方50mに東西に走る縦堀が今回はじめて確認された。それまでは農道として利用され、北側が水田と畑、南側が水田であった。

東西150m、南北3mの縦堀が確認され、その内東西130mが発掘された。この縦堀は、第6番目の横堀に直交し、さらに本丸へ向って通じると考えられる資料を得た。

第44・45図は挿図の都合上、分断してしまったがNo.1~4は連結される。

第46図の堀断面図と相照していただくと解りやすいと考えるが、耕地上の作用でSP<sub>1</sub>-NP<sub>1</sub>~SP<sub>4</sub>-NP<sub>4</sub>においては引水用の溝が南側に残り、また農道の為、南・北の地面より高い位置を占めている所もある。

南北幅は西より東へ移行するにつれ狭くなって行くが、半ばでやや幅広くもなっている。堀の断面は南側に一段溝をもち、平担部がありそしてU字状の堀底があり、やや急な角度をもって北側に上って行く状態を示している。

SP<sub>7</sub>-NP<sub>7</sub>からSP<sub>13</sub>-NP<sub>13</sub>にかけては北壁が耕作地の関係で攪乱を受けている。

SP<sub>1</sub>-NP<sub>1</sub>は上面幅6m、深さ1.1mを測る。覆土上層には堀を後世で埋めたローム土が厚く堆積している。堀の最下層には暗褐色土が堆積し砂を多く含んでいる。

SP<sub>2</sub>-NP<sub>2</sub>は上面幅6.7m、深さ1.25mを測る。S・NP<sub>1</sub>同様な堆積をみせている。堀底の南壁にもう一つの溝がみえはじめる。

SP<sub>3</sub>-NP<sub>3</sub>は上面幅7.5m、深さ1.3mを測る。埋め土のローム土が北壁に寄り、南壁寄りの溝、さらに下段の溝が顕著に見られる。また、その部分の覆土に暗褐色各層が厚く堆積している。

SP<sub>4</sub>-NP<sub>4</sub>は上面幅7.8m、深さ1.5mを測る。埋の土のローム土が全体的に堆積し、最下層には砂・炭を多く含んだ明褐色土が堆積している。最大の深さをもつ。

SP<sub>5</sub>-NP<sub>5</sub>は上面幅7.5m、深さ1.3mを測る。S・NP<sub>3</sub>に同様に堀底の南壁の2段の溝が再び顕著となる。最下層に砂層単純層がみられはじめる。

SP<sub>6</sub>-NP<sub>6</sub>は上面幅9.0m、深さ1.05mを測る。砂層が堀底の中心部に堆積している。黒褐色土層も割と厚く堆積している。最大の幅をもち、南・北壁が同レベル位になる。

SP<sub>7</sub>-NP<sub>7</sub>は上面幅4.4mしか確認できず、深さは90cmを測る。表土と黒色土の層間に自然石の花崗岩が堆積しているのが目立つ。堀底には砂層がみられなくなる。

SP<sub>8</sub>-NP<sub>8</sub>は上面幅6.0mまで確認でき、深さは1mを測る。最下層には砂を多く含んだ暗褐色土が堆積し、その上に純砂層が堆積している。

SP<sub>9</sub>-NP<sub>9</sub>は上面幅4.9mまで確認でき、深さは70cmを測る。中間層の暗褐色土層がかたく踏み込まれている点に注意をひく。

SP<sub>10</sub>-NP<sub>10</sub>は上面幅4.7mまで確認でき、深さは60cmを測る。最下層には砂を多く含んだ暗褐色土が再び堆積している。埋め土の黄褐色土（ローム土）が中間層に堆積している。

SP<sub>11</sub>-NP<sub>11</sub>は上面幅4.5mまで確認でき、深さは70cmを測る。最下層の暗褐色土層がかたく踏みかためられている。

SP<sub>12</sub>-NP<sub>12</sub>は上面幅5.2mまで確認でき、深さは90cmを測る。下層はほとんどが暗褐色各層で占められている。

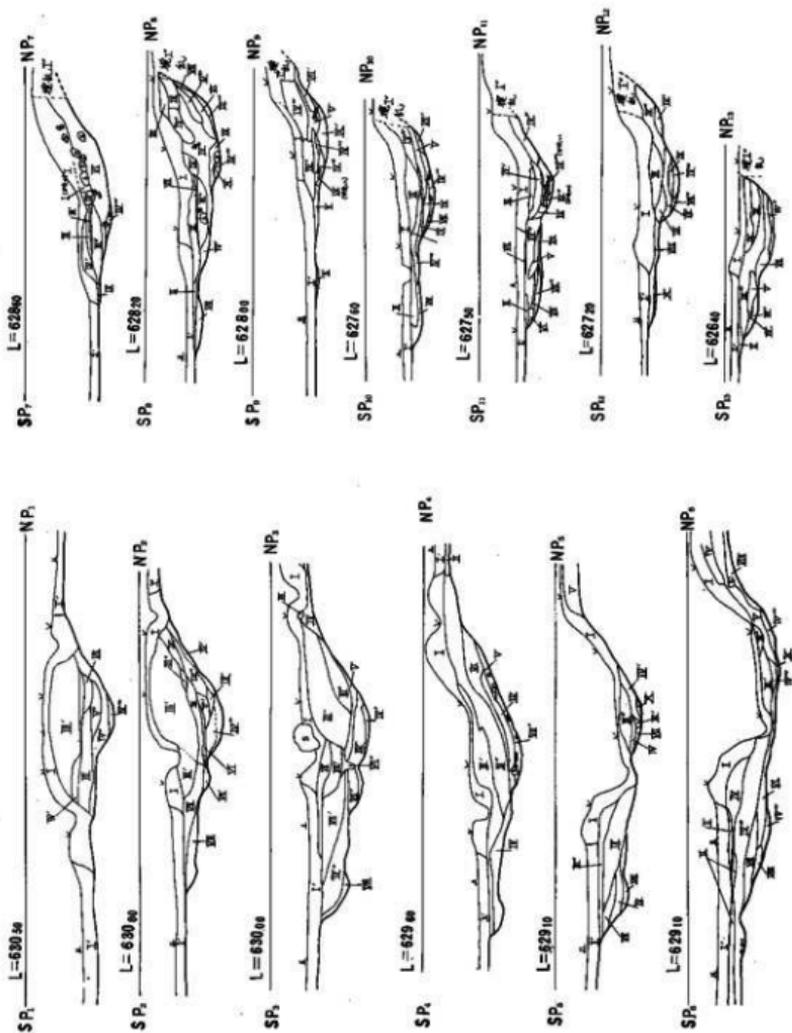
SP<sub>13</sub>-NP<sub>13</sub>は上面幅4.0mまで確認でき、深さは70cmを測る。層位的には暗褐色土層と黄褐色土層が整層をもって堆積している。北壁は攪乱の為、南壁の方が高い位置を保っている。

SP<sub>9</sub>-NP<sub>9</sub>から堀底の南側の2つの溝がだいぶ浅くなり、なだらかになりSP<sub>13</sub>-NP<sub>13</sub>に至っては一段になっている。

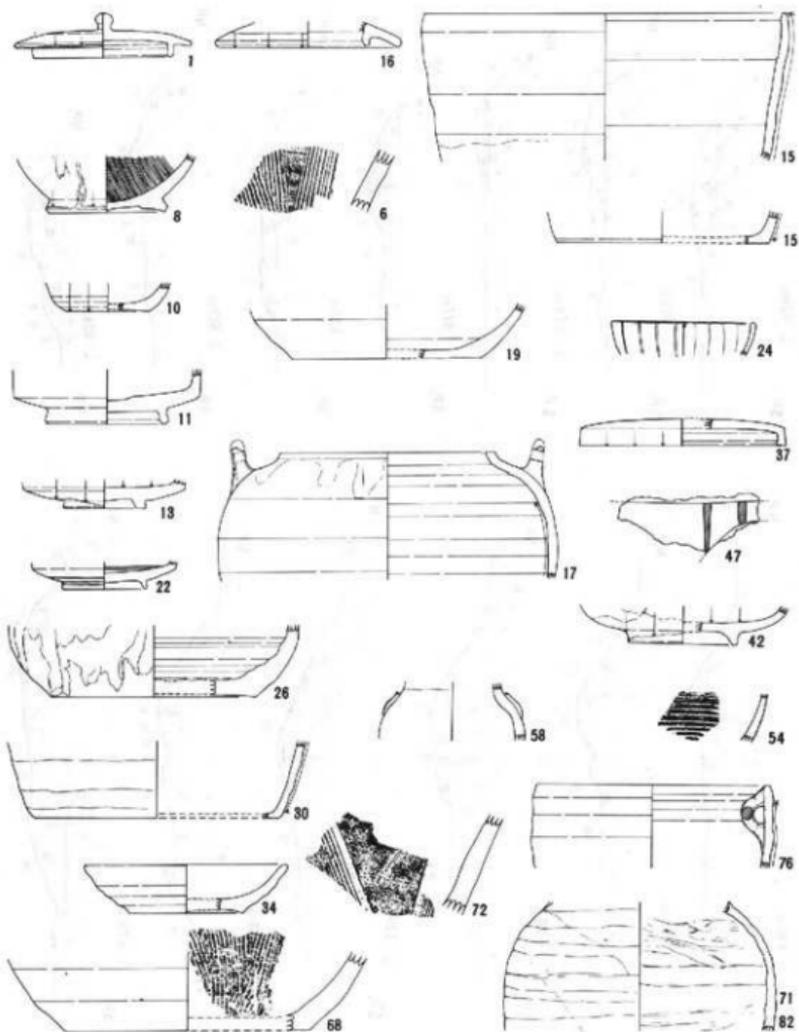
縦堀は總体的に強い蛇行は見せず、中間地区に至る堀底はこぶし大から人頭大の花崗岩の自然石が堆積し、それより下方は濃密に自然石の堆積がみられる。堀の内側に向かってテラス状に一段下がった箇所も北壁にみられるし、その対岸の南壁にもピットが列状をなす箇所もみられる。全体的に南壁は開田・改田の際に削除された経遇も考えられる。

さらに、堀底の砂層が一定して堆積してはなくて、暗褐色土（砂を多く含む）の堆積がよくみられる。

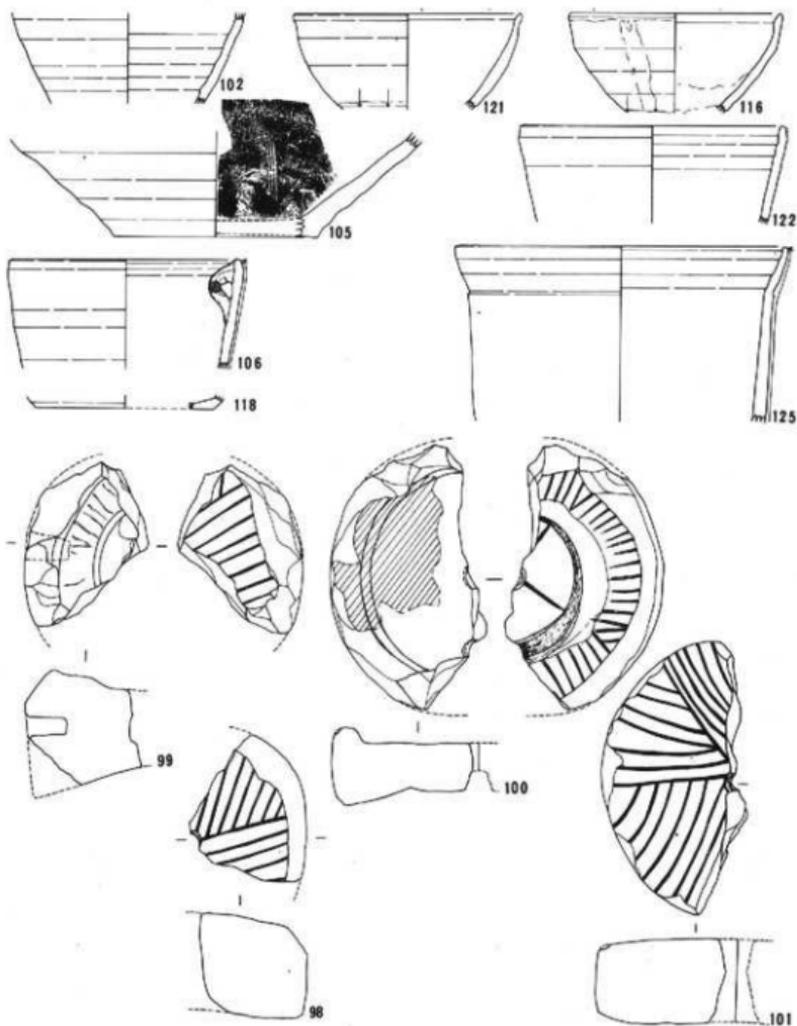
標高は第44・45図に見られるように、628.5m～625.5mの内に位置し、比高差3mのゆるやかな堀である。



第46図 赤須城址 縦断面図 (S—120)



第47图 赤須城址 甗型出土遺物実測図 (S-ab)



第48图 赤須城址 縦堀出土遺物実測図 (S-ab)

### 赤須城址縦堀出土遺物一覧表

番号	名称器形	部 位	出 土 場 所	製作年代	挿 図 番 号	備 考
1	鉄 釉 蓋	土 個 体	52-なG	室 町 後 期	第 47 図	瀬戸
2		胴	31-なG	◇		◇・鉄釉
3	す り 鉢	胴・底	31-にG	室 町		◇
4	灰 釉 甕	胴	◇	室 町 末		◇
5	天 目 碗	底	◇	室 町		◇・けずり高台
6	す り 鉢	胴	◇	室 町 後 期	第 47 図	◇
7	◇	◇	76-にG (埋土)			
8	◇	胴・底	74-ぬG (◇)	安 土 桃 山	第 47 図	瀬戸
9	◇	底	76-ぬG (◇)	室 町		◇
10	鉄釉茶入れ	◇	71-にG (◇)	◇	第 47 図	◇
11	灰釉水注し	◇	◇ (◇)	室町末か桃山	◇	◇
12	す り 鉢	胴	69-にG (◇)	安 土 桃 山		◇
13	灰釉水注し	底	68-ぬG (覆土)	室町末か桃山	◇	◇
14	内耳土器	◇	62-ぬG (◇)			
15	◇	口縁・胴	◇ (◇)		◇	
16	水注し	◇	◇ (◇)	安 土 桃 山	◇	瀬戸・志野釉
17	鉄 釉 壺	口 縁	◇ (◇)	江 戸	◇	◇
18	内耳土器	胴	61-ぬG (◇)			
19	鉄 釉 甕	底	◇ (◇)	室町末か桃山	◇	瀬戸
20	内耳土器	胴	◇ (◇)			
21	◇	◇	◇ (◇)			
22	染付茶碗	底	61-にG (◇)	江 戸 初	◇	瀬戸
23	内耳土器	胴	60-ぬG (◇)			
24	菊 皿	口 縁	61-ぬG (◇)	江 戸	◇	瀬戸・瀬戸釉
25	鉄 釉 甕	底	60-にG (◇)	室 町 末		◇
26	◇	◇	◇ (◇)	◇	◇	◇ } 同一
27	土師質土器	◇	60-ぬG (◇)			
28	内耳土器	胴	60-ぬG (◇)			
29	◇	口 縁	59-ぬG (◇)			同一個体
30	◇	底	◇ (◇)		◇	
31	不 明	◇	57-ぬG (◇)	室 町		瀬戸・鉄釉
32	内耳土器	胴	56-ぬG (◇)			
33	灰 釉 皿	底	56-にG (◇)			

番号	名称器形	部位	出土場所	製作年代	挿図番号	備考
34	灰釉皿	1/4個体	55-にG(覆土)	安土桃山	第47図	瀬戸
35	内耳土器	口縁	54-ぬG(◇)			
36	灰◇	◇	55-ぬG(◇)			
37	灰釉蓋	1/4個体	53-ぬG(◇)	室町	◇	瀬戸
38	天目碗	胴	51-にG(◇)	◇		◇
39	(不明)		52-のG(◇)			
40	天目茶碗	胴	64-ぬG(◇)	室町		瀬戸
41	鉄釉甕	口縁	(◇)	◇		◇
42	灰釉皿	底	(◇)	安土桃山	◇	
43	土師質土器	胴	64-ぬG(◇)			
44	内耳土器	口縁	46-なG(堀底)			
45	◇	胴	44-とG(覆土)			
46	灰釉甕	底	(◇)	室町		
47	(不明)		46-なG(◇)	◇		鉄製品
48	鉄釉甕	底	45-なG(◇)	室町末		
49	すり鉢	胴	44-なG(◇)	◇		瀬戸
50	内耳土器	◇	63-はG(◇)			
51	◇	口縁	(◇)			
52	鉄釉甕	胴	64-はG(◇)	室町末		
53	内耳土器	◇	64-ふG(◇)			
54	天目茶碗	◇	(◇)	室町	◇	
55	内耳土器	◇	63-ふG(◇)			
56	◇	口縁	(◇)			
57	◇	底	(◇)			
58	天目茶入	胴	62-ふG(◇)	室町	◇	
59	すり鉢	◇	(◇)	◇		
60	天目茶碗	◇	(◇)	◇		
61	鉄釉茶碗	◇	(◇)	室町末		
62	◇	口縁	(◇)	室町		
63	天目茶碗	胴	61-ふG(◇)	◇		
64	内耳土器	口縁	61-はG(◇)			
65	縄文土器	胴	61-へG(◇)			後期
66	灰釉蓋	1/4個体	(◇)	江戸		
67	内耳土器	胴	59-ふG(◇)	室町		
68	すり鉢	◇	(◇)			

番号	名称	器形	部位	出土場所	製作年代	挿図番号	備考
69	灰	釉蓋	胴	59-ふG(覆土)	室町末か桃山		
70	鉄	釉甕	◇	60-はG(覆土)	室町		
71	◇	◇	◇	55-なG(◇)	◇	第47図	
72	す	り鉢	◇	54-なG(◇)	◇	◇	
73	内	耳土器	◇	55-なG(◇)			
74	◇	◇	◇	◇(◇)			
75	染	付碗	◇	44-とG(◇)	江戸初		
76	内	耳土器	口縁	◇(◇)		◇	
77	鉄	釉鉢	底	◇(◇)	室町		瀬戸, 25と同一
78	内	耳土器	胴	43-なG(堀底)			
79	(不明)	◇	◇	◇(◇)	室町		灰釉
80	須	恵器	底	◇(◇)	国分末		
81	す	り鉢	胴	42-なG(◇)	室町		
82	鉄	釉甕	◇	44-なG(覆土)		◇	71と同一
83	内	耳土器	◇	小竪穴2(◇)			
84	◇	◇	◇	小竪穴5(◇)			
85	◇	◇	口縁	◇(◇)			
86	◇	◇	口縁・底	1号住居址(◇)			
87	天	目茶碗	底	◇(◇)	室町		
88	内	耳土器	口縁	◇(◇)			
89	◇	◇	胴	◇(床面)			
90	◇	◇	◇	◇(◇)			
91	土師	質土器	◇	◇(◇)			
92	天	目茶碗	◇	◇(◇)	室町		
93	(不明)	底	◇	◇(◇)	◇		灰釉
94	土師	質土器	胴	小竪口4(覆土)			
95	◇	◇	◇	◇(◇)			
96	内	耳土器	◇	1号住居址(◇)			
97	◇	◇	口縁				
98	石	臼	1/2個体	71-ぬG(堀底)	室町	第48図	
99	◇	◇	◇	72-ぬG(◇)		◇	
100	◇	◇	1/2個体	49-なG(◇)		◇	鉄釉
101	◇	◇	◇	38-なG(◇)		◇	
102	灰	釉甕	胴	36-なG(◇)	室町中期	◇	瀬戸
103	鉄	釉碗	◇	◇(◇)	室町末		

番号	名称器形	部位	出土場所	製作年代	挿図番号	備考
104	石 白	瓦 個 体	35-なG (堀底)			
105	すり鉢	胴	34-なG (◇)	室 町	第 48 図	
106	内耳土器	口 縁	32-とG (◇)		◇	117と同一
107	◇	胴	28-とG (覆土)			
108	◇	口 縁	◇ (◇)			
109	◇	胴	◇ (◇)			
110	◇	底	◇ (◇)			
111	◇	胴	◇ (◇)			
112	鉄 釉 甕	◇	27-とG (◇)	室 町		瀬戸
113	すり鉢	◇	◇ (◇)	◇		◇
114	内耳土器	◇	◇ (◇)			
115	◇	◇	◇ (◇)			
116	天目茶碗	口 縁	◇ (◇)	室 町 中 期	◇	瀬戸
117	内耳土器	胴	◇ (◇)			
118	◇	底	◇ (◇)		◇	
119	すり鉢	胴	◇ (◇)	室 町		瀬戸
120	内耳土器	◇	30-とG (堀底)			
121	黄天目碗	口 縁	24-とG (◇)	室 町 末 か	◇	瀬戸
122	内耳土器	◇	23-とG (◇)		◇	
123	◇	胴	◇ (◇)			
124	◇	◇	22-とG (◇)			} 同一個体
125	◇	胴	21-なG (◇)		◇	

遺物 (第47・48図, 図版 14)

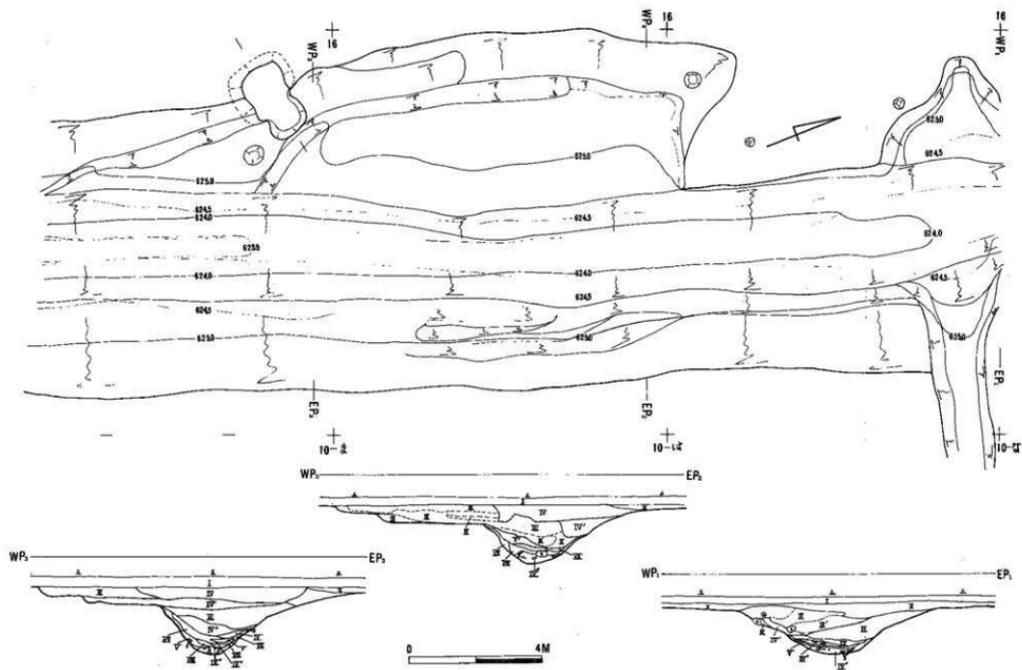
堀堀の主な出土遺物は第45・46図に番号を付したものであり前記の一覧表の番号と一致する。

復元可能なもの、特徴的なものをピックアップして次の表にまとめる。

(単位 cm)

挿図番号	法 量	色 調	調 整	備 考
47-1	内径7.5, 外径9.4, 高2.4	赤褐色釉, 胎土-灰白色	蓋上面一回ヘラ, 側面-ナデ	内面すす付着, 硬胎
-6		鉛色, 胎土-淡黄色		硬胎
-8	底径12.2	暗茶褐色, 胎土-灰白色		◇, 目こまかい
-10	底径 4.4	黒緑色, 胎土-灰白色	底部-左回ヘラ, 内面-ナデ	◇
-11	底径 6.2	透明釉, 胎土-灰白色	内外-ヘラ削り	◇
-13	底径 4.2	◇	内外-ヘラ削り	◇

押出番号	法 量	色 調	調 整	備 考
47 - 15	口径37.6	外-黒色、内-赤褐色	内外-ナア、口唇部-ヘラ削り	胎土-白砂多い、焼-良好
16	内径 6.2、外径 9.5	透明釉、胎土-灰白色	内外-ヘラ削り	硬胎
17	口径11.3、胴径18.0	茶褐色釉、胎土-白色	外-ヘラ削り、内-ナア	焼-やや甘い
- 19	底径10.0	暗茶褐色釉	内-ナア、外-ヘラ削り 底-ヘラ切り	焼-良好、硬胎
- 22	底径 4.5	透明釉	内外-ナア、底-回ベラ	薄い青で染付ける
- 24	口径 7.0	、口唇部-茶色	内外-ナア	硬胎
- 26	底径11.8	黒・茶色釉、胎土-灰色	内-ナア、外-ヘラ削り 底-ヘラ切り	焼良好、釉厚い、硬胎
- 30	底径25.6	内-淡褐色、外-黒色	内外-ナア	硬胎、胎土-細かい白砂
- 34	口径10.4、底径 6.2、高 2.6	緑色釉、胎土-灰色	内外-ナア	硬胎
- 37	口径11.0	淡灰白色	内外-ヘラ削り	、
- 42	底径 5.6	淡緑色釉	内-ナア、外-ヘラ削り	、
- 47	根本幅 1.2、厚さ 0.4			
- 54		淡緑色、内-天目釉	外-平行の沈線	無釉、硬胎
- 58	胴径 7.6	外-天目釉、胎-灰白色	外-ナア	硬胎
- 68	底径13.0	外-鉄釉、胎土-淡黄色	外-ヘラ削り、底-糸切り	焼-やや甘い
- 71-82	胴径28.0	内-灰色、外-茶色	外-ヘラ削り、内-ナア	硬胎、胎土-灰青色
- 72		外-鉛色、胎土-淡青色	外-ヘラ削り	焼-やや甘い
- 76	口径24.8	内-暗褐色、外-黒褐色	外-ナア、内-一部ヘラ削り	胎土-細かい白砂
- 98	直径25.0、厚10 (下白)		中心孔あり	目数(7)、安山岩
- 99	直径34.0、厚13~8 (上白)		側面に孔あり (2×2.8×4.5)	目数(8)、
- 100	直径30.8、厚 8.5~5 (上白)		中心孔と偏孔あり	目数(12)、
- 101	直径29.4、厚 8.5 (下白)		中心孔あり	目数(7)、
- 102	胴径24.6	淡緑色釉、胎土-灰色	内-ナア、外-ヘラ削り	硬胎、焼-良好
- 105	底径10.8	鉛色、胎土-淡黄色	内外-ナア	胎胎 硬
- 106	口径24.6	内-淡褐色、外-黒褐色	内外-ナア、口唇部-ヘラ削り	焼き甘い、胎土-白砂
- 116	口径11.0	内外-天目釉、胎土-淡黄色	内-ナア、外-ヘラ削り	硬胎
- 118	底径18.8	内外-褐色	内外-ナア	焼き良、胎土-白砂
- 121	口径12.0	内外-黄天目釉	内-ナア、外-ヘラ削り	硬胎、胎土-白砂
- 122	口径28.0	内-淡黄褐色、外-淡褐色	内外-ナア	焼き良、胎土-砂粒
- 125	口径35.2、胴径31.4	内-淡褐色、外-黒褐色	内外-ナア、口唇部-ヘラ削り	焼き良、胎土-白砂



第49図 赤須城址 横掘No.6実測図 (S =  $\frac{1}{125}$ )

## 8) 横堀No.6 (第49・50図, 図版 15)

横堀No.6は全長220mに及ぶが、今回の調査では南端の小宮沢川に落ち込む部分の30mを発掘調査した。この部分とさらに北側40mは現状の景観では堀の様相をもたず、宅地及び水田・畑の耕作地と化していたが、原形をとどめる北域の状態より堀の延長性が推定されていた。

本堀は北側部分において縦堀と直交している。さらに、堀の中央部西壁は長さ13m、幅5mをもって張り出し、その南隅には、長軸2.2m、短軸1.2m、深さ1.5mを測る室状遺構1号が確認された。この室状遺構1号の覆土中からは遺物は検出されなかった。

第49図の平面・断面両図で分かるように上面幅6m前後、深さ1.5m前後を測る。

WP<sub>1</sub>-EP<sub>1</sub>は、上面幅6m、深さ1.3mを測る。層序では表土-地場-暗黄褐色土-ローム土-黒褐色土-暗褐色土の順に下層に至る。堀底はこぶし大から人頭大の石が多く含まれている。中間層のローム土は後世の埋め立てのものであろう。

WP<sub>2</sub>-EP<sub>2</sub>は、上面幅9.5m、深さ1.7mを測るが上面幅は5.5~6mとして把握できる。上層は暗褐色土が中央部を占め、中間層にローム土、堀底に砂を多く含んだ暗褐色土が堆積している。

WP<sub>3</sub>-EP<sub>3</sub>は、上面幅9.5m、深さ2.0mを測るがWP<sub>2</sub>-EP<sub>2</sub>同様に上面幅は6.5m前後として把握できる。層序は上層にややWP<sub>2</sub>-EP<sub>2</sub>より広まった状態で暗褐色土が堆積し、中間層のローム土をへて、堀底は再び暗褐色土が堆積している。

全体的に見ると、中間層のローム土より下が自然堆積であり、ローム土及びその上層の暗褐色土等は人為的作用が加わっている。

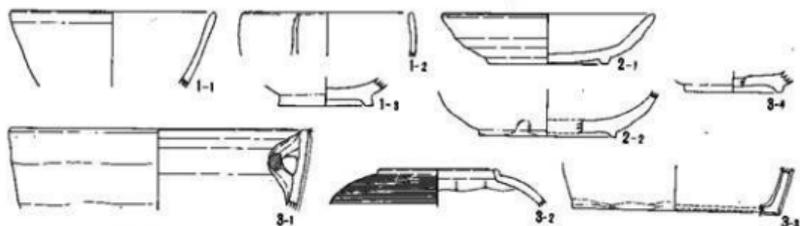
### 遺物 (第50図,)

出土遺物で図上復原可能なものは少なく、第50図に示したものが主である。

1-1・2・3がW・EP<sub>1</sub>とW・EP<sub>2</sub>の間の覆土より出土したもので、1が灰釉碗で口径10cmを測り、硬い胎土で灰白色を呈す。2は緑釉碗で口径9cmを測り硬い胎土で灰白色を呈す。3は灰釉皿底部片で底径5cmを測り、灰白色の硬い胎土である。

2-1・2はW・EP<sub>2</sub>とW・EP<sub>3</sub>の間より出土したものである。1は灰釉の灯明皿でほぼ完形であり、口径11cm、底径6.6cm、高さ2.7cmを測る。硬い胎土で淡灰色を呈す。2は灰釉皿で底径7.2cmを測り、硬い胎土で白色を呈す。

3-1~4はW・EPより南側で出土したものである。1は内耳土器の口縁部片で口径31.2cmを測り、内外面ともにナデをし、一部口唇部から外面がヘラ削りである。外面は黒褐色、内面は淡黄褐色を呈し、焼成はやや甘く白砂粒を多く含む。2は鉄釉(暗茶褐色)のかかった壺で口径6.4cmを測り、外面はくし状の横沈線がこまかく施されている。3は内耳土器の底部片で底径21.6cmを測り、内外ともにすなが付着し、黒褐色を呈す。こまかい白砂粒を多く含む。4は内面底に菊の印面文が施された灰釉皿で底径5.0cmを測り、硬い胎土で白色を呈する。



第50図 赤須城址 横堀No.6 出土遺物 (3-1・3はS- $\frac{1}{2}$ , 他かは $\frac{1}{3}$ )

またW・EPの南側の暗褐色土(IV層)より長さ3mm, 幅2mm~2.5mmを測るアワの炭化種子が400粒近く(原形をとどめるもの368粒), 第50図2-1の灯明皿, 焼土, 木炭化物とともに検出された。埋土であるローム土より下層に遺存していたので攪乱を受けた形跡はなく, 堀に伴うものであり, 当時の生活資料の一つとして位置付けられる。

#### 横堀No.6東域遺構 (第51図, 図版16)

横堀No.6の東域部分, すなわち堀の内側の調査も行った。第51図の全測図を参照していただければ明らかなように, 住居址1軒, 小竪穴9基(12号~20号), 焼石址2基(2・3号), 室状遺構1ヶ所(2号), 溝状遺構一ヶ所, 柱穴址6基(6~11号)が発掘された。

住居址は南端に, 小竪穴及び集石・焼石址は中央部より北域に発見され, 柱穴址が周辺をとり囲む形態をとり, 室状遺構と溝状遺構は東端に位置する。

#### 1) 第2号住居址 (第52・53図, 図版16)

調査地区の南端中央部に位置する。

東西4m, 南北3.8mを測る。南・北壁に深さ5~13cmの周溝をもち, 西壁のほぼ中央で終り全周はしていない。

堀り込みは東西壁で25~28cm, 南北壁で12~25cmを測り, 南壁はかなり浅く, 南東壁は40cm位張り出していて, 焼土が2~3cm堆積していた。

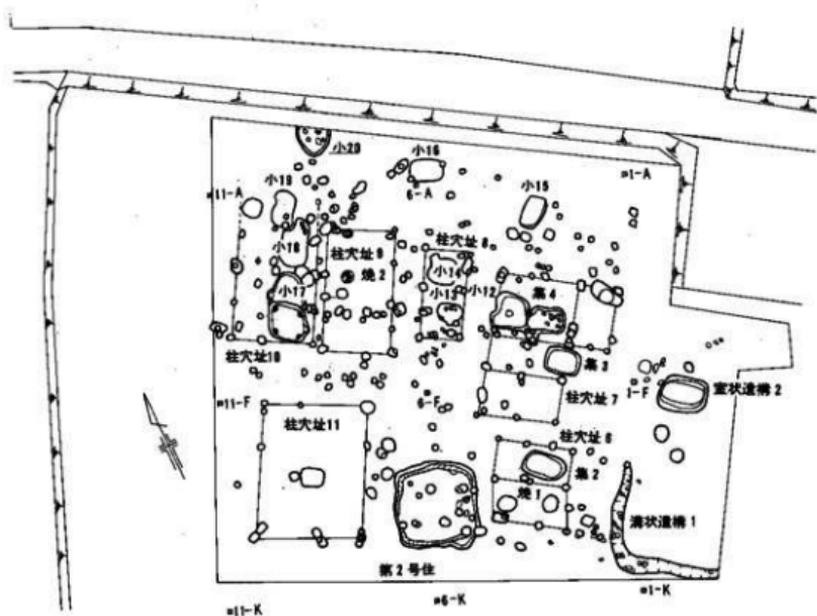
床面は平担堅ちであったが, 柱穴の位置がはっきりとしなかった。

主柱穴は, P2・3・4・6・11が位置的には見て取れるが, 北側の柱穴がはっきりとしない。P1・12・13・5・7も割りと深く, しっかりとしていたが解からなかった。

床面より10~13cmの覆土中には木炭化物が焼土とともに遺存し, 火災を受けた住居であることはまちがいないと考えられる。

また, カマドは東壁に位置していたが, はっきりとしたカマドの形をとどめていなかった。

なお, 北東壁寄りのピットには自然石が7個かたまて出土した。



第51図 赤須城址 横堀No.6東城遺構全体図 (S -  $\frac{1}{200}$ )

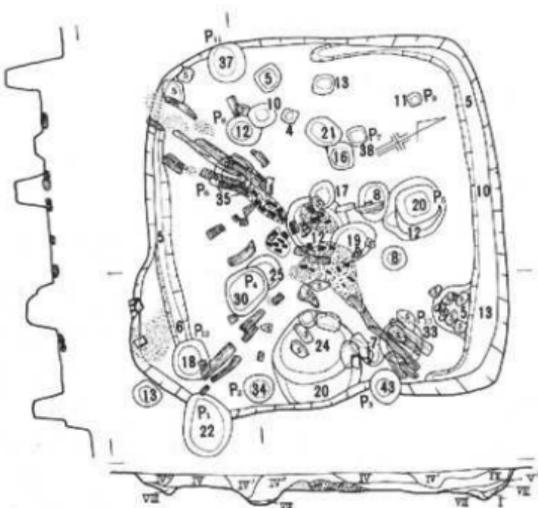
第2号住居址より出土した遺物は少なく、復元できるものも少なかった。第52図に示したものがそれである。

内黒の土師器や土師質土器の砂片が多く見られ、陶磁器及び須恵器類の出土はごくまれであった。

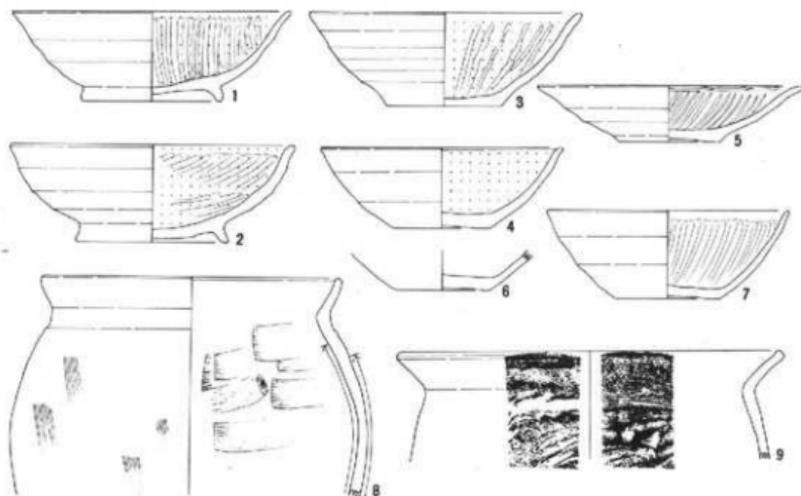
全体的には高台付環や環、甕の器形が目立ち、時期的には、平安時代末の様相を呈している。内黒の土器破片が異なる個体で多く発見されたことは意味深い。

1～4は内黒の土師器で  
 1と2は高台付環, 3と4  
 は環である。1は底径7cm  
 口径14.6cm, 高さ4.8cmで  
 底は右回りのヘラ切りであ  
 る。色は灰褐色を呈す。2  
 は底径7.8cm, 口径14.6cm  
 高さ5.2cmで, 底は左回  
 りのヘラ切りであり, 黄褐  
 色を呈す。3は, 底径6cm,  
 口径14.2cm, 高さ5cmを測  
 り, 底は右回りの糸切りで  
 暗褐色を呈す。4は, 底径  
 5cm, 口径12.6cm, 高さ4.3  
 cmを測る。底は磨りへって  
 整形は解らず, 黄褐色を呈  
 す。

5は皿で, 底径5.2cm, 口



第52図 赤須城址 第2号住居址実測図 (S-6)



第53図 赤須城址 第2号住居址出土遺物実測図 (S-4)

径13.8cm, 高さ3cmを測り, 底は右回りの糸切りで, 色は淡赤褐色を呈す。

6は環であると考えられるがはっきりしない。底径5cmで底は右回りの糸切りで, 灰褐色を呈す。

7は環で, 底径5.4cm, 口径12.6cm, 高さ4.7cmを測り, 底は右回りの糸切りで, 暗褐色を呈す。

8・9は瓿で, 8は口径15.4cmを測り, 口唇部はやや内湾している。淡褐色を呈すが, 内外面はすす・おこげの付着が著しい。成形は, 外面粗い縦のヘラなどで, 内面横のヘラなどをしていいる。9は, 口径20cmを測り, 口縁部は外反している。成形はヘラがきをしている。色は淡褐色を呈す。

## 2) 焼石址1号と集石址2号, 柱穴址6号(第54図, 図版17)

焼石址1号, 集石址2号, 柱穴址6号は, 第2号住居址の東側のすぐ近くに発見された。

焼石址1号は, 東西90cm, 南北68cm, 深さ65cmを測る。平面形は楕円形, 断面形はすりばち形, 底は堅くやや丸味を帯びていた。焼石は直径20~30cm, 厚さ15~20cm位の砂岩・花崗岩であった。覆土は, 黒色土(木炭化物多く含む)とそれらの焼石で満されていた。出土遺物はなかった。

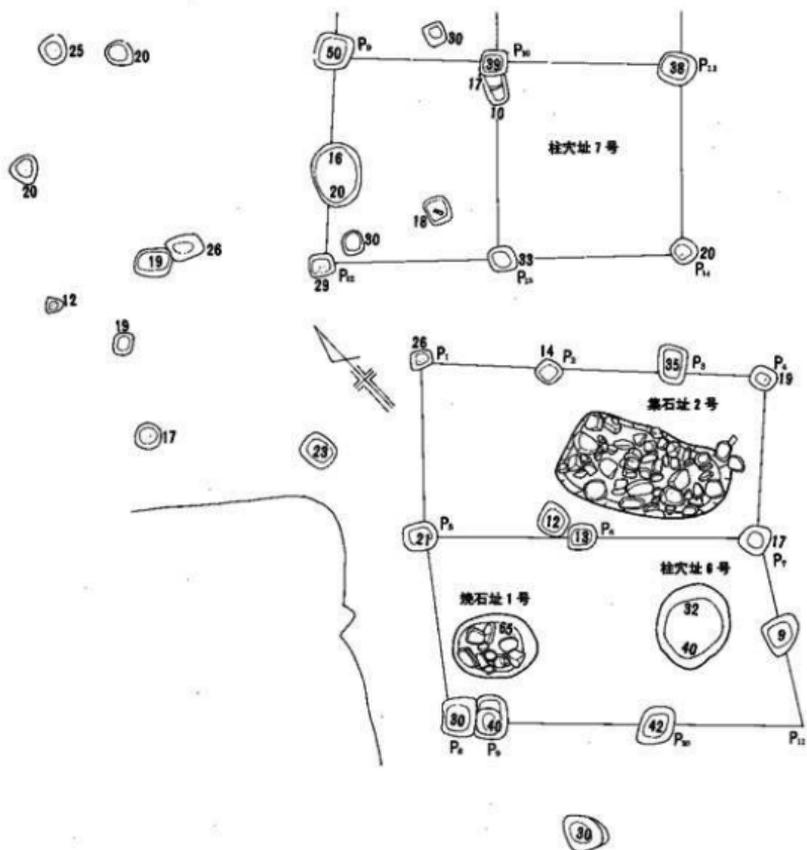
集石址2号は, 東西1m76cm, 南北96cm, 深さ50cm前後を測る。平面形は舟底形, 断面形はたらい形, 底はやや軟弱であった。集石は人頭大からこぶし大の自然石で, 花崗岩がほとんどで, 若干砂岩が含まれていた。覆土は上層30cm位が暗褐色土(木炭化物含む)で, 下層20cm位はロームふらん土であった。出土遺物はなかった。

柱穴址6号は, 焼石址1号と集石址2号を包含する形態で検出された。P<sub>1</sub>とP<sub>5</sub>の間隔が1間, P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間隔が1m40cm, P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>の間隔が1間, P<sub>6</sub>とP<sub>8</sub>の間隔が2m, P<sub>8</sub>とP<sub>10</sub>の間隔が2m20cmと定まらないうが, P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>の長さは3m60cmで2間となり, またP<sub>8</sub>~P<sub>11</sub>の長さも2m60cmとなり2間となる。P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>とP<sub>4</sub>~P<sub>11</sub>が4mとなり, 東西2間, 南北2間1尺強の建造構が考えられる。

## 3) 集石址3・4号と小竪穴12・15号, 柱穴址7号(第54・55図, 図版18)

集石址3号は, 東西1m80cm, 南北1m14cm, 深さ50cm前後を測る。平面形は長方形, 断面形はたらい形, 底は堅くしっかりしていた。集石は人頭大からこぶし大の自然石で, 花崗岩が多く, 砂岩が若干含まれていた。覆土は, 上層30~35cmが暗褐色土(木炭化物含む), 下層20~15cmがロームふらん土であった。出土遺物はなかった。

集石址4号は, 小竪穴12号と隣り合せの状態で発見された。東西1m70cm, 南北1m10cm, 深さ25~30cmを測る。集石址というよりは, 「炊事場」的要素—焼石址—をもつが, 焼石が半部位であったので, 調査時には集石址として取り上げた。



第54図 赤須城址 焼石址1号と集石址2号，柱穴址6号，柱穴址7号実測図 (S-6b)

東壁寄りに焼石と焼土・炭化物が集中していた。焼土・炭化物は5cm前後堆積していた。出土遺物はなかった。

小竪穴12号は、東西1m50cm、南北1m90cm、深さ50～60cmを測る。平面形はほぼ方形、断面形はたらい形、底は堅くしっかりしていた。底南西壁寄りに幅40cm、厚さ30cmの花崗岩の自然石が遺存していた。覆土は、暗褐色土（木炭化物を多く含む）が底まで堆積し、若干壁寄りに全体的にロームふらん土が堆積していた。

出土遺物はなかった。

柱穴址7号は、  
集石址3・4号、  
小竪穴12号を包む  
形で検出された。

図版の都合上、  
第54・55図にまた  
がってしまったが  
P<sub>1</sub>~P<sub>14</sub>が支柱穴と  
考えられる。P<sub>1</sub>~  
P<sub>4</sub>の間隔が1m80  
cmで1間隔であり、  
P<sub>1</sub>とP<sub>5</sub>と間隔  
が2m90cmを測る。

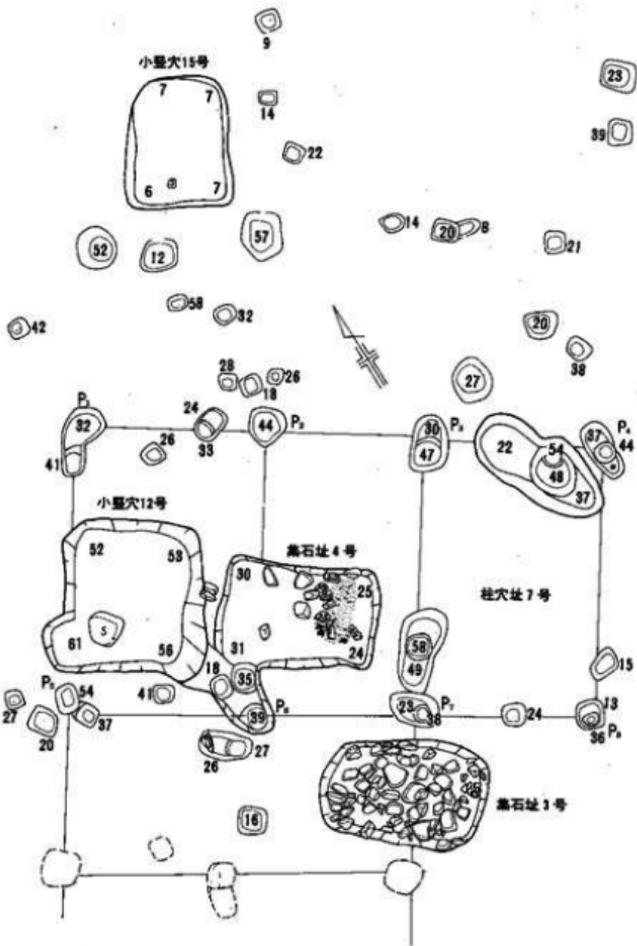
東西3間、南北  
1間4尺の建物遺  
構に、P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>~P<sub>9</sub>  
~P<sub>14</sub>の建物遺構が  
併合する形態をと  
る。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>が2間  
P<sub>5</sub>~P<sub>12</sub>が2間を測  
る。柱穴の深さは  
30~50cmを測り主  
体は40cm前後であ  
る。

小竪穴15号は、  
柱穴址7号の北側  
に発見された。東  
西1m15cm、南北  
1m40cm、深さ7  
cmを測る。平面形  
は長方形、断面形  
は皿形、底はやや  
軟弱であった。小

竪穴としては浅く、北西壁ははっきりしていなかった。

出土遺物はなく、暗褐色土（木炭化物が多く含まれる）に覆われていた。

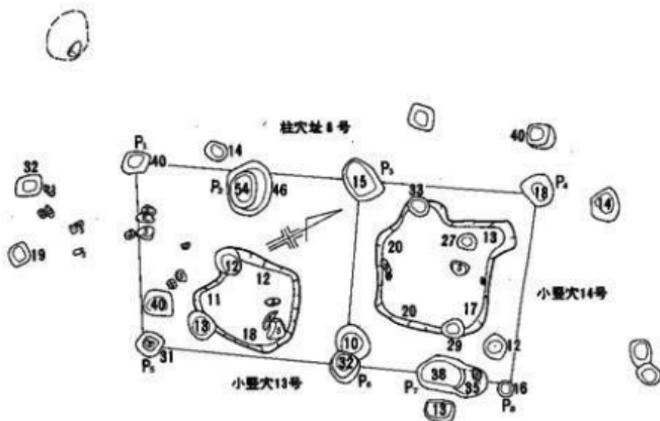
周辺にピットが検出されたが、柱穴址としては把えがたい。



第55図 赤須城址 集石址3・4号と  
小竪穴12・15号、柱穴址7号実測図 (S=5m)

4) 小竪穴13  
・14号, 柱穴址  
8号 (第56図,  
図版 18)

小竪穴13号は  
長軸1m 10cm,  
短軸95cm, 深さ  
12~18cmを測る  
平面形は不整形  
形, 断面形は皿  
形, 底はやや軟  
弱であり, 北東  
壁に自然石の花  
崗岩が3個遺存



第56図 赤須城址 小竪穴13・14号, 柱穴址8号実測図 (S-66)

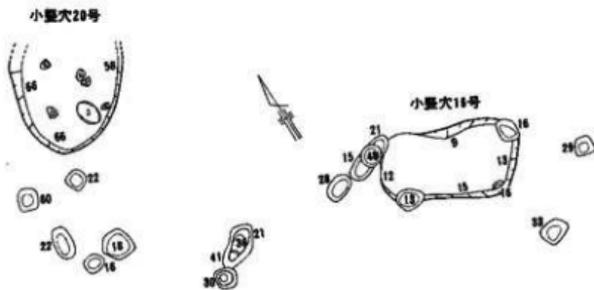
していた。出土遺物はなく, 暗褐色土 (木炭化物を含む) が堆積していた。

小竪穴14号は, 東西1m 20cm, 南北1m 20cm, 深さ20cm以内である。平面形はほぼ方形を呈するが, 西壁・北壁の隅が張り出している。断面形はたらい形を呈し, 底は堅くしっかりしていた。床にビットが3個あり, 27~33cmを測る。床面に人頭大~こぶし大の自然石が4個遺存していた。出土遺物はなく, 暗褐色土が堆積していた。

柱穴址8号は, 小竪穴13・14号を包括する形態で検出された。柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>が挙げられ, P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間隔が2m 30cm, P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の間隔が2m, P<sub>1</sub>とP<sub>5</sub>の間隔が2mである。基本的には6本の柱穴の間に, 相似的にP<sub>2</sub>とP<sub>7</sub>が入り込んだ形をとっている。柱穴は16~54cmの深さを測り, 平均30cm以内である。

5) 小竪穴16・20号  
(第57図, 図版 19)

小竪穴16号は, 東西  
1m 90cm, 南北1m 10  
cm, 深さ9~15cmを測  
り, 南壁寄りが深くな  
っている。北西壁以外  
の壁隅にビットがあり  
13~16cmの深さを測る。

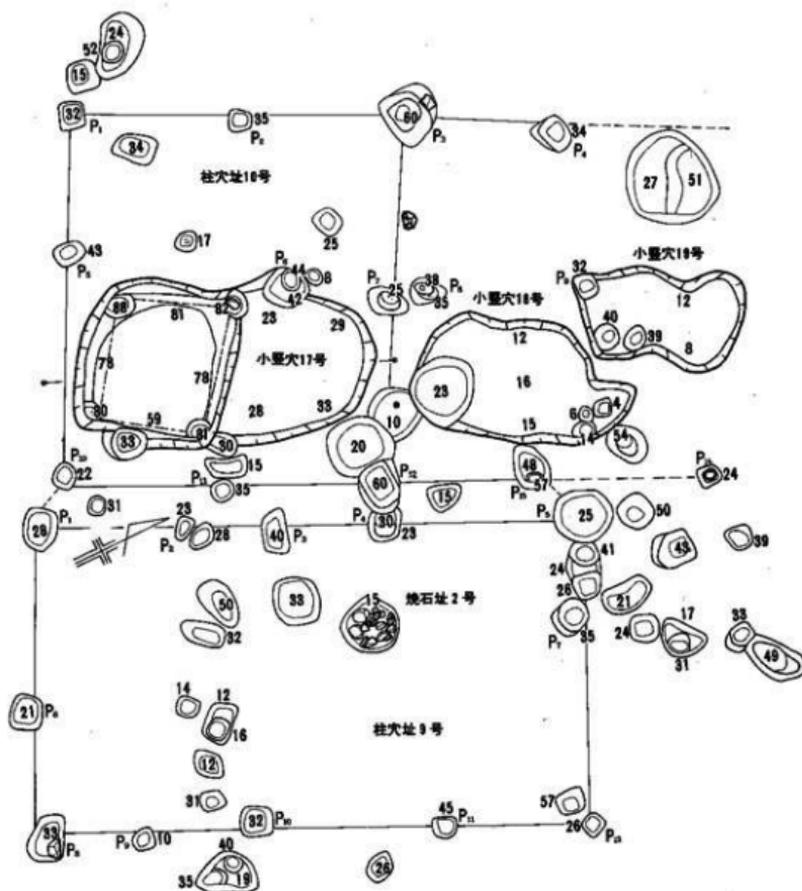


第57図 赤須城址 小竪穴16・20号実測図 (S-67)

平面形は長方形、断面形は皿形、底はやや軟弱である。出土遺物はなかった。

小竪穴20号は、調査区の北隅に位置し、北側半分は土手の為、調査ができなかった。南北壁定2m20~30cm、東西1m60cm、深さ58~66cmを測る。平面形は楕円形を呈すると考えられ、断面形はたらい形を呈するであろう。底は堅くしっかりしていた。底には自然石が6個遺存していた。暗褐色土（木炭化物を含む）に覆われ、出土遺物はなかった。

小竪穴16・20号の周辺にピットが検出されたが柱穴的要素は薄いと考えられる。



第58図 赤須城址 小竪穴17~19号、柱穴址9・10号、焼石址2号実測図(S一六)

## 6) 小竪穴17~19号, 柱穴址9・10号, 焼石址2号(第58図, 図版18)

小竪穴17号は, 東西1m70cm, 南北1m65cm, 深さ59~81cmを測る。各壁の四隅にビットがあり, 80~88cmを開口部より測る。平面形は方形, 断面形はすりばち形, 底は堅くしっかりしていた。覆土は上層に黒色土一暗褐色土, 中層に黄褐色土と黒色土の混土, 下層に暗褐色土, ロームふらん土が, 整層をなして堆積していた。出土遺物はなかった。

さらに本小竪穴の北側に半楕円形の張り出しが設けられていた。深さ23~33cmを測り, 断面形はたらい形を呈する。

小竪穴18号は, 小竪穴17号の北側すぐ近くに検出された。長軸2m30cm, 短軸1m30cm, 深さ12~16cmを測る。平面形は不整形円形, 断面形は皿形を呈し, 底はやや軟弱であった。南壁に直径70cm, 深さ23cmの円形のビット, 北壁に直径20cm前後, 4・6・14cmの深さのビットが検出された。覆土は暗褐色土で満されていたが, 出土遺物はなかった。

小竪穴19号は, さらに北側に検出された。長軸1m70cm, 短軸1m, 深さ8~12cmを測る。平面形は不整形円形, 断面形は皿形, 底はやや軟弱であった。南壁に直径25cm前後, 深さ32・3940cmのビットが検出された。出土遺物はなく, 暗褐色土が堆積していた。

柱穴址9号は, 小竪穴17~19号の東側に検出された。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>12</sub>の12本が考えられる。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の間の長さが5m80cmで3間半, P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>の間の長さ3m60cmで2間であり, この規模の建物遺構が推定される。西側の柱穴址10号と結合するかいなかは明確ではない。柱穴の深さは10~40cmと様々であるが平均30cm前後である。

柱穴址10号は, 小竪穴17~19号を包括する形態で検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>14</sub>が主柱穴として考えられる。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の間隔が5m40cmで3間弱, P<sub>1</sub>~P<sub>10</sub>の間隔が3m80cmで2間強であり, この規模の建物遺構が考えられる。柱穴は22~60cmの深さを測り, 平均35~40cm位である。

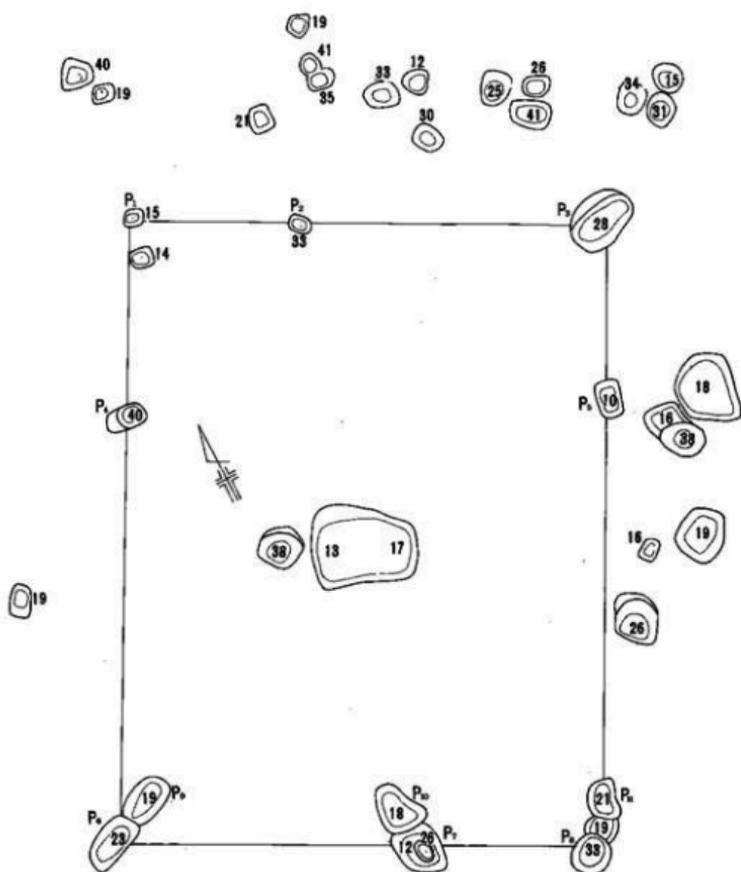
P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>とP<sub>14</sub>は, 直線的な配列や対象柱穴をもたないため, はっきりとは位置づけられない。

## 7) 柱穴址11号(第59図, 図版16)

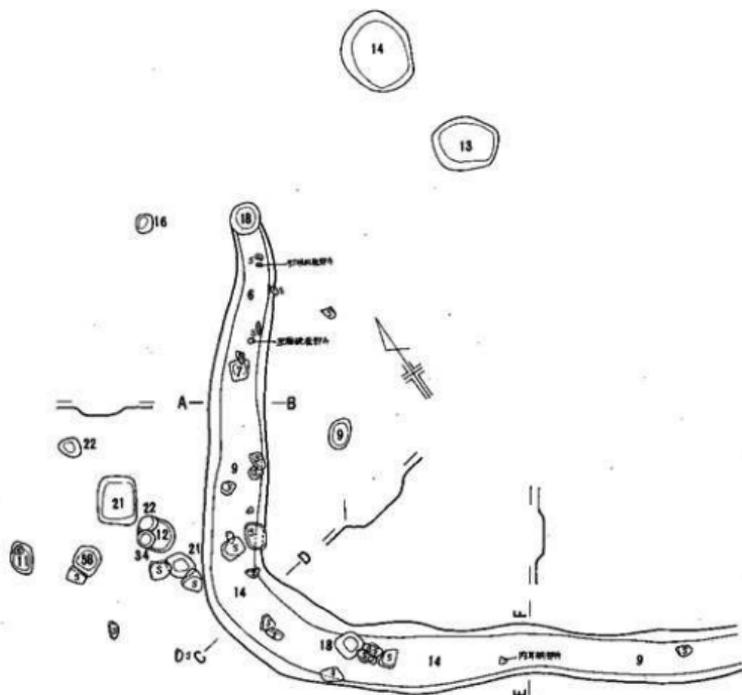
柱穴址11号は, 調査地区内南西隅に検出された。柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>11</sub>の11本が相当すると考えられる。P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>の間が1m80cmで1間, P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>の間が3m20cmで1間5尺弱を測り, P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の間が2m10cmで1間1尺, P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>の間が4m50cmで2間半を測る。東西1間5尺弱, 南北3間4尺の建造物が推定される。柱穴の深さは10~40cmを測り, まちまちであるが, 平均30cm前後が主である。

また, P<sub>6</sub>~P<sub>8</sub>に対してやや内側に接してP<sub>9</sub>~P<sub>11</sub>が遺存し, 補助柱穴か拡張の前の柱穴かと考えられる。柱穴の囲いの中に小竪穴ともとれるビットが, 南北85cm, 東西1m10cm, 深さ13~17cmの規模で検出された。

なお, この柱穴址の東・北側に柱穴とも思われるビットが存在するが関係は, はっきりとはつかめない。



第59图 赤須城址 柱穴址11号实测图 (S-6b)



第60図 赤須城址 溝状遺構1号実測図 (S=北)

### 8) 溝状遺構1号 (第60図, 図版19)

溝状遺構1号は、調査地区の南東隅より検出された。南西隅を基点として南北、東西にのびL字状を呈する。

A-Bの断面で上巾60cm、底巾38cm、深さ8cmを測る。断面C-Dで、上巾78cm、底巾50cm、深さ14cmを測り、断面E-Fで、上巾52cm、底巾34cm、深さ8cmを測る。

北端には直径34cm、深さ18cmのピットがあり、南に向かって深さ7cm、深さ18cmのピットがある。

深さは一定の深さをもって傾斜するのではなく、L字状に曲った地点が最も深くなり、その両側はやや浅くなっている。

出土遺物は、第60図のように、北から底面上に、灯明皿底部片、灰釉碗底部片、内耳土器底

部片が出土している。

さらに、直径8cm前後から、人頭大位の大きさの花崗岩自然石が底面に遺存していた。

### 9) 室状遺構 2号 (第61図, 図版 19)

室状遺構 2号は、溝状遺構 1号の北東域に検出された。

開口部は、長軸2m40cm、短軸1m70cmを測り長方形を呈し、底部は、長軸2m、短軸96cmを測り、同じく長方形を呈している。断面は、西壁でテラスをもち、東壁で開口部より内に掘り込んでいて、袋状を呈する。

覆土は暗褐色土(ロームブロックと木炭化物を少々含む)で覆われ、その中には遺物は含まれていなかった。

開口部北側には、すし離れて盤状の人頭大位の花崗岩自然石が遺存していた。(小原晃一)



第61図 赤須城址室状遺構 2号実測図 (S-6b)

## 5. まとめ

赤須城址は、駒ヶ根市内に存在する城址の中で最大の規模をもつもので、宮沢川と古田切川により開析された河岸段丘上に位置する。その規模は、南北600m、東西600mを測り、総面積15,000㎡をおおよそ占める。

今回の調査は、城上げ井に沿って、また平行して本丸へと通じる縦堀の新発見と、その堀の上端に位置する生活の跡—住居址、柱穴址、小竪穴等—の検出、さらに、8本確認されている横堀のうちの第6番目の堀の調査、その東域の生活の跡が検出された。

出土遺物の量は、多くはなかったが、生活跡—集落跡の年代を考察できうる資料が得られた。

各遺構の検出により、「長野県 上伊那誌 歴史編」に掲載されている赤須城址の実測図と各域内の地割を対照させると、西より、室屋(むろや)、武家屋敷址を調査したことになるが、実際には、掲載の地割図より、室屋・武家屋敷址は東へ寄っていることが判明した。

縦堀の規模は、東西150m、南北3mを測り、深さは80cm～1m30cmを測る。北側の台地が南側より1m近く高くなっている。堀はあまり蛇行せず、横堀No.6へ通じる。堀底には花崗岩がところどころに遺存し、砂の堆積はあまり多くはなかった。

住居址は横堀の西域に1軒、東域1軒、計2軒が検出された。西域の1軒は、極めて簡単なもので柱穴もはっきりしないが、東域の1軒は、竪穴住居の構造を保持し、カマドも伴ってい

たが、火災を受けたため、木材の炭化物が遺存していた。第1号住居址の居住推定の年代は、室町時代から安土桃山時代であり、第2号住居址の居住の年代は、それよりさかのぼるであろう。

小竪穴は、計20ヶ所検出され、一定の統一性を見ないが、全体的には、方形あるいは長方形の平面形を呈し、断面はタライ状が多い。小竪穴の中で、第4号小竪穴は、底面に8本の柱穴を持っていたのが注目される。貯蔵庫的な性格が強い。

集石址は、計4ヶ所検出され、いずれも、長方形を呈し、花崗岩・砂岩の自然石が堆積していた。

柱穴址は、11号まで検出され、大きさはまちまちであるが、尺貫法に基づいたおおよその規則性が観察できた。各々が単なる柱穴址ではないので、今後、生活跡としての柱穴址を再度、規模・柱穴の配置・居住の性格等を総合して検討し、考察を加えなければならないと考える。

焼石址は、横堀の東域に2ヶ所検出され、割りと小さなピットの中にすすが付着した焼石がぎっしりつまっていた。居住の中での火たき場であったと考えられる。

この他かに、室状遺構が2ヶ所検出され、1ヶ所は、横堀No.6の西壁に伴い、もう1ヶ所は単独で検出された。

また、横堀No.6の東域より溝状遺構が1ヶ所検出された。

以上、赤須城の一部の調査ではあったが、城址の歴史的経過や生活跡—集落跡—・城周辺の地割等の問題を今後も検討して行く為の基礎資料が得られた。

調査終了後、限られた整理作業期間と人的問題等により、十分な報告とは言いきれないが、精一杯やっただと考えております。

最後に、調査期間中から整理作業にかけての間、多くの皆さま方から多方面にわたってお世話になったり、御教示をいただいたことに対して、心から感謝申し上げます。

(小原 晃一)

### 第3節 七免川A遺跡

#### 1. 位置及び地形

本遺跡は駒ヶ根市赤穂市場割宮の前にあり、国鉄飯田線駒ヶ根駅の南東2kmの地点に所在する。北西200mの地点には大御食神社（通称美女ヶ森）がある。

再三ふれることになるが、駒ヶ根市赤穂地区は、市の境となっている北の大田切川、南の中田切川によって形成された二つの大きな扇状地の複合した地域である。この両河川に、はさまれた赤穂地区は更に古田切川、鼠川、上穂沢川などの幾つかの小河川が東流して天竜川の支流となって注ぎ、田切地形を造っている。

本遺跡は七免川の左岸の中段段丘上にあり、北側はさらに高い段丘がある。七免川との比高は20mで標高640m前後を測る。

遺跡は現在水田であり、南の七免川に向ってやや急傾斜でのぞむ。伊那礫層を基盤としており、層位は次のとおりである。

第Ⅰ層—表土（暗褐色）	第Ⅵ層—黒色土（炭含む）
第Ⅱ層—地場（黄褐色）	第Ⅵ'層—黒褐色土（炭・ローム粒含む）
第Ⅲ層—埋土（暗黄褐色）	第Ⅴ層—ローム（黄褐色土）
第Ⅳ層—褐色土（炭・ローム粒含む）	第Ⅶ'層—ロームブロック（黄褐色土）
第Ⅳ'層—茶褐色土（　　◇　　）	第Ⅶ"層—ロームふらん土（　　◇　　）
第Ⅴ層—暗褐色土（　　◇　　）	
第Ⅴ'層—暗黄褐色土（　　◇　　）	（小原 晃一）

#### 2. 調査概要

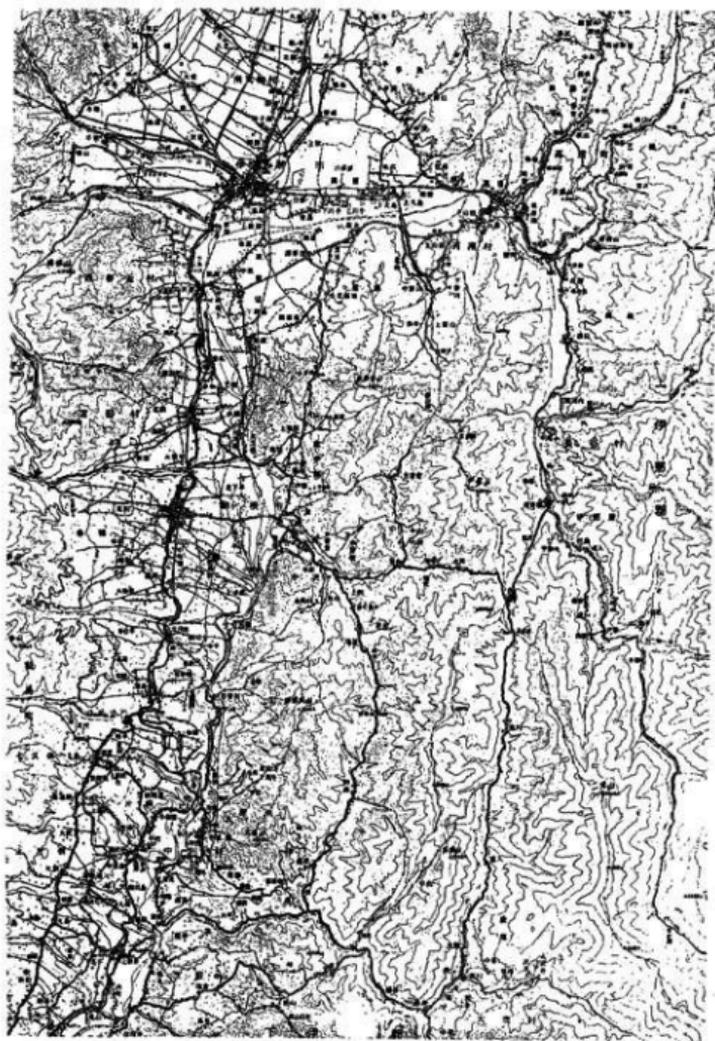
本遺跡は昭和30年前後のフィールド調査によって、その所在は確認され、弥生時代の遺物等が表面採集されていた。今回、県営ほ場整備事業に先立ち記録保存を目的として調査されるに至った。

調査はグリッド方式を用い、段丘基部に基準点をおき、ほぼ南北に2m毎に1、2、3……東西にあ、い、う……とした。試掘を行い遺構の確認を得ながら拡張する方法でのぞみ、最終的には第65図のとうりの発掘調査となった。調査面積は約660㎡である。

遺物は遺構床面及び床直上付辺のものはドットマップ式に図示し取り上げたが、それより上層のものはグリッドごとに層位別に一括して取り上げた。

今回の調査によって明らかとなった遺構は、奈良時代末から平安時代にかけての住居址5軒小竈穴3基、溝状遺構2ヶ所、ピット群であるが、調査日程等の関係から周辺の地区を全面的に発掘調査することはできなかった。

（小原 晃一）



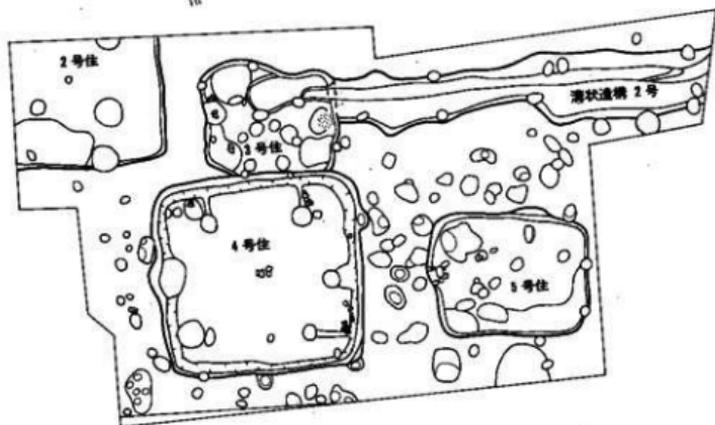
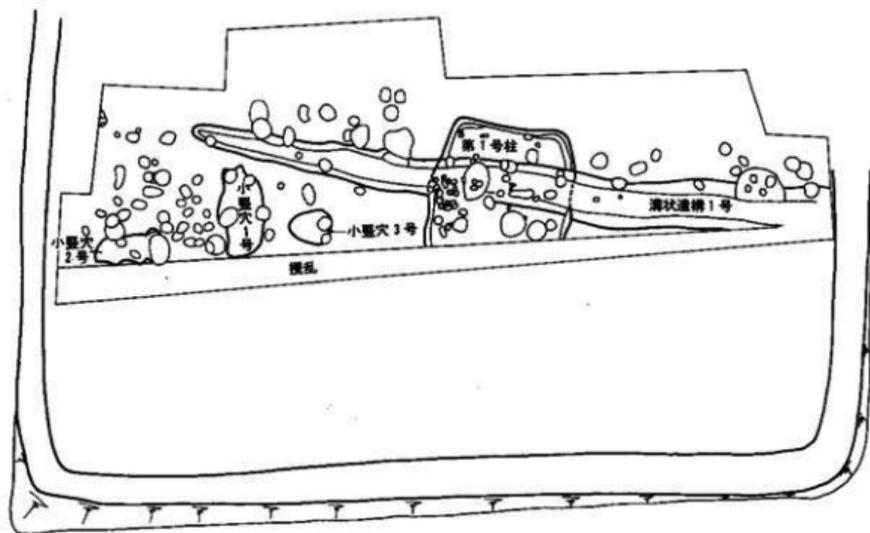
第62圖 七免川A 遺跡位置圖 (S -  $\frac{1}{200,000}$ )



第63図 七免川 遺跡地形図 (S -  $\frac{1}{20,000}$ )



第64図 七免川A遺跡グリッド図 (S =  $\frac{1}{6,000}$ )



第65図 七免川A遺跡遺構全測図 (S- $\frac{1}{200}$ )

### 3. 遺構と遺物

#### 1) 第1号住居址・小墾穴1〜3号・溝状遺構1号 (第65〜68図, 図版 20)

第1号住居址は調査地区の北端, 中位段丘の基部寄りに発見された。溝状遺構1号によって住居址の中央部が東西方向に切られている。

平面プランは正方形を呈すると考えられるが, 南壁は開田時に破壊を受け攪乱されはつきりとしなない。

住居址の規模は, 東西5m10cm, 南北5m位 (残部は4m80cm) を測り, 壁は各々外傾し, 壁高は25〜35cmを測る。

柱穴はP<sub>1</sub>〜P<sub>4</sub>, P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>の6本が主柱穴となると考えられ, 深さ20〜50cmを測り西壁ほど浅くなっている。

北西壁は2段の傾斜であり北東壁には深さ3〜5cmの溝がある。

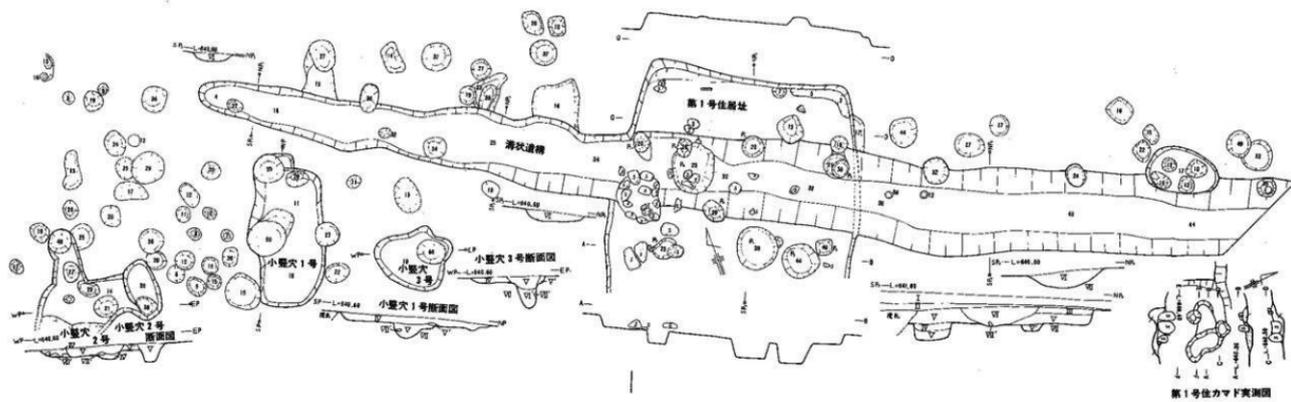
覆土は北壁寄りに埋土が入り込むが, 主は黒褐色が堆積しピット内には暗褐色と黒褐色土が堆積している。

カマドは西壁に接して作られ, 花崗岩の自然石大小15個が集中し, 焼土は基底中央に14cm前後堆積し, 支石が1個中心部に設けられていた。

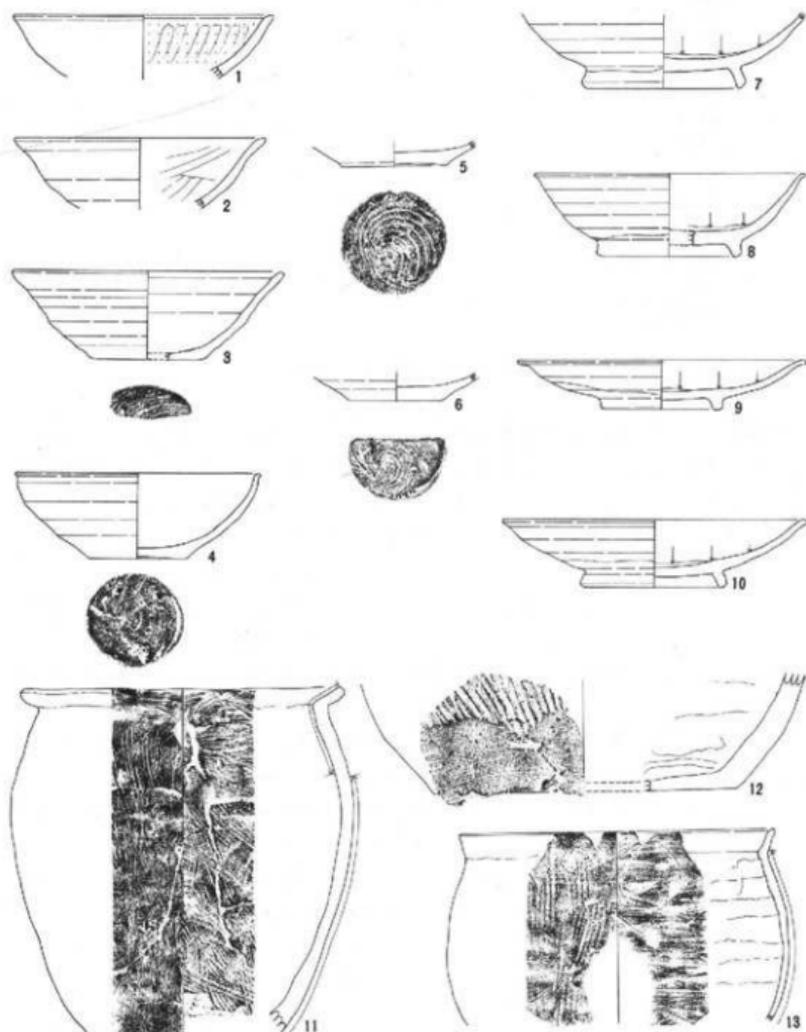
#### 第1号住居出土遺物一覧表

(単位 cm)

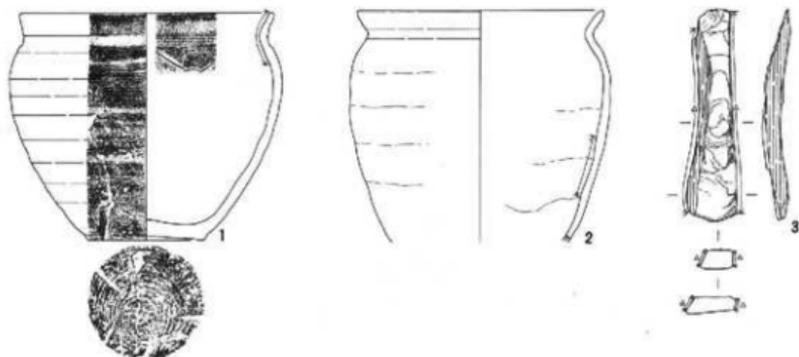
挿図番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
67図-1	土師	環(内黒)	13.4	(-)	(-)	砂粒多し ち密	淡褐色	ややゆるやかに立ち上り外反する。 外面は横なで, 内面へうなで。
2	+	環	13.0	(-)	(-)	細かい ち密	外明延長 内黒褐色	高台が付くと思われる程ゆるやかな立ち上りであり内面はへう削りをしている。
3	+	環	14.0	6.0	4.7	長石多し ち密	内外共に 明褐色	顕著な凹凸をもつ器面整形で底は右回りの糸切りである。内面おこげ付着。
4	須恵	埴	12.6	5.0	4.5	長石多し 雲母少し	内外共に 灰褐色	器壁は減じて立ち上り口唇部は外屈する。 底は左回りの糸切りである。
5	土師	(環?)	(-)	5.4	(-)	長石多し	外赤褐色 内明褐色	底部に少しくびれをもつ。底は右回りの糸切りである。
6	+	(+)	(-)	4.9	(-)	細かい ち密	内外共に 暗褐色	右回りの糸切り底である。
7	灰釉	高台付埴	(-)	7.8	(-)	ち密	内外淡緑 色	高台は一定の厚さで高くや内押する。 釉はあちく高台上端部までかかっている。



第66図 七尾川A遺跡第1号住居址及び同カマド、小壘穴1～3号、溝状遺構1号実測図(S-6)



第67图 七兔川A 遺跡第1号住居址出土遺物 (S-十)



第68図 七免川A遺跡第1号住居址出土遺物（1・2はS=⅓, 3はS=⅓）

挿図番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
67図-8	灰釉	高台付碗	14.0	7.0	4.4	ち白	密内淡緑色 白色	器壁は減じて立ち上りやや急である。釉はあ らく高台上端部までかかっている。
9	*	皿	15.0	6.0	2.6	ち白	密灰褐色 白	器壁はほぼ一定して減じ口唇部は外反する。 軸は細かい。底は左回りのヘラ削り
10	*	*	15.6	7.2	3.6	*	灰白色	外面ヘラ削りで高台部はくびれる。釉は細か い。底は左回りのヘラ削り。
11	土師	小形甕	16.6	(-)	(-)	荒い石英 と雲母	外、暗褐色 内、明褐色	頸部で外屈する。胴はあまり張らない。外面 は縦の内面は斜めのハケ調整。
12	須恵	水甕	(-)	16.0	(-)	荒い長石 堅ち	内外共に暗 黒青色	外面は平行叩き目とヘラ削り。内面は横ナデ 底部は平頭である。
13	土師	小形甕	16.4	(-)	(-)	細かい長 石・石英	内外共に暗 褐色	外面は縦の内面は横のハケ調整。頸部は割り と直に立ち上る。輪積み痕顕著。
68図-1	*	小形鉢	13.2	6.0	12.0	長石・雲 母多し	外、赤褐色 内、明褐色	頸部でゆるやかに外傾する。外面はハケ調整 内面は横ナデ。
2	*	*	12.8	(-)	(-)	*	外、暗褐色 内、明褐色	頸部でやや厚くなって外反する。内外ともに 横ナデ。
3	と石	短冊形	(長さ) 22.4	(中) 3.7	(厚さ) 1.6	砂岩製		図中、右側面の使用痕顕著。裏面は風化が著 しい。

小竪穴1～3号は、第1号住居址の西側の一角より発見された。

小竪穴1号は、南北2m84cm、東西1m32cmの長方形を呈し、断面形は皿状を呈する。深さは、15cm前後で割合浅いものである。東・西・北壁に各々ピットをもち、深さ20～50cmとさまざまである。出土遺物はなく、南壁がやや擾乱していたが全体の状態はつかめた。

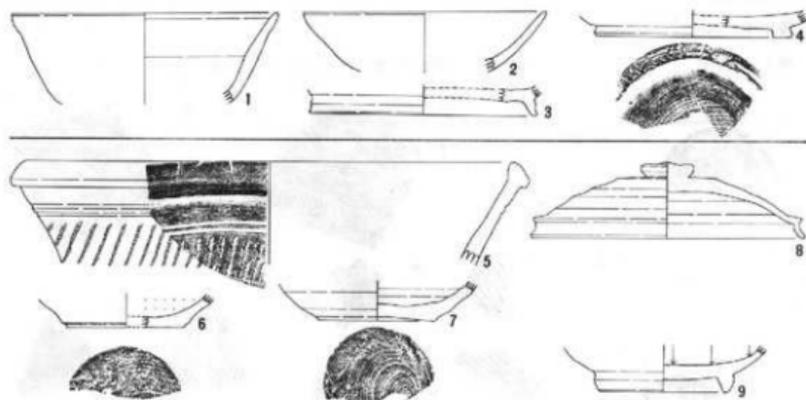
小竪穴2号は、1号の西側2mの所に発見され、ピットの連続のような形態を示し、平面形は不整形であった。深さは1号と同じく15cm前後を測り、壁及び底にピットを8つ併っていた。さらに南壁は開田時に擾乱されていて、全体の状態はつかめなかった。出土遺物はなかった。

小竪穴3号は、1号の東側1mの所に発見された。南北1m20cm、東西1m60cmを測る不整形円形で、深さは10cm前後、断面形は皿状であった。東壁寄りに深さ66cmのピットがあった。出土遺物はなかった。

次に溝状遺構1号であるが、小竪穴1号の北西より南東に向かって延びており、明らかに第1号住居址を切っていた。検出確認された部分の長さが、23m20cmであり巾が、SP<sub>1</sub>-NP<sub>1</sub>で78cm、深さ16cm、SP<sub>2</sub>-NP<sub>2</sub>で巾1m22cm、深さ22cm、SP<sub>3</sub>-NP<sub>3</sub>で巾1m64cm、深さ32cm、SP<sub>4</sub>-NP<sub>4</sub>で巾1m74cm、深さ36cmであり、東に向うに従って巾が広くなり、深さが増していた。

溝状の両側の上端部にはピットが検出されたが相互の関係はつかめなかった。

出土遺物は、須恵器破片が覆土中より20数点出土したが、図上復元できたのは第69図の上段の遺物のみである。1は口径13.8cmで暗灰青色を呈した須恵器の碗であろう。内外面ともに横ナデ調整であった。2は同じく須恵器で口径12.8cmで灰青色を呈した坏(?)と考えられる。内外面ともにナデ調整であった。3は底径11.8cmを呈する高台で、上部には坏か碗の形を成すものと考えられる。色は暗灰青色を呈する。4は同じく暗灰青色を呈する高台で、坏か碗を成すものと考えられる。底径は10.2cmを測る。底部は左回りの承切り底に高台を付けたものである。



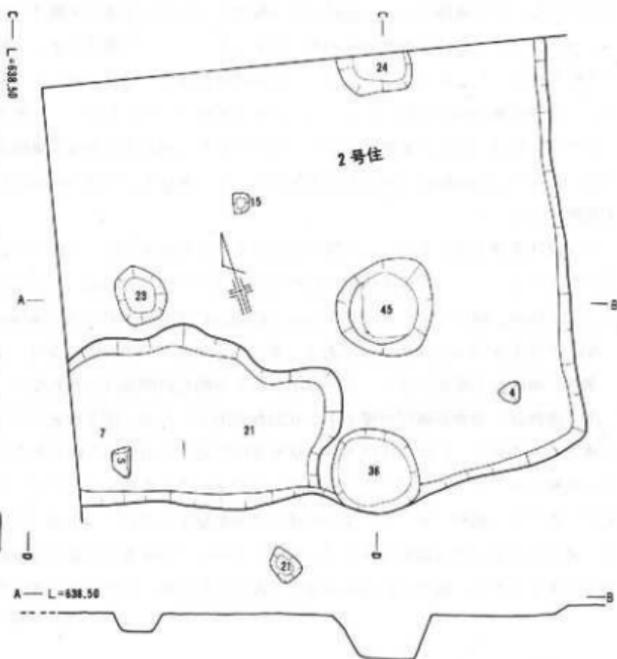
第69図 七免川A遺跡溝状遺構1号(上段)・2号(下段)出土遺物(S-1)

2) 第2号住居址 (第70-71図, 図版 20)

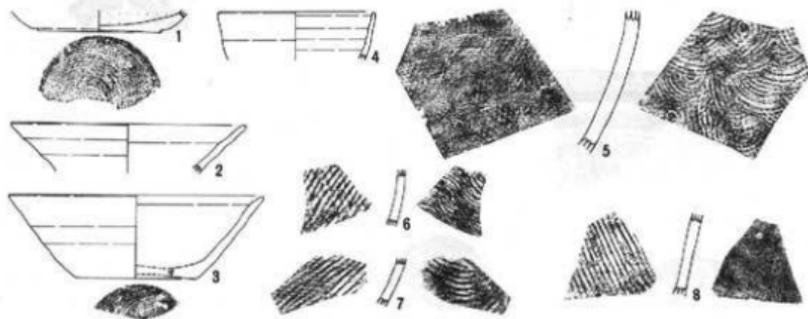
第2号住居址は第1号住居址より比高差2m位の低位の面より発見された。位置は南西に、

20m離れた  
地点である  
平面プラン  
は方形を  
呈するので  
あろうが全  
面的に調査  
できなかった。  
壁は開  
田時に削り  
取られたら  
しく、東壁  
で10cm, 南  
壁で15cm位  
しか残存し  
なかつた。  
柱穴もは  
っきりしな  
い。

床面及び  
覆土中には  
焼土は検出



第70図 七免川A遺跡跡第2号住居址 (S-ab)



第71図 七免川A遺跡跡第2号住居址出土遺物 (S-1)

されなかった。

## 第2号住居址出土遺物一覧表

排四番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
71図-1	土器	環(内黒)	(-)	6.4	(-)	荒い砂粒	外、淡褐色 内、黒色	底部より立ち上り部が肥厚している。底は右回りの糸切りである。
2	＊	環	12.0	(-)	(-)	長石多し	内外灰褐色	器面は一定の巾でナデ調整。器壁はやや急な角度で外傾している。
3	須恵	瓿	13.4	6.2	4.4	＊	内外暗青色	立ち上りよりゆるやかに器壁を減じ口唇はやや外屈する。底は右回りの糸切り。
4	＊	茶入(?)	8.0	(-)	(-)	＊	内外灰白色	内外面ともナデ調整。内面はナデの巾が短く深くで顕著である。
5	＊	甕(?)	(-)	(-)	(-)	長石多し ち密	淡灰緑色	内面は青海波、外面は格子目の叩きを施す。
6	＊		(-)	(-)	(-)	長石多し	灰青色	＊
7	＊		(-)	(-)	(-)	＊	淡灰青色	＊
8	＊		(-)	(-)	(-)	＊	淡褐色	内面は目の細かい青海波で、外面は平行叩き目文を施す。

### 3) 第3号住居址・溝状遺構2号(第72～74図, 図版20)

第3号住居址は第2号住居址の東へ3mの地点より発見された。

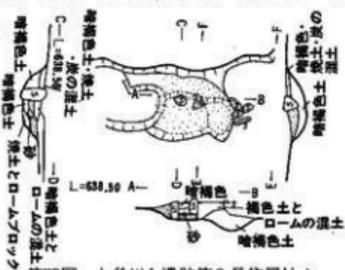
第1号住居址と同じ様に溝状遺構により、東壁の一部が切られていた。

平面プランは東西4m70cm, 南北4mの隅丸の長方形を呈する。壁高は、東・西壁で10m前後を測り、北壁で20cm前後を測り全体に浅い。南壁は第4号住居址により切られている。

柱穴は深さや位置から考えP1～P6が相当する。主柱穴はP1～P6が考えられ、P7・P8は位置的にずれている。深さは20cmから54cmとまちまちであるが、柱穴の底は堅くしっかりとしていた。

カマドは西壁に設けられ、細長い石2個がそで石らしく立っていたがはっきりとしない。

焼土はカマド上面には全体的に遺存し、特に左そ



第73図 七免川A遺跡第3号住居址カマド実測図(S-a)

でに厚く堆積していた。

また、東壁に接してピットの中に10~15cm前後の焼土が堆積していたが、カマドとしては考えにくく、カマドの焼土との関係は明らかではない。

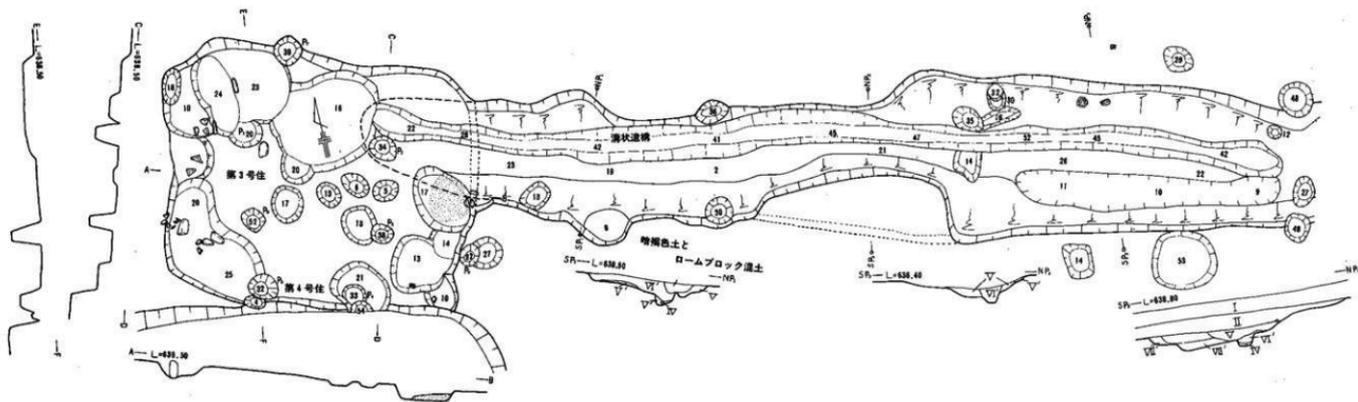
### 第3号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
74図-1	土師	埴(内黒)	11.6		5.5	荒い長石	外、淡褐色 内、黒色	底部は丸味を帯び口唇部は内傾する。 外面は横のヘラ磨き 内面は横のヘラ磨きに縦の暗文入る。
2	+	環(内黒)	13.8	(-)	(-)	長石・雲母、ち密	外、淡褐色 内、黒色	口縁部は外反しやや肥厚する。 内外面共にナデ調整
3	+	+	15.4	(-)	(-)	細かい砂ち密	外、明褐色 内、黒色	外面は凹凸顯著でやや外傾する口唇部をもつ 内外面ナデ調整。暗文入る。
4	+	環	12.6	5.4	3.4	荒い長石 石英	内外共に明褐色	ゆるやかに器壁を減じ口縁は外傾する。 底部は糸切りである。方向不明。
5	須恵	環(?)	(-)	7.2	(-)	長石多し	内外共に灰青色	内外ともにナデ調整である。 底は右回りの糸切りである。
6	+	環	12.6	5.6	3.5	荒い長石 石英	内外共に暗青色	ゆるやかに器壁を減じ口唇部はやや外反する 底は右回りのヘラ切りである。
7	+	環	13.8	5.8	4.2	長石・石英多し	内外共に暗灰青色	内面にはナデ調整痕がはっきりとき、口唇部はやや外反する。右回りの糸切り。
8	土師	甕	19.6	(-)	(-)	長石・銀雲母多し	内外共に明褐色	口縁部は頸部より肥厚し外反する。外面は斜めのヘラガキ、内面は口縁部のみ。
9	灰釉	平瓶				灰白色の胎土	外、淡緑色 内、灰黄色	一部分の破片であるが、黒型14号のものに似る平瓶である。
10	須恵	甕(?)				長石多し 堅ち	内外共に灰青色	外面は格子目の叩き文で、内面は施文・調整がはっきりしない。
11	+	+				+	内外共に淡緑色	外面は平行叩き目文で、内面はこまかい青海波がみられる。

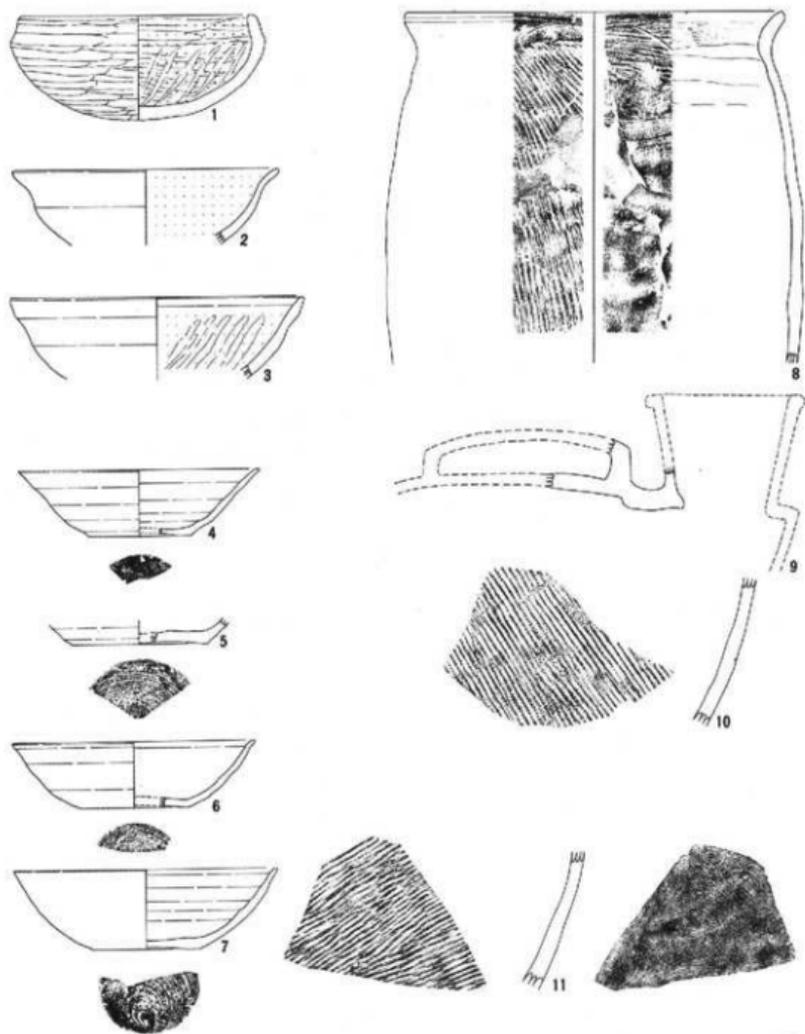
### 溝状遺構2号 (第69・72図, 図版21)

溝状遺構2号は第3号住居址を切り、さらに東へ延びている。

長さは確認できた長さで14m80cm, 巾はSP<sub>1</sub>-NP<sub>2</sub>で2m10cm, SP<sub>3</sub>-NP<sub>3</sub>で2m30cmを測り、深さは45cm前後を測る。さらに東へ延びると考えられる。



第72図 七兔川A遺跡第3号住居址及び溝状遺構2号実測図(S-ab)



第74图 七兔川A 遺跡第3号住居址出土遺物 (S-1)

全体的に見ると、テラスをもち北壁寄りに最深部を設けている。壁寄りに南北に対照してピットが設けられているのが注目される。

溝の覆土は、暗褐色と黒色土が主体を占め、木炭化物は遺存していたものの焼土等は遺存していなかった。

出土遺物は第69図下段のものである。

溝状遺構2号出土遺物一覧表

挿図番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
69図-5	灰輪	水甕	25.4	(-)	(-)	長石多し ち密	灰白色	口唇部は内傾し折り返しで肥厚する。 2条の平行線と縄文が施されている。
6	土師	環	(-)	6.0	(-)	細かい長 石	外、黄褐色 内、黒色	底部上端はヘラ削りでくびれている。 底は右回り糸切りである。
7	須恵	環	(-)	6.0	(-)	長石多し	内外共に灰 青色	内外共にナデ調整。 底部は左回り糸切りである。
8	◇	蓋	14.2	(-)	4.0	荒い長石	内外共に暗 青色	宝珠径は2.7cm。宝珠より下2段は左回りの ヘラ削り。その他はナデ調整。
9	灰輪	茂	(-)	6.2	(-)	細かい長 石	内外共に淡 緑色	高台はやや外反する。 底は左回りのヘラ切りである。

#### 4) 第4号住居址 (第75~77図, 図版 21)

第4号住居址は第3号住居址の南壁を深く切り込んで発見された。

平面プランは南北7m20cm, 東西7m10cmの隅丸方形を呈し大形の住居址である。傾斜面であるために北壁の高さは50cm前後で南壁の高さは20cm前後を測る。東・西壁は40cm前後を測る。

周溝は全周し北壁側は浅く3cmを測り、東・南壁は17cm前後を測る。なお、この周溝からP1~Psには溝が伴い注目され、雨水等を排水する補助的な溝と考えられる。

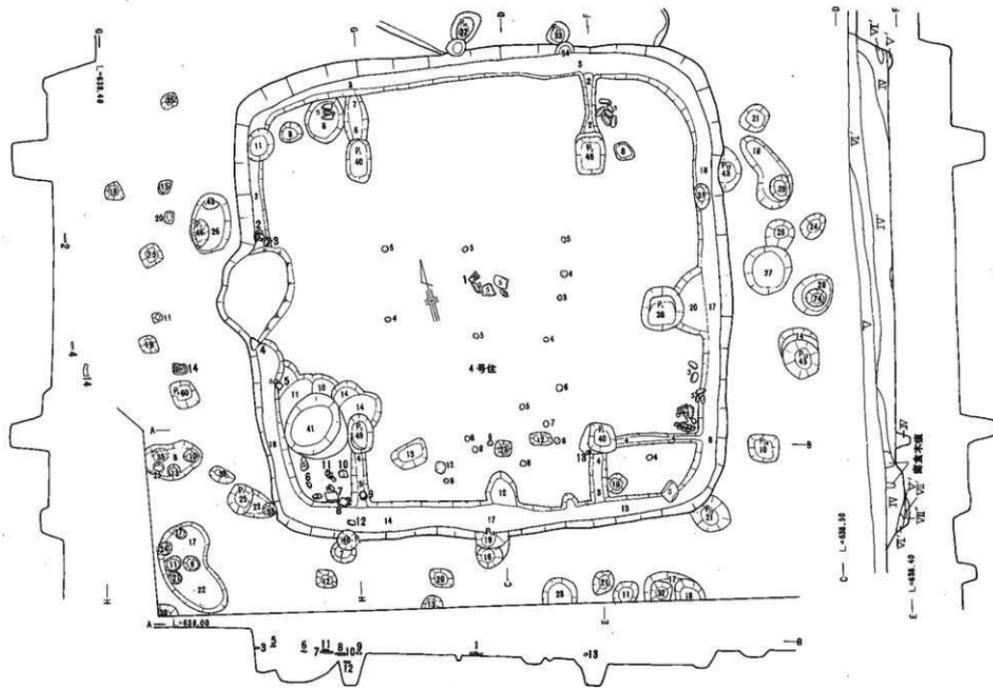
柱穴はP1~P6まで考えられ、住居址の床面のP1~Psが主柱穴である。さらに、P6~P16は上屋を支える支柱穴であろう。

床面は全面的に叩き床で堅くしまっていた。床中央部分には深さ5cm前後の極小さいピットがやや規則的に列をなして18個検出されたことも注意をひく。これは、欄などの内部施設を想起させる遺構であろう。

また、床面上で、北西・北東・南東及び中央部に棒状や盤状の砂岩や花崗岩が配置したごとくに遺存していたことは、住居址内の生産域を暗に示すものかもしれない。

周囲に数多くのピットが存在していたが関係は明確につかめられなかった。

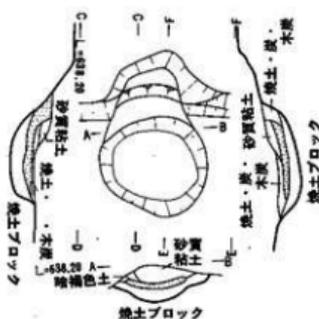
カマドは西壁中央部に設けられ、そこで石等を設けないものであった。



第75図 七免川A遺跡第4号住居址 (S一畝)

第76図の様に基底部は円形を呈し、西壁に造り出しを設け、一段テラスを造っている。焼土は南側及び中間層にまとまって堆積していた。焼土の厚さは5~15cmにわたって堆積し、下層は焼土ブロックと化し、堅くしまっていた。

住居址からの出土遺物は多く、主なものは第77・78図に示したものである。なお、第75図の遺物番号と一覧表及び第77・78図の番号の内、No.1~No.13は一致し、床面出土であり、その他は覆土より出土したものである。

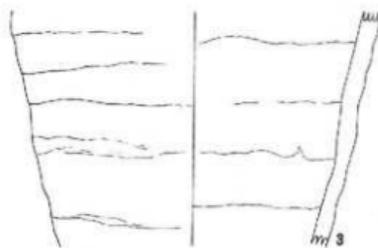
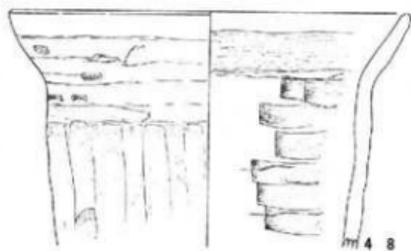
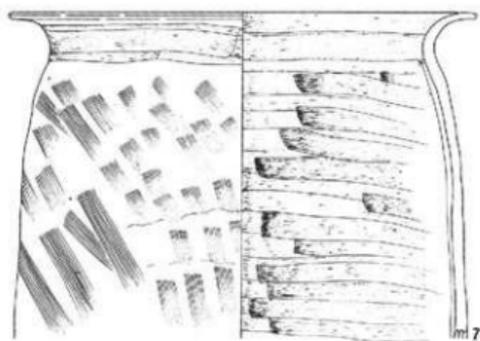


第76図 七発川A遺跡第4号住居址  
カマド実測図(S-ab)

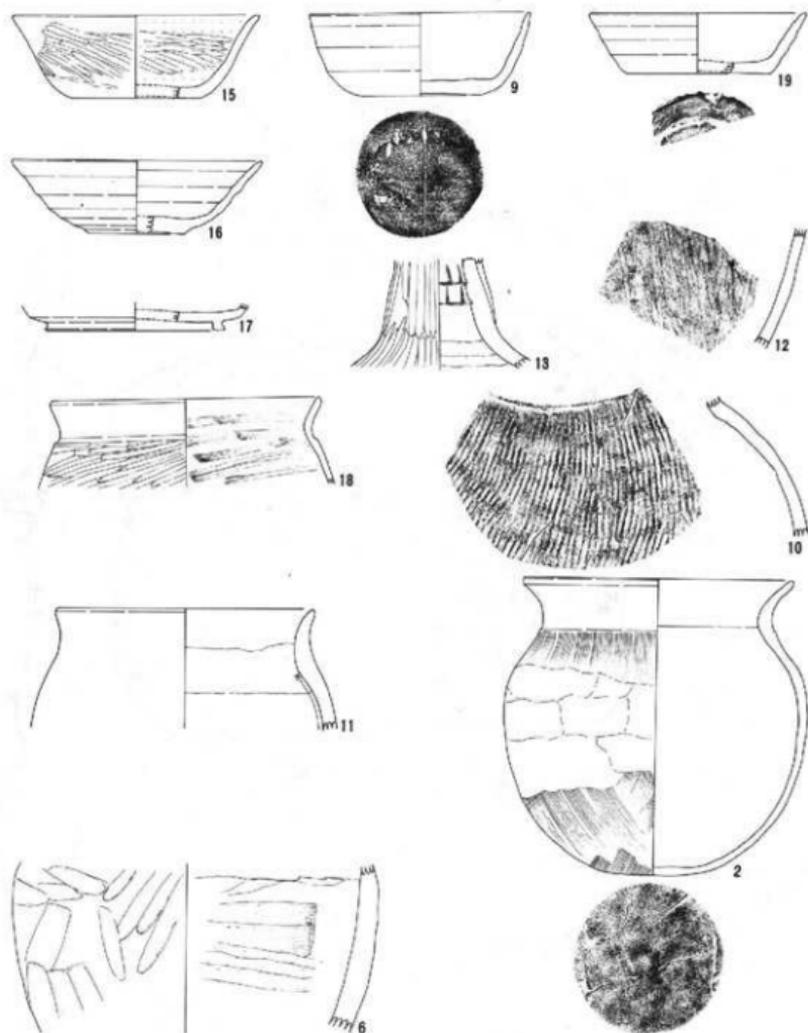
#### 第4号住居址出土遺物一覧表

(単位 cm)

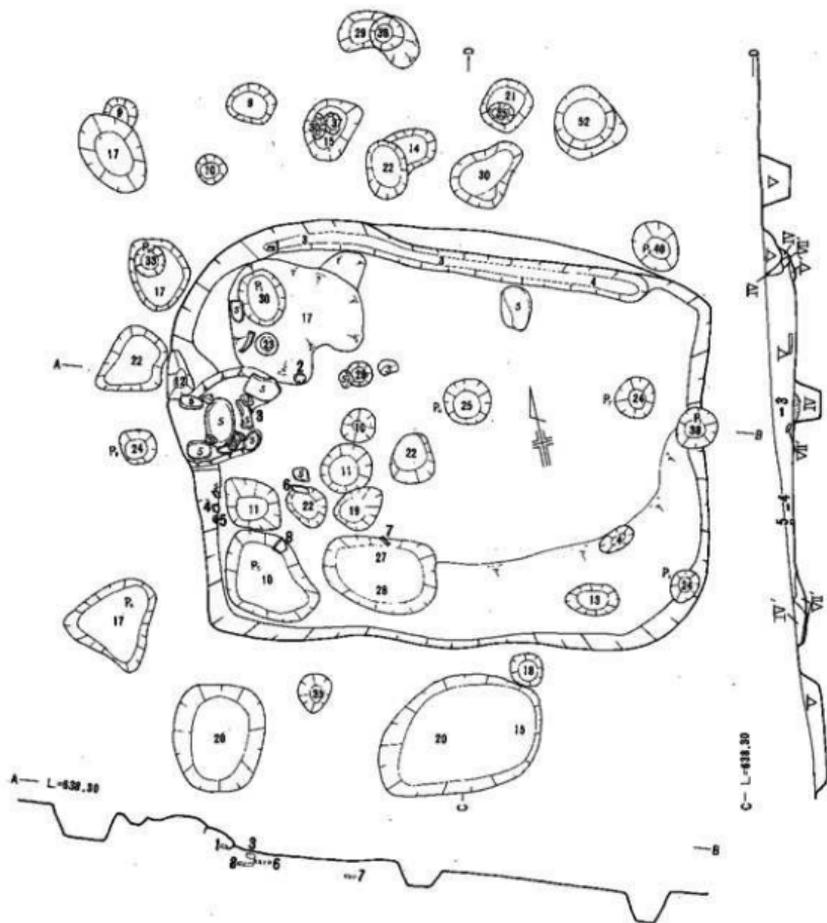
挿図番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
77図-1	土師	甕 (底部)	(-)	6.6	(-)	長石・雲母多し	内外共に淡褐色	内面横のヘラ削り。外面縦と横のヘラ削り。底部は木製瓦痕の後にヘラ削り。
78図-2	*	壺	14.0	(-)	15.6	砂粒多し	内外共に暗褐色	内面は横ナア。外面はハケ調整。頸部は肥厚し口唇部は外反する。
77図-3	*	甕 (胴部)	(-)	(-)	(-)	荒い砂粒	内外共に淡黄褐色	内外面ともに横ナア。輪模み痕は顕著。
4・8	*	甕 (胴上部)	18.6	(-)	(-)	荒い砂粒 雲母	内外共に淡黄褐色	口縁部は「く」の字状に外傾する。外面は縦のヘラナア。内は横ナア。
5	*	甕 (底部)	(-)	9.0	(-)	荒い石英 雲母	内外共に淡黄褐色	内外面ともにナア調整。底部は木製瓦痕。
78図-6	*	甕 (胴部)	(-)	(-)	(-)	荒い長石	内外共に淡褐色	外面は不定方向のヘラ削り。内面は横ナア。
77図-7	*	甕 (胴上部)	24.6	(-)	(-)	荒い砂粒多し	内外共に淡褐色	口縁部は弧状に外反する。外面は口縁部が横ナア。胴部はハケ調整。内は横ナア。
78図-9	須恵	埴	11.4	6.6	4.3	荒い長石 ち密	内外共に淡赤褐色	底部は厚く口唇部はやや外反する。内外面共にナア。底部は横のヘラ削り。
10	*	甕(?)	(-)	(-)	(-)	長石多し ち密	内外共に灰白色	内面は横ナア。外面は平行叩き目。
11	土師	小形鉢	13.4	(-)	(-)	細かい長石・石英	内外共に暗褐色	頸部は肥厚し口唇部はやや外反する。内外面共にナア調整。



第77図 七免川A遺跡第4号住居址出土遺物 (S-子)



第78図 七免川A遺跡第4号住居址出土遺物(S-1)



第79図 七免川遺跡第5号住居址 (S-6)

掉取番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
78図-12	土師	甕 (胴部)	(-)	(-)	(-)	長石・雲母	内外共に明褐色	内面は横ナデ。外面は縦のヘラ削り。
13	*	高台付環 (脚部)	(-)			荒い長石雲母	内外共に淡褐色	外面は縦のヘラ削り。内面は横ナデとヘラ先により離ぎ目を押圧。
77図-14	土師	甕 (底部)	12.8	8.0	(-)	長石・石英多し	内外共に明褐色	内面はヘラナデ。外面はナデ。底部は木葉瓦痕の後、粘土を回りに貼り付け。
78図-15	*	環	13.0	6.6	4.4	長石・石英	外、暗褐色 内、黒色	器壁はゆるやかに減じ口唇部はやや外反。外面はヘラ磨き、内面は横のヘラ磨き。
16	*	環	(-)	5.0	3.9	長石多し	内外共に淡灰褐色	内外共にヨコナデ。底部は厚く、器壁は凹凸が強ゆるやかに外反する。
17	須恵	高台付環	(-)	9.4	(-)		灰褐色	外面ヘラ削り。内面ナデ。底部はヘラ切り。
18	土師	甕 (胴上部)	28.0	(-)	(-)	雲母・石英	内外共に淡黄褐色	顔部に稜をもち口唇はやや外傾する。外面はヘラ削り。内面は横のヘラナデ。
19	須恵	環	11.2	7.4	3.2	荒い長石	内外共に灰白色	外面の器壁は凹凸が著しい。口唇はゆるやかに外傾。内外共にナデ調整。底ヘラ。

### 5) 第5号住居址 (第79~80図, 図版 21)

第5号住居址は第4号住居址より2m50cm離れて東側より発見された。

平面プランは東西5m60cm, 南北4m40cmを測り隅丸の長方形を呈する。深さは北壁で30cm, 南壁で10cm, 西壁で30cm, 東壁で8cmを測る。地形が北から南へ傾斜しているため北壁が深い。

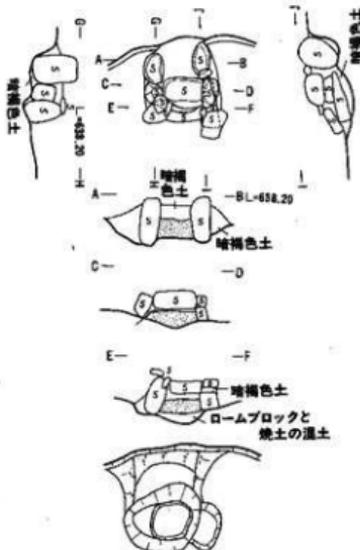
柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>10</sub>まで考えられるが、主柱穴はP<sub>7</sub>・P<sub>1</sub>以外は判別しがたかった。

周溝は北壁にのみ設けられ、深さ3~4cmを測る。

床面は南壁寄りが軟弱であり、北壁寄りは堅かった。

P<sub>6</sub>の覆土の中には5cm前後の焼土の堆積があった。

全体的にみて西壁寄りにピットや凹みが集中していたが柱穴ほど深くはなかった。



第80図 七尾川A遺跡第5号住居址カマド実測図(S-16)

カマドは西壁に設けられ、しっかりした石組みのカマドであった。天井石も遺存の状態が非常に良かった。焼土の堆積は石囲いの中の下層部に15cm堆積していた。(小原 晃一)

### 第5号住居址出土遺物一覧表

(単位 cm)

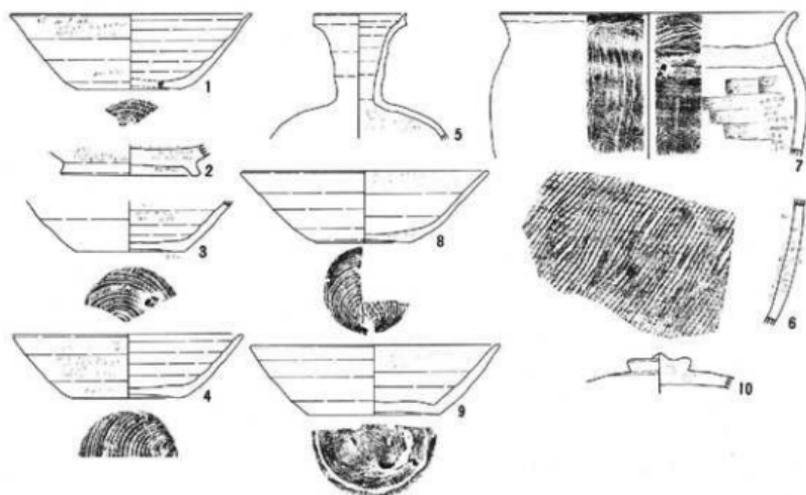
挿図番号	種別	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	器形及び整形の特徴
81図-1	須恵	環	12.6	5.2	4.0	長石多し	内外共に暗 灰青色	底部上端に凹凸著しく器壁を減じる。内面ナデ。外面ヘラ削り。底は右回糸切り。
2	土師	高台付環	(-)	7.2	(-)	*	内、内 黒 外、黄褐色	高台の貼り付けは底部に対しずれている。底は右回糸切り。
3	須恵	環	(-)	5.6	(-)	*	内外共に暗 青色	内外共にナデ調整。底部右回糸切り。内面は凹凸が顕著。
4	*	環	11.8	5.6	3.4	*	内外共に暗 灰青色	外面ヘラ削り。内面ナデ。底部は右回糸切り
5	陶器	小形壺	4.8	(-)	(-)	細かい長 石	外、茶褐色 内、灰緑色	内面共にナデ調整。頸部よりやや外反しながら口縁で稜をもち口唇はやや外反。
6	須恵	壺(?)	(-)	(-)	(-)	濃い長石	外、灰褐色 内、*	内面は細かい不明確な青海波で、外面は格子目文である。
7	土師	小形甕	15.4	(-)	(-)	長石・雲 母	内外共に明 褐色	頸部で器壁を減じ外反し、口唇は肥厚する。外面縦のヘラナデ、内面横位ナデ。
8	須恵	環	12.8	4.8	3.8	長石多し	内外共に灰 青色	底中心部は薄く端で厚くなり外傾しながら器壁を減じる。底は右回糸切り。
9	*	環	13.0	6.8	3.7	*	内外共に淡 赤褐色	底は「く」の字に折れ、口唇部はやや外反する。外面はヘラ削り。内面はナデ。
10	*	蓋	(-)	(-)	(-)	*	内外共に暗 青色	宝珠は著しい凹凸をみせる。ヘラ削り整形。

### 6) まとめ

七免川A遺跡からは、奈良時代から平安時代にかけての住居址が5軒、溝状遺構が2基、小竈穴が3基が発見された。同じ等高線上にあり、本遺跡より東へ300mの地点にある七免川B遺跡も同時期の遺跡である。一つのまとまりの中での集落として考えられる。

出土遺物は土師器と須恵器が半々程出土し器形では環、甕が主体を占める。

須恵器は主に美濃須衛産と考えられ、灰輪は瀬戸産と考えられるが、須恵器の中には極めて荒い長石や石英を含むものがあり暗青色を呈し、明らかに美濃須衛産とは考えにくいものがあるので今後さらに資料検討を要する。(小原 晃一)



第81图 七免川A 遺跡第5号住居址出土遺物 (S-1)



図

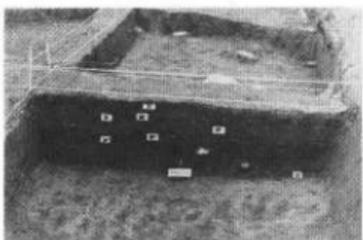
版

日向坂遺跡  
赤須城遺跡  
七免川A遺跡





図版1 日向坂遺跡遠景（上段は北東より、下段は西より）



図版2 日向坂遺跡調査風景と第1号住居址



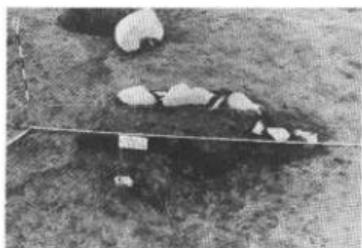
图版 3 日向坂遺跡第 1 号住居址出土遺物



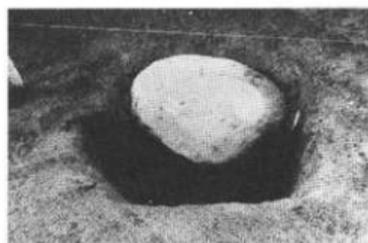
図版4 日向坂遺跡第2号住居址



图版 5 日向坂遺跡第 2 号住居址出土遺物



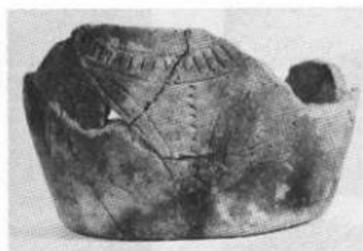
図版 6 日向坂遺跡第2号住居址出土埋壺



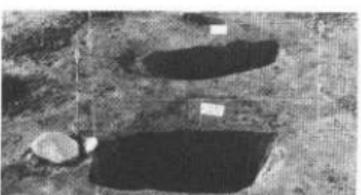
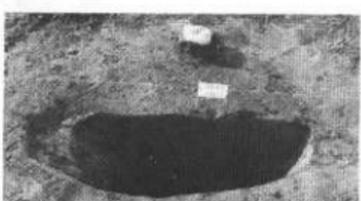
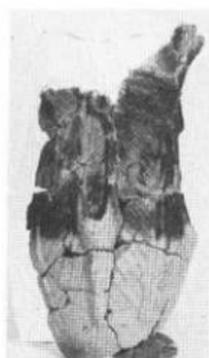
図版7 日向坂遺跡第3号住居址(左上)と単独土塚(中段)、単独埋甕(下段)



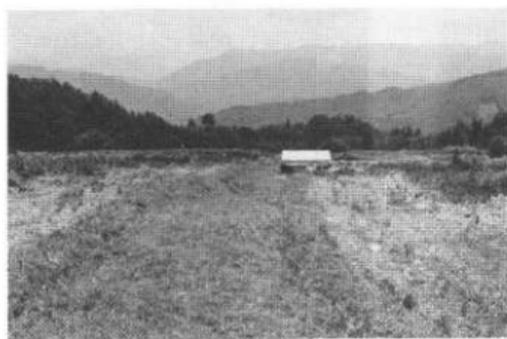
图版 8 日向坂遺跡第4号住居址と出土遺物



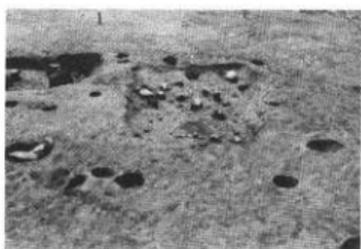
图版9 日向坂遺跡第4号住居址埋裏



図版10 日向坂遺跡1号～6号土坑及び1号土坑出土土器



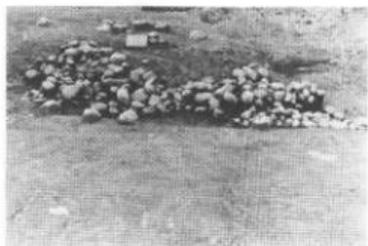
圖版11 赤須城遺跡遠景及び概観全景



図版12 赤須城遺跡第1号住居址及び小竪穴1～5号



图版13 赤須城遺跡縦堀断面 (No.1・2・3・5・7・8)



图版14 赤須城遺跡視壘断面 (No.5・6・9・12)



図版15 赤須城遺跡横堀No.6 断面及び遺物出土状態